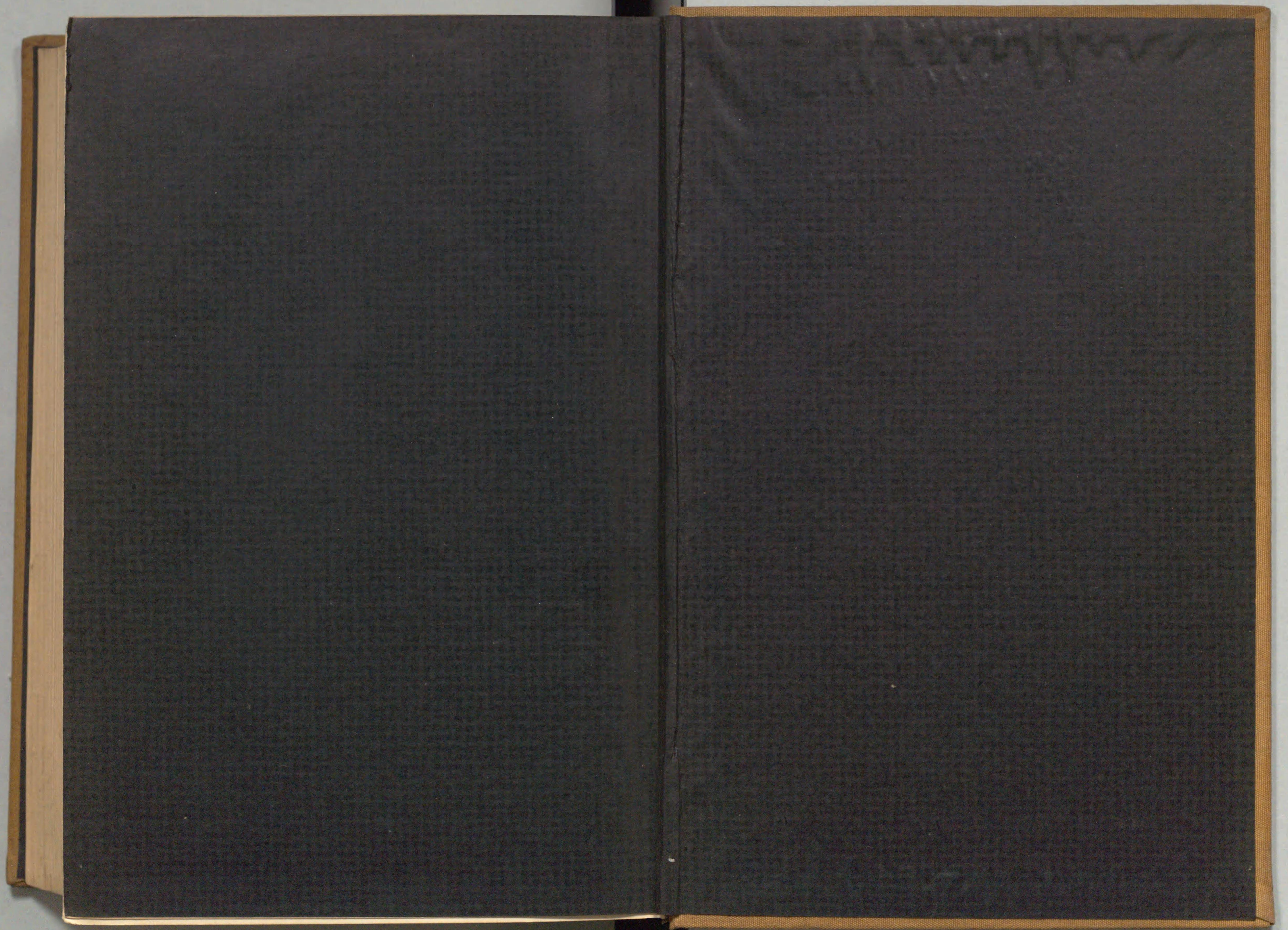


910.2  
M565k



00111882







綜 合  
國 文 學 概 說

全

弘 前 高 等 學 校 教 授

三 浦 圭 三

著

東 京  
文 教 書 院



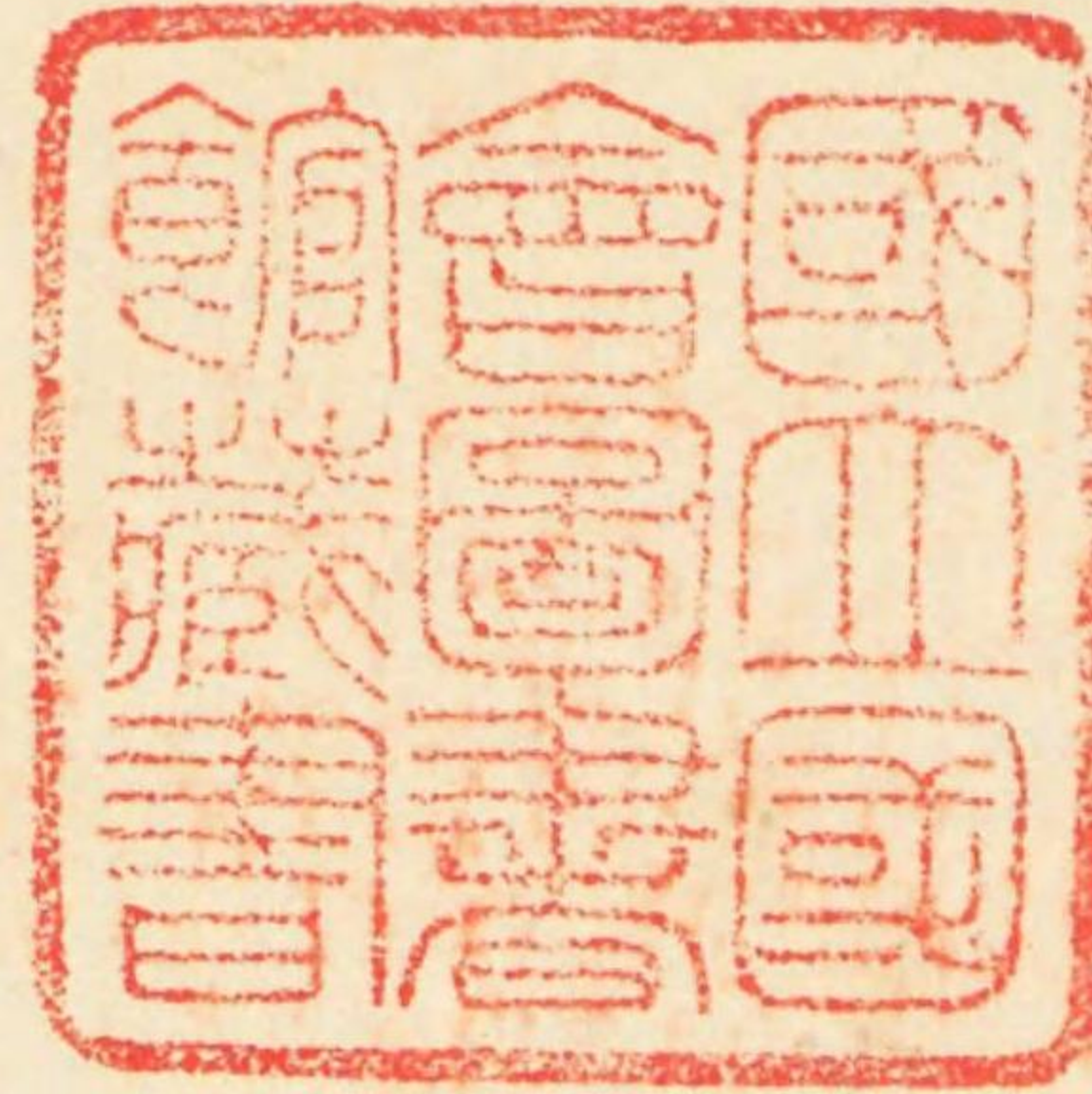
序



11885



910.2M565R



1-11882

本書は前著綜合日本文學全史の姉妹篇として  
矢張主として

一般國文學教授者

文部省檢定國語科受験者

斯學研究の學生諸子並びに

斯學に興味を有する紳士淑女

の爲めに、前著卷頭緒論の一項「國文學の特質」(三―四)を採つて之を敷衍し、彼の著に  
言ひ洩らしたることや、其後思ひ得たことをあけ、主要作品を引例して時に鑑賞批評  
を加へつゝ、前著が各時代を基礎とし、散文韻文等の形式を分類として、國文學の  
横斷面を示したに對して、本書は各事項を基礎とし、音調美、自然美、國體美、戀愛宗教、  
滑稽等の思想を分類として、國文學の縦斷面を示したもので、この縦横二面によ  
つて大體我が國文學史網を明らかにしたいと思つたのです。

敬虔な佛具師が御門跡の珠數をつくるに水晶の一顆々々を粒選りにするやう  
な心持で、主要作品の一つ一つを味ひつゝ選り出しましたが、何分にも國文學はそ  
の質が多様でありその量が豊富でありますから、矢張採擇宜しきを得なかつたり、



解釋批評の正を失したりした點も尠くありますまい。これ等は偏に將來補正を加へるまでの寛恕を願つておきます。

今にして顧みますと、私の斯界學徒としての既往は餘りにも迂餘曲折した難路でありました。その間には無益な焦燥や愚かしい努力が随分多かつたと思ひます。で、せめて今後皆様斯學の行路の上には幸あれかしと祈ること切なると共に、この書がさうした使命の幾分をでも果してくれたならば、私の満足これに越すものはないのであります。

北の國——こゝ弘前では、今、花の五月が過ぎて方に新緑の佳季に入りました。滴るやうなアカシヤのさゆらぎ、そゝるやうな郭公の叫び、それは私に向つて勇猛不退轉の宣傳と受けとれます。人々や環境をかういふ風に自家勉學の興奮劑に看做すことは、清淨な利己主義者として寧ろ望ましいことではありますまいか。努めませう、勵みませう。陳いやうですが、彼の董仲舒が名言事は強勉にありといふ信條の下に。

大正十四年六月一日

著者識

## 目次

第一章	緒言 國文學の特質	一
第二章	我邦上下三千載、其間に發達せる文學作品の千種萬様なる到底一律を以て評すべからずと雖も、概して謂へば、其形式は優美に其思想は纖巧なり。	三

照一四	織細巧緻一八九
國文學の深み一三	國文學の起源一四
國文學の種類一五	優美一〇
漢文との對	

「秋風の吹上に立てるしら菊は花かあらぬか浪のよするか」の鑑賞一八九 「うすく濃き野邊の緑の若草にあとまで見ゆる雪のむら消え」の鑑賞一三三 「汲む人の少きほどぞ知られけり椗の葉沈む山の井の水」の鑑賞一三三 源氏物語更衣退出の一節一三三 増鏡むら時雨の一節一三四 平家物語卷八・山門御幸の一節一三五 「古池や蛙飛込む水の音」の鑑賞一三六

目次

一



第三章

我國語は言語學上所謂漆着語にして、各語を連結するに「てには」を以てす。是漢文の如き生硬を免れて、優美なる所以の一なり。加之各詞母音を含むこと甚多く、音調隨て流麗和諧なり。

漆着語—三 流麗和諧、各音の通性—三 國文の音調美—三

- 一、母音を多數に含むこと—三六
- 二、ア列音を多く含むもの—三九
- 三、頭韻脚韻に近い反復法—四〇
- 四、返し若くは繰返し—四一
- 五、秀句法—四二
- 六、拍子調—四三
- 七、對句—四四
- 八、枕詞序詞—四五
- 九、接頭語—四六
- 一〇、所謂清音の多いこと—四六
- 一一、音數律—四七
- 一二、附 朗讀文に就いて—四七
- 新體詩「山村水廊」朗讀詩—四五

第四章

又我邦は、山紫に水清く、柳綠花紅の春の朝、紅錦繡の秋の夕ばえ、自然の妙趣四時盡くることなし。是其思想の纖巧なる所以の一なり。而して其皇統は連綿、其國體は無缺、人民其堵に安じて鼓腹擊壤、未、天變地異の甚しく怖るべきに逢はず、又革命一揆の紛亂に遭はず、置酒高會して花晨月夕に、歌舞宴樂す此亦尠からず我文學思想に影響せり。

萬有神教的自然觀—七三 自然の樂園—七四 春秋の争ひ—七六 王朝趣味と自然美觀

賞—七六 自然美の縮小—八四 年中行事と四季の行樂—八五 故人追懷の情—八六 遠人思

慕の情—八九 枕草子の自然觀—九三 王朝宮廷の植木—一〇二 自然詩人西行—山家集鑑

賞—一〇二 地理文學旅行文學—一〇九

自然文學としての旅の文學—一二三 道行文の三種—一二四 一、廣義のもの—一二四 二、狹義の

もの—一二七 三、最狹義の道行文と情景融合の文—一二八 「佐保山の柞の紅葉ちりぬべみ夜さへ見よ照らす月影」の鑑賞—一三〇 「會根崎心中道行」の鑑賞—一三三 其他の道行の例—一三七

俳句の描寫する自然美—一三〇

一、動的描寫—一三二 時雨けり走り入りけり晴れにけり—一三二 とりおとしとりおとしたる海鼠かな—一三三 「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」の鑑賞—一三三

二、醜の美—一三七 枯枝に烏のとまりけり秋の暮—一三三 大根引大根で道を教へけり—一三六

三、悠々閑適—一四〇 高麗船のよらで過ぎ行く霞かな—一四一 大徳の糞ひりおはす枯野哉—一四四

四、象徴—一四三 憂き事になれて雪間のよめなかな—一四四

五、餘情法—一四六 ねはくとばかり花の吉野山—一四六 花の雲鐘は上野か淺草か—一四七

六、寫實—一四七 料妻の句—一四八 「公達に狐化けたり宵の春」の鑑賞—一五三

七、理想の美—一五〇 卵の花に兼房見ゆる白毛哉—一五〇 「易水に葱流るゝ寒き哉」の鑑賞—一五二 句の附—一五三



八、「季」について—二六

歌枕(文學的名所)—二七—名士の紹介—二七 實際の名勝地—二七 名稱の義によつて有名なもの—二八 史  
上の舊蹟—二八

歌枕の影響—二八—一、傳統趣味—二八 二、机上題詠の風—二八 題詠の影響—二八—名所の所在、  
—二八 自然物に就いての疑問—二八—しほの山さしての磯—二八 すゑの松山—二八 都鳥—二八

結び—二八

皇統連綿萬世一系の國—二九 「おほやけ」といふ詞—二九 民のかまど—二九 御歴代の御製—二九

忠君愛國—二九 祖先崇拜—三〇 家系尊重—三〇 家族制度、慈道文學—三〇 孝道

文學—三〇

國文學に表れたる公卿道—三一—第一、肉體美を重んずること—三一 第二、服装美を重んじた—三一

第三、才を重んずること—三一 第四、わざを重んずること—三一 第五、「たましひ」の強調—三二 第六、  
機智滑稽をよぶこと—三二 第七、形式的—三二 第八、情緒的—三二 第九、遊戲的—三二 第十、擬り  
性—三二

國文學に表れたる武士道—三一—第一、主従の恩誼—三一 第二、武藝を重んずる事—三一 第三、名

譽を重んずること—三一 第四、尚武—三一 第五、敏捷—三一 第六、質素—三一 第七、簡素—三一 第  
八、信義—三一 第九、禮節—三一 第十、理知の美と情の美—三一—源平盛衰記「忠度の部落」の鑑賞—三一

國文學に表れたる平民道—三二—第一、武士道の變形—三二 第二、物質主義—三二 第三、立志忍

耐律義才覺—三二 第四、上方の「粹」と江戸の「通」—三二 第五、男だて—三二 第六、心學道話—三二

第七、新主従道—三三 第八、驕奢—三三 第九、上流下流趣味の對照—三三

復讐文學—三四—曾我兄弟の敵討—三四 曾我物—三四—舞曲—三四 戯曲—三四 脚本—三四

江戸淨瑠璃—三四 歌淨瑠璃—三四 歌謡—三四 明治の曾我物—三四

赤穂義士の復讐、梗概—三四—個人としての追憶—村芝居—三四 嵐吉三郎一席—三四 お日侍の「忠

九—三四 勇壯なメロデ 義士の歌—三四 吉祥寺の義士會—三四 小野幸氏への昭會—三四 茅野三平

の跡—三四 先輩の業績「義士帖」—三四 今別の本覺寺、大野九郎兵衛の筆蹟—三四 其他—三四

國文學の義士物—三四—戯曲—三四—假名手本忠臣蔵の優越點—三四 義士談の小説化—三四—傾城播磨

石—三四 義士物着想の別傾向—三四  
伊賀越道中双六—三四

### 第五章

..... 五九

而れども此等長所の裏面には、多くの短所もあり。漆着語の我國語は常に「な  
り」「けり」にて終止句となるより、單調平板となり一二の漢語が、よく云ひ  
あらはす所に助辭を挿入して永々と云ひつゞくるなど、冗漫にして力なし。  
又、邦人の性たる典雅沖澹、洒脱の美は存すれども、凡俗平板淺薄の誹を免  
れず。蓋彼の漆着語と、此國民性と兩々相影響して此短所をなし、もの歎  
此を以て悠々せまらざる臺閣の趣はあれど、單刀直入の警句に乏しく、女性  
的分子に富めども、男性的氣慨に貧弱なり。



「てには」の繋ぎ—五九 平板單調—六一 深刻味を缺く國民性—五七

第六章

其思想上に於ても、纖巧なるが故に雄大の趣致なく、優美なるが故に宏壯の情味なし。曉の別や、後朝の使や、些々たる戀愛の表白には美しきものあれども時間の悠久や、空間の無限や、深遠なる哲理思想を現したるものは、一もこれあるなく、

臺閣の文—五八 警句—六一 國文は女性的—五五 雄大の想と國文學—五六

戀愛文學—五〇 戀愛觀—五〇 萬葉集の戀歌—額田王—六〇 菟會處女—六三 眞間之手見姿—六五 櫻の

兒—綾の兒—六二 戀歌の秀詠—六六 仁徳天皇を中心としての戀歌と戀物語—六二

王朝文學に於ける戀愛描寫—六七—神樂歌—六七 催馬樂風俗の戀歌—六七 戀の小町—六〇 伊勢—六三

和泉式部—六三 短歌を通じて觀た王朝の戀愛觀—六三 王朝散文に表れたる戀愛の特相—六六 伊勢物語—六五 大和物語—六五 宇都保物語—六一 落窪物語—六五 狭衣物語—六六 濱松中納言物語(御津の

濱松)—六九 其他の物語日記—六三 蜻蛉日記—六三 源氏物語—六七

近古文學に於ける戀愛物—六八 維盛と北の方—六八 源盛と小宰相局—六八 袈裟御前の哀話—六五 瀧

口と横笛—六七 重衡に纏はる三個の戀物語—六九 葵の前—六三 小春の局—六三 靜御前—六七 白拍子

氣質—七一 太平記に表れたる戀物語—七二 謡曲に表れたる戀愛—七三 兒物語—七八

近世文學に表れたる戀愛—七九 俚諺—七〇 隆達節—七〇 諸國盆踊歌—七一 弄齋節—七四 投節—七六

潮來節—七八 よしこの—七〇 どどいつ—七二

小説—七三 戯曲—七三—異性關係一覽—七四 妹背山婦女庭訓の清船難鳥—七五

第七章

造化の妙工や、神の絶對や、人生の弱點や、運命の不可思議等、幽玄なる宗教思想の表白にいたつては、更に乏し。

環境と國民性—六二 宗教觀—七四 宗教文學—七八 法然上人の元久法語—七九 蓮如上人の歎

異鈔—七二 日蓮上人の遺文—七三

第八章

滑稽文學

第一 總說—七六 一、滑稽—七六 二、滑稽の種類—七七 三、滑稽文學の種類—七九 四、滑稽文學の發

達せないわけ—六二

第二 上代—七六 萬葉集中の戯歌—七六 風土記—印南郡壁岡の里—七一

第三 中古—七九 誹諧歌—七一 神樂歌催馬樂—七七 竹取物語—八一 源氏物語—八三 枕草子—八七

第四 近古—八五 職人歌合—八五 落首—八六 和漢聯句—八九 連歌—俳諧—八三 二條良基—八三 宗

祇—八三 宗鑑—八三 荒木田守武—八四 連歌俳諧のをかしみ—八三

狂言—八七 狂言と謡曲との對照—八八 作例—八九 お伽草紙—八三 其他—八三

第五 近世—八三 韻文—八三 狂歌—八三 半井卜養—八四 鯛屋貞柳—八五 柳門の人々—八六 後期



江戸全盛時代—八五 東海道中膝栗毛—八四 狂歌の中興—八三 蜀山人—八三 其他の諸家—八四 川柳—八七 前句附—八四 冠阿—八九 柄井川柳、川柳點—八七 俳句と川柳との對照—八一 川柳の特徴—八五 柳樺の編輯—八六 京阪の柳壇—八五 其他の韻文—八六

散文—八六 俳文—八三 小説—八六 黄表紙—八七 戀川春町—八七 明誠堂喜三—八六 市場通笑—八六 芝全交—八七 萬象亭—八七 唐來三和—八七 其他の作家—八七

黄表紙の特徴—八七 滑稽本—八六 道中膝栗毛—八六 式亭三馬—九〇 浮世風呂、浮世床—九七 一九三馬の後—九〇 妙竹林話七變人—九二 狂文—九三 心學道話—九四

第六 明治—九六 韻文—狂詩—九七 狂歌へなぶり—九三 當世風俗五十番歌合—九三 川柳—九七

散文—小説—九三 假名垣魯文の西洋膝栗毛—九三 啞之旅行—九三 養庭墓村氏の「御蔭参り」—九四 夏目漱石氏の「吾輩ハ猫デアル」—九四

脚本—九七 尾崎紅葉氏の「夏小袖」—九七 饗庭篁村氏の「つりの」—九六 川上眉山氏の「滑稽相續三人男」—九六 太郎冠者の「喜劇三種」—九七

俳文—九三 戯文—九六 成島柳北—九〇 福地櫻痴氏の「出放題」—九四 坪内逍遙氏の「バツク君の自叙傳」—九六 藪野椋十氏の文—一〇〇



# 第一章 緒言

文學作品はその本質上個性表現の一種であるから、一國の文學を通覽してその特質を抽象することは、實は矛盾した話で、又事實不可能なことである。十人十色であるべき文學を五百人六百人を十把一からけに煎じつめて此が國文學の本質だとか特質だとか云ふことは、嚴密に考へれば無理な企てであらう。況んや世界文學まで云々せられる今日に於ては猶更だ。けれども漢文學を見、英文學を見、獨逸文學、フランス文學と各國の文學を見、翻つて我國文學を見れば、どこか他國文學とは異なつた趣のあるのを否定する譯には行かない。人種の相違、言語の差異、人情風俗習慣の相異なるが如く、その文學も亦多少の相異があるべき筈だ。處が斯様な差異は博く世界文學の見地から鳥瞰的に見渡してこそ始めて明瞭にさるべきもので、單に國文學の圈内にたて籠つてゐる吾々の能くすることでない。瓶の外に居るものがよく、瓶の形を品騰し得るけれども、瓶の中に籠居するものは到底瓶の形を論じ得ないのと同じ道理だ。で、今茲に「國文學の特質」なる題を掲げて説くことも眞に井底の痴蛙が大海を論ずる愚に墮するかも知れないが、なるべく自分の識見を公平明澄にして、諸君の参考になりさうなことを少しく述べることにする。

但しその述べる順序は、嘗て公刊した拙著綜合日本文學全史の三頁から四頁にかけて述べたものがあるから、それを骨子にして敷衍するやうの方法を採らうと思ふ。で、先づその本文を左に掲げる。



國文學の特質 (綜合日本文學全史三—四) 我邦上下三千載、其間に發達せる文學作品の千種萬様な到底一律を以て評すべからずと雖も、概して謂へば、其形式は優美に其思想は纖巧なり。我國語は言語學上所謂漆着語にして各語を連結するに「てには」を以てす。是漢文の如き生硬を免れて優美なる所以の一なり。加之各詞母音を含むこと甚多く音調随つて流麗和諧なり。又我邦は山紫に水清く、柳綠花紅の春の朝、紅錦繡の秋の夕ばえ、自然の妙趣四時盡くることなし。是其思想の纖巧なる所以の一なり。而して其皇統は連綿、其國體は無缺、人民其堵に安じて鼓腹擊壤、未、天變地異の甚しく怖るべきに逢はず、又革命一揆の紛亂に遭はず、置酒高會して花晨月夕に歌舞宴樂す。此亦少なからず我文學思想に影響せり。而れども此等長所の裏面には又多くの短所もあり。漆着語の我國語は常に「なり」「けり」にて終止句となるより單調平板となり、一二句の漢語がよく云ひあらはす所に助辭を挿入して永々と云ひつゞくるなど冗漫にして力なし。尙又邦人の性たる典雅沖澹洒脫の美は存すれども、凡俗平板淺薄の誹を免れず。蓋彼の漆着語と此國民性と兩々相影響して、此短所をなしたるもの歟。此を以て悠々せまらざる臺閣の趣はあれど單刀直入の警句に乏しく、女性的分子に富めども男性的氣概に貧弱なり。其思想上に於ても纖巧なるが故に雄大の趣致なく優美なるが故に宏壯の情味なし。曉の別れや、後朝の使や、些々たる戀愛の表白には美しきものあれども、時間の悠久や、空間の無限や、深遠なる哲理思想を現したるものは一もこれあるなく、造化の妙工や神の絶對や、人生の弱點や、運命の不可思議等、幽玄なる宗教思想の表白にいたつては更に乏し。

## 第二章

我邦上下三千載、其間に發達せる文學作品の千種萬様な到底一律を以て評すべからずと雖も、概して謂へば、其形式は優美に其思想は纖巧なり。

### 國文學の深み

神武天皇御即位紀元二千五百八十五年、之に天神七代、地神五代を加へれば更に幾千年増すことであらうが、概數を云ふ時は三千年と云はれてゐる。この三千年は、我國文學の深みを示した數で、やがて國文學史が生彩ある變遷を経過して來たことを示す所以である。今日どんなに榮えてゐる國でも、新興國には眞に偉大な文學は出ない。アメリカ合衆國の如き盛大は盛大だが、建國日淺い爲めに、未だ一人のゲーテを出さず、一人のシエクスピヤも出さない。スケッチブックの著者アーヴィングや民衆詩人ホイットマンや近代小説の大家アランボーなどが稍異彩を放つてはゐるが、他の歴史ある國の文豪と比べては遜色があらう。廣く列國を見渡すときよく三千年の深みある歴史を以て其間他から統治的侵害を受けないで、あらゆる文化を直線的に進展せしめ得來つた國はと云へば、我日本を措いて他に無からう。支那が古いと云つても廿四朝の變を重ねて今は中華民國になつてゐる。印度が早いと云つても今では英の屬國だ。バビロン、アッシリア、エヂプト古いは古いが、尖石塔や靈廟に纔に懷古馮弔の客を惹くだけのものだ。アゼンスの文化も殘骸となり、ローマの盛大は今伊太利が纔にその跡をついでゐるだけなり。獨逸は新しく、フランスも新しく、英吉利



は古いと云つても、カエドモンの出たのは我が厩戸皇子の頃なり、チヨースーの出たのは我が室町時代なり、我に比しては新しいと謂はねばならぬ。ロシアに至つては紛亂又紛亂で、今日の勞農ロシアは已にトルストイも、シエンキウイッチも、ゴリキヤも、プーシキンも有しない國家だ。三千年の長歴史は我國文學の苗床として誠に貴い變遷と謂はねばならぬ。

### 國文學の起源

然らば我國文學は有史以來いつの時代の何作品を以てその第一頁を飾らるべきであるか。或人は素盞鳴尊が素鷲の里に、新屋をしつらつて櫛稻田姫を迎へ棲まはせられた時、折から叢雲が霞きわたるをみそなはしやくもたつ出雲八重垣妻ごめに 八重垣つくるその八重垣を

と咏ませられた。これが、我邦の和歌の起りでもあり、國文學の始まりでもあると云ふ。けれどもこの歌調は神代に似けなく近代的で、殆ど後世の三十一文字と變りがない位の調子だから、此は後人の假托で事實尊の御詠ではなからうと云ふ人もあつて、確説とはなつてゐない。

次に、伊弉諾尊、伊弉册尊が、天の浮橋にたゝして柱を廻つて御結婚の時

あなにやし えをとめを (あゝ親愛なる我がをとめの君よ)

あなにやし えをとこそ (あゝなつかしき我がせの君よ)

と仰せられた。この語は何れも五五調を爲してゐて、前の素盞鳴尊よりもずつと前のことだから、此こそは我國歌のはじめだと云ふ人もある。

又更に彼の岩戸隠れ(天照大神が御弟素盞鳴尊の亂暴を憤つて、天の岩戸に御隠れになつたこと)の時、八百萬の神

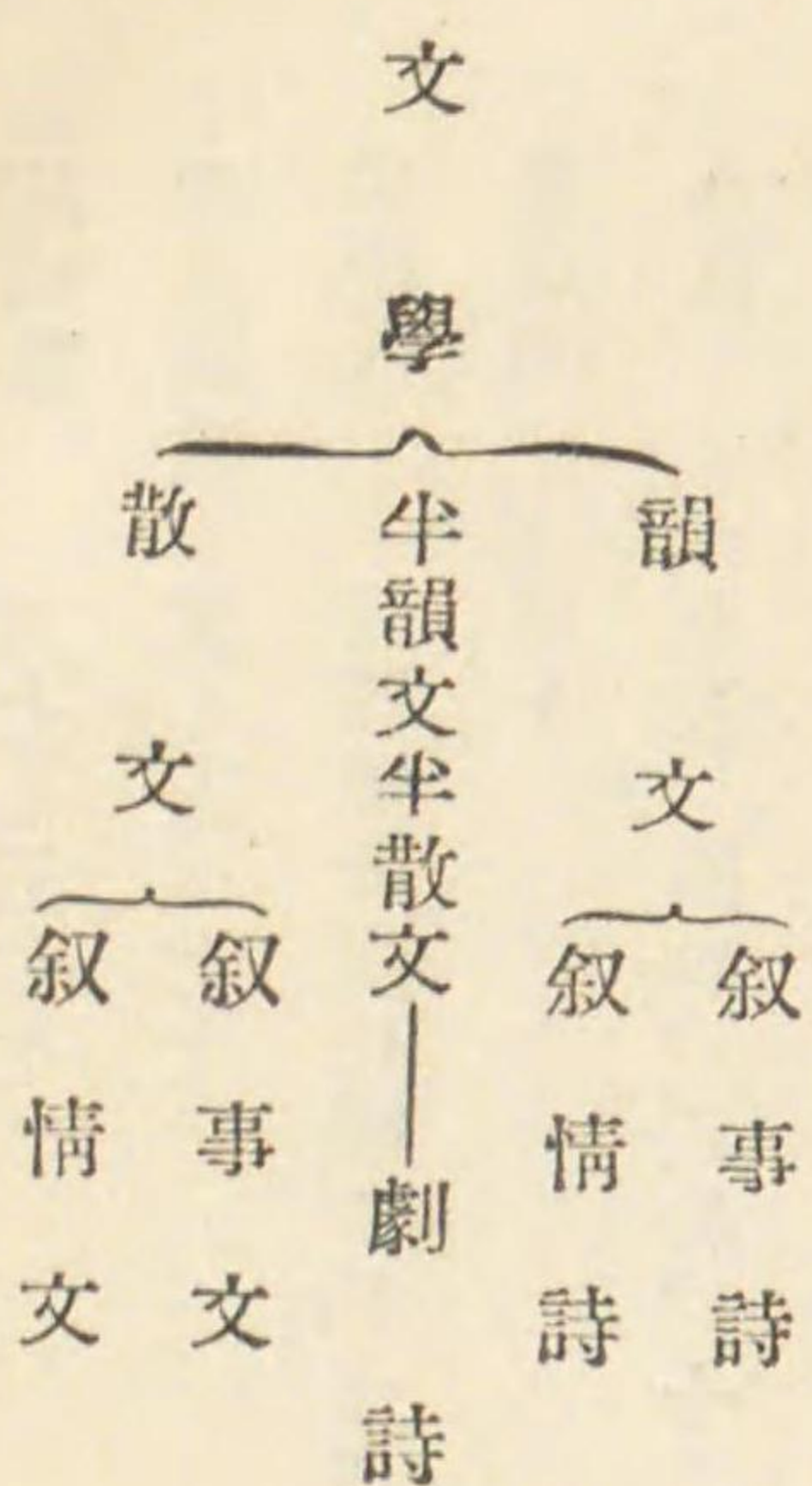
森田

が天の安の河原に集まつて種々評議の上、色々と天照大神の御感情をお和け申す神業をした。その中の一つとして天兒屋根命は、文才のある音調の美しい神様だったので、美音高らかに一篇の文章を朗讀されたので、大神はその文詞にめで、岩戸を細目におあけになつた。後世その時の文詞を太詩詞（たうしじ）と云つて、是こそ我國文學の起源だとも言ふ。

思ふに太古蒙昧の世、神人共に朴素にして、今日のやうな明瞭な創作意識の下に文學を作るやうなことはなく、行雲流水飛花落葉の自然の風物や、生老病死、合離集散の喜怒哀樂につれて無造作に謠嗟咏歎の語を發したものの中、比較的整齊にして他の共鳴を惹くものは口より口、耳より耳に語りつぎ言ひ傳へして、後に文字の發生渡來につれて成文化するに至つたものであつて、これ等の前後を確定することは寧ろ考證學者の研究に委して然るべきであらう。

### 國文學の種類

文學の種類は、通常文學概論などでは



とするが、我國文學では必らずしも純文學でなくとも、之を研究の對象とするのが從來の例であるから、叙事叙情を明別しないで、唯如上の三分法によつて列舉して見ると、大體左の如き種類がある。

#### 一、韻 文

我國文學の起源 國文學の種類



長歌 五七五七……七七

反歌 (長歌に附屬する短歌) 五七五七七

短歌 五七五七七

旋頭歌 五七七五七七

佛足跡歌 五七五七七

神樂歌 大體短歌調に囃や拍子の加はつたもの

催馬樂 同上

今様 七五 四句、八句、十二句等

小唄

宴曲

琴歌

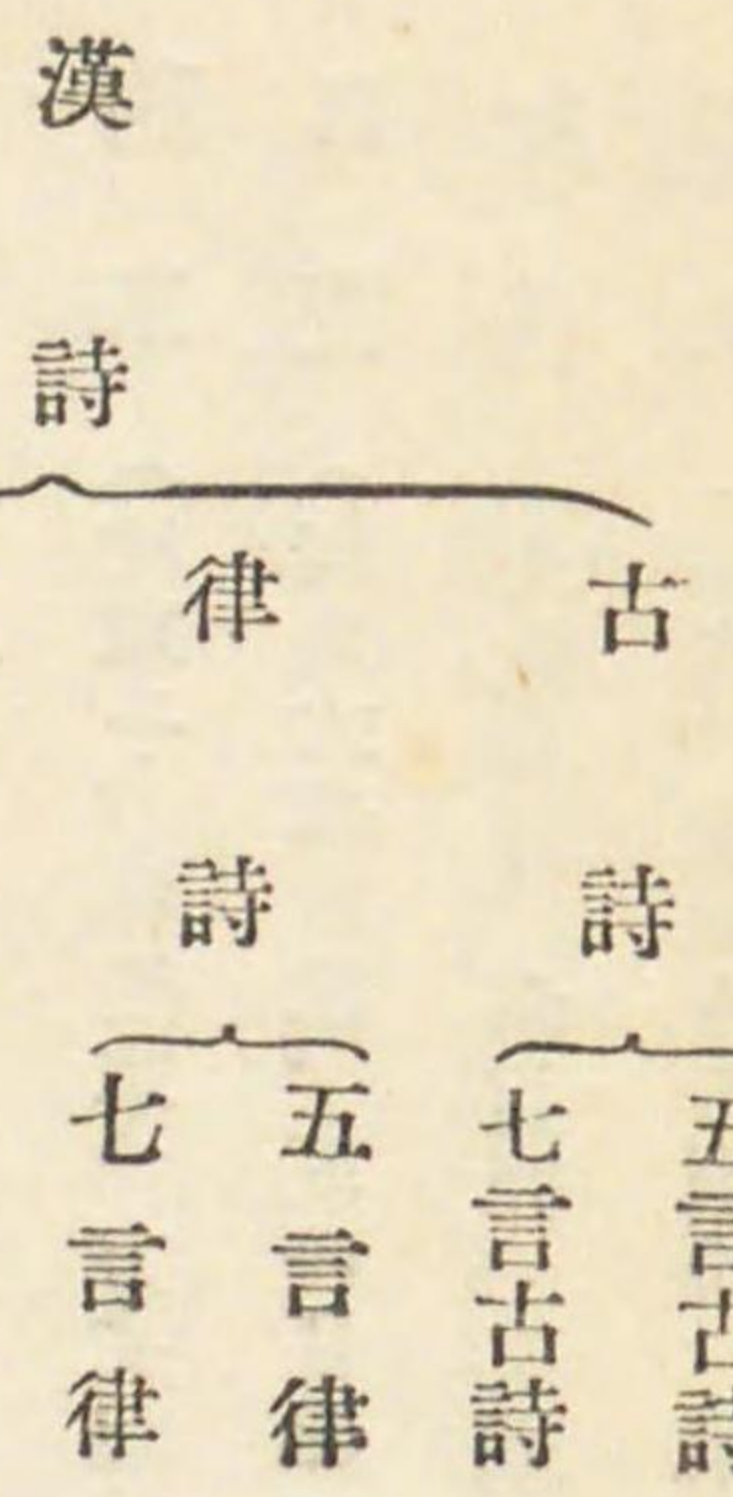
俗謠

俳諧

狂歌

川柳

柳



新體詩 七五、七六、八六、八七、五五調等種々

童謠 自由音律

民謠 同上

二、半韻文 半散文

舞の本

謡曲 (能の臺辭)

戯曲

長唄

國文學の種類



歌淨瑠璃

樂劇

歌劇

三、散文

宣命 (上古、天皇の詔勅を記した文詞)

祝詞 (神前に告白する文詞)

風土記 (上古各地の風土、産物、氣候、傳説などを書集めたもの)

氏文 (上古祖先の功名を書き記したもの)

古事記、日本書紀、その他の正史

大鏡、増鏡、水鏡、今鏡、池の藻屑、月のゆくへ等の雜史

軍記 (保元、平治、平家、の三物語や、源平盛衰記や太平記)

物語、小説 (竹取、伊勢、うつぼ、源氏等で、これは更に細別することもある)

隨筆 (枕草子、徒然草、方丈記、花月双紙など)

日記 (和泉式部日記、更科日記)

紀行 (土佐日記、海道記、東關紀行など)

脚本 (狂言、歌舞伎の臺詞、現代劇の臺詞等)

雅文

俳文 (俳句の心して書いた散文)

和漢混淆文

狂文

教訓草紙 (十訓抄、兒物語、假名草紙等)

法語、法文

心學道話

漢文

書簡文

雜纂 (古今著聞集、今昔物語等)

歐文直譯文

普通文

新聞雜誌文

評論文

此等の文學種類は之をラスキンのやうに、それ等が盛れる主なる情操を基礎にして悲劇、喜劇、笑劇などとする事も出来るが、又之を歴史文學、地理文學、教訓文學などとする事も出来る。分類は色々の形式もあらうが、要するに右あけたものが國文學の主な種類である。



優美 國文學の形式は一體に優美である。試みに左の一文を見よ。

ものゝふの鎧の袖をかたしきて 枕に近き初雁の聲

これは上杉謙信が能登の陣營にあつて咏んだものだと言ふ。彼の三軍を叱咤して甲州勢と對陣し、單騎濃霧の曉を鞭聲肅々と突進して「信玄何處にありや」と怒號したその人のことばとしては何たる優しさであらう。總じて武士の歌咏にはこの種のものが多い。

吹く風をなこそその關と思ひしに 道もせに散る山櫻花

は源義家が勿來の關の落花翻翻たるに見いつて、馬上豊かに吟じたものだと言ふが、彼は前九年の役で貞任宗任の重圍の中に陥り主從僅かに數騎に討ちなされた時、百發百中の弓の凄腕にさしつめひきつめ散々に敵を憐まし、源氏の陣中神あるかと疑はしめた程の勇將であるにも拘らず、この勿來の關の櫻の歌は錢湯で居睡りしてゐる程温藉な趣がある。戦争や仕合は云はゞ命の取り遣りで随分凄壯の氣に満ちたものだらうが之を國文に寫すとすると

くもてかくなは十文字

なんか如何にも面白さうで、碁の對局かしらと思はれる程だ。

「女と思ひ侮つての雜言無禮、右大臣道春が妻、そこ動かぬ」と長押の長刀おつとつて、石突丁と庭の面八さう三

だん水車（玉藻の前双六の場）

とあつて、可なり達者な描寫ではあるが、マア裁縫割烹の動作を寫してゐる位の緊縮であつて、聽いて物凄いと云ふ爲めには、その個々の語が表々實内容をあり／＼と如實に聯想しなければならぬ。

雷鳴電影は壯美とか悽壯とか謂ふ趣のものなのが源氏が須磨で聞いた雷鳴はお婆さんの白ひき位により響いてない。首縊りは悲痛哀痛むしろ慘痛な趣があるべきだが、近松の天の網鳥で紙屋治兵衛が紀の國屋小春と心中するのに、女を剃刀で殺して後我身に繩に紐をかけて縊死を遂げるところを

しばし苦しむなりひさご、風に揉まるゝ如くにて、次第に弱る呵呷の息

とある。何たる優美化であらう。まるで苦い呑み薬にオブラードをきせて嚙下一番何の苦もないと云つた趣だ。

我國には歌ことば、みやびことばと云ふものがあつて、荒い猪でも「ふするの床」と云ひ、猿がなくとは云はずに「ましらなく」と云ふ。宮中奉仕の女官などは餅を「おかちん」團子を「いしく」醬油を「むらさき」豆腐の粹を「卯の花」と云ふ。これも音調の優美化である。

兼好法師は名を捨て利慾を捨て戀を捨てた出家沙門の身を以てして尙その文はと見れば次のやうなものがある。

第百四段荒れたる宿

荒れたる宿の人目無きに、女の憚ることある頃にて、徒然と籠り居たるを、或る人訪ひ給はむとて、夕月夜の覺束なき程に忍びて尋ね在したるに、犬の事々しく咎むれば、下司女の出でて「何處よりぞ」と言ふに、頓て案内せさせて入給ひぬ。心細けなる有様、いかで過すらむと、いと心苦し。怪しき板敷に、暫時立ち給へるを、持て静めたるけはひの、若やかなるして「此方へ」と言ふ人あれば閉開所せけなる遺戸よりぞ入給ひぬ。内の様は、いたく凄じからず。心にくく、灯は彼方に仄なれど、物の綺羅など見えて、俄にしもあらぬにほひ、いと懐しう住みなしたり。門よく鎖してよ。雨もぞ降る。御車は門の下に、御供の人は、其處々々と言へば、今宵ぞ安きい寝へかむめると、打密語くも、忍びたれど、程なければ、ほの聞ゆ。さて此の程の事どもこま



やかに聞え給ふに、夜深き鳥も啼きぬ。來し方行末かけて、まめやかなる御物語に、此の度は、鶏も花やかなる聲に打頼れば、明離るにやと、聞給へど夜深く急ぐべき處のさまにもあらねば、少し撓み給へるに、隙白くなれば、忘れ難き事など言ひて、立出で給ふに、梢も庭も珍しく、青み渡りたる卯月ばかりの曙、艶にをかしかりしを、思ひ出でて桂の木の大なるが、隠るゝまで今も見送り給ふとぞ。

此文は一體誰が誰の許へ通つたのか、作者兼好は第三者として見てゐたのか。それとも彼自身の戀物語をよそながら寫したのか色々の説はあるが、内容としつくり合つて優艶それ自身と謂つた文調である。「此方へ」心にくく「今宵ぞ安き、いは寝べかむめる」「こし方、行く末」など何れも優しい語調だが、就中「門よく鎖してよ。雨もぞ降る。」の一段に至つては國文獨得の優美さであらう。

枕草子には清少納言が郭公を開きに洛北の郊外に出た一段があつて、中宮定子の御伯父明順朝臣の宅へ押しかけて行つて、御馳走をよばれて、稻から米をとり入れるまでの作業を見學させて貰つて、歸る時には、卯の花を牛車のぐるり一杯に折りかざして、一風かはつたこの様子を誰にも見せずに歸るのは残念だと云ふので、宮城近くまで來て、一條殿（爲光）の宅へ詞をかけさせる。こゝは以前ならば彼女が無二の異性の友齋信も居たのだが、この節は別居して季弟公信の侍従が若い女兄弟と同居してゐる頃だつたが、その侍従公信が聞きつけて、帶とりはだけで、とつかはやつて來ると、彼女は態と車を急がせる。侍従は益々へピーをかけて走る。侍従のお供が同じやうに走る。何のことはない一條大路はこの一幅の映畫劇的喜劇の場面と變つたが、土御門の處でやつと追ひついて、それから二三親しみのある對話をして別れるところがあるが、文章としても生き／＼してゐるが、文調措辭が殊にみやびやかである。

近う來ぬれば、さりとともいとかうてやまむやは、この車のさまをだに、人に語らせてこそやまめとて、一條

殿のもとにとめて、「侍従殿やおはす。時鳥の聲聞きて、今なむ歸り侍る」といはせたる。使「侍従「只今まゐる。あが君／＼」となむの給へる。さぶらひにまひろけて、指貫奉りつ」といふに待つべきにもあらずとて、はしらせて土御門さまへやらするに、いつのまにか装束しつらむ、帶は道のまゝにゆひて「しばしく」と追ひ來る。供に侍、雑色、物はかではしるめる。「とくやれ」といといそがして土御門にきつきぬるにぞ、あへぎ惑ひおはして、まづこの車のさまをいみじく笑ひ給ふ。「うつゝの人の乗りたるとなむ、更に見えぬ。なほおりに見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人どもも、興じ笑ふ。「歌はいかにか、それ聞かむ」との給へば、「今お前に御覽せさせてこそは」などいふほどに、雨まことに降りぬ。「などかこと御門のやうにあらで、この土御門しもうへもなく造りそめけむと、今日こそいとにくけれ」などいひて「いかで歸らむすらむ。こなたさまは、ただ後れじと思ひつるに、人目も知らずはしられつるを、あゝ往かむこそいとすさまじけれ。」とのたまへば「いざ給へかし。うちへ、」などいふ。「それも烏帽子にてはいかでか」とりに遣り給へ」などいふに、まめやかにふれば、笠なきをのこども、唯ひきにひき入れつ。一條よりかさをもてきたるをさゝせて、うち見返りうち見返り、この度はゆる／＼と、物うけにて、卯の花ばかりを取りおはするもをかし。

前半は萩野博士が、左傳宣公十四年、楚子が宋で吾が使者を殺したのを聞いて怒り立つ所を寫した名文。

楚子之を聞き袂を投じて起つ。履は窳皇に及び、劍は寢門の外に及び、車は蒲胥の市に及ぶ。

とある。それ以上の生彩だと云はれたが余は前に一寸云つたやうにファイルムの趣か、鳥羽繪のをかしみにも比すべき動的描寫の才筆だと思ふ。けども、優美の例としては後段の對話の處がよく出來てゐる。今その部分を現代語に譯すると、

「歌はどうでした。それを伺ひたいものですな、



と云はれるので

「只今中宮様にお目にかけてからお見せませう」

など云つてゐる中に、雨が本當に降り出した。

「外の門とは様變へて、ナゼこの土御門を屋根なしに造つたのだらうとこんな矢先にはとりわけそのことが癪だ、なんか云つて、

「どうして此まゝ歸られよう。こちらへ來かけは、唯おくれまいとの一心に、なりふり構はず走つたが……あ

あこの儘歸るとは曲がない」

「サアご一緒にいらつしやいませ、宮中へ」など云ふ。

「でもこの烏帽子姿では不都合でせう。(侍従は束帶か、略儀にしても衣冠で出仕するものだから)

「誰かにお宅へ取りにおやりなさいませ」

など云つてゐる中にどしやぶりになつてきたので云々。

### 漢文との對照

國文が漢語を取り入れるとなると、信僱贅牙の調にかはつて少なからず此優美の趣をこはすと云ふとは、源氏物語帚木の卷の雨夜の品定め、馬の頭の口をかりて女の手紙の批評をしてしゐる一節によく表れてゐる。それは、

などは女といはむからに、世にある事の公私につけて、無下に知らず、至らずしもあらむ。わざと習ひまなばねども、少しもかどあらむ人の、耳にも目にもとまる事、自然に多かべし。さるまゝには、眞字を走り書

きて、さるまじきどちの女文に、半ば書きすくめたる、あなうたて、この方のたをやかならましかばと見ゆかし。心地にはさしも思はざらめど、おのづからこはくしき聲に讀みなされなどしつゝ、殊更びたり。これは上臈の中にも多かる事ぞかし。

と云ふので、之を譯すると、

女だからと云つて、ナニ世の中の公私萬端につけて、てんで知らないと云ふやうなことがあらう。わざく修業はしなくとも、少し氣のきいた女なら、日常應答の見聞きの中にでもたしなみは自然と出来るものだ。そこで自分の才氣にまかせて漢字をば走り書きにして、不似合な女同士の手紙のやりとりにもつかしい漢字を半分以上も書き込めるやうなこともなると、見る人の心持は、あゝブツキラボーなこの書き様つたらぬ、これさへなければ可いものをとの感に堪へないであらう。自分が書く時の心持としては左程かどだたないが、貰つた方でこれを聲にあけて讀むと、自然硬くるしい韻があつてわざとめいてくる。これは地位高い女官の中にも随分あることですぞ。

自分は學生に之を説く時次のやうな作例をした。

この程の朝さむ夜さむをせの君には如何過ぎさせ給ふらむ

諸君が他日細君を迎へて、里歸り先からでも、こんな手紙を貰つたら、いかにも優しい女らしい文句だと思はれるでせう。それを若し

昨今朝夕稍寒冷ヲ覺ユ、朗君ノ起居果シテ如何

と書いて越したらどうです。馬の頭はこの點をさしてゐるのです。そして馬の頭の口をかりて、斯う言つた作



者の式部は、當時の女官が、自分の漢學の素養を鼻にかける風を戒めたものです。否更に一步を突込んで考へれば、當時ともすれば男子をやりこめて、得々たりし清少納言などにあてつけて言つたとも觀られます云々。尙この品定めには、この節より少し前の處で、式部丞が丁度それに相當する女の話をしてゐる。それは各自の戀物語を持出してゐる處で、始めは馬頭の物怨じする女、すき心過ぎる女の話、次は頭中將が、子までなしたる中を、本妻の四の宮の邪魔が入つて、此頃ふつにとだえしてゐると云ふ夕顔の話、その次にこの式部丞が戀した女のことになつて、「自分がまだ文章生時代に、先生の博士の令嬢と相知つて、先生自身も此戀を悦び容れて妻に娶つてほしい口振だつたが、女の方があまりに學者で物識りで私はいつも下馬を喰つてへいへいハイで接してゐますので、これを生涯の妻とするのもあまりほめた事でないと思つて、だんく氣疎く思はれましたが、先生の手前、あまり冷淡にも出來ず、妻と云ふよりは寧ろ女師匠の許へ通ふつもりで交際を續けてゐる中、或晩、永らく御無沙汰をしたので、通りがりに一寸寄りますと、どつしたことが、いつもの居間へは通さないで、隔てがましい簾几帳をおいて座敷で對面しました。チャアこりや御機嫌が、チト斜だわい、マ、ヨ、いつそのこと此をきつかけに離縁しよう、寧ろ好い機會だ」と高を括つて相向つてゐますと、どうしてどうして、女は聰明だから、そんな淺はかな物怨じは致しません「あたし、あれから風を引いたもんですから、この節は藥を飲んでまして、からだ臭くて御そばによるのは失禮だと思つて、それでこんなお目にかゝりやうを致したんですの……直りさへしましたら、又々もとく通りおかしづきますわ。——デモ、何か御手まはりの御用でもおありなさいますなら御遠慮なく御申しつけ下さいましね」と聞けば成程と思ふことを、ハイカラな語調でテキパキと言はれたのに恐縮して「チャア又伺ひませう。今日はこれでお暇」と出かけると、女

は物足りぬかして、後を追うて來て「病氣が直つたらきつとお出で下さいね、ね、よくつて？」と云ふ。それにつれて、ブーンと蒜ひよこの香(風藥)の匂がするの、痛み入つて返事もそこへ歸つて來ました。

と云ふ。この原文をあけると又長くなるから今はその一部をあけると、女の詞で

月頃風病に堪へかねて、極熱の草藥を服して、いと臭きによりてなむえ對面賜はらぬ。まのあたりならずとも、さるべからむ雜事等は承らむ

と云ふ附點の語は、わざと國文の優美を破して、をかしみとしたもので

月頃風の病ひあつしくて蒜ひよこなど云ふ藥物し侍ればなむえたいめ賜はらぬ。

など云へば國文本來の優美さとなる。

優美の主要素は可憐とか上品とか、典雅とか云ふものだが又、柔軟性——即ち、やはらかくしなやかと云ふ分子も多分に含んでゐると思ふ。それを立證するにも漢文と對照することが一番捷徑だ。今故中根淑氏の漢詩和譯について少しあけて見よう。

主人相識らず。

偶座林泉の爲めなり。

謾に酒を沽ふを愁ふる莫れ。

囊中自から錢あり。

あるじは誰と名はしらねども。

庭の見たさにちよいと腰をかけて。

酒を買ふとてお世話は無用。

わしが財布にや錢がある。



陌頭楊柳の枝。

土手の柳の枝垂れて。

已に春風に吹かる。

あら春風が吹くわいな。

妾が心正に斷絶す。

わしが心のやるせなは。

君が懐ひ那ぞ知ることを得む。

思ふ殿御に知らせたい。

三

陰雲漠々として長堤暗し。

すみだ川つゝみに立ちて船待てば

四月田頭雨一犁。

水上遠く啼くほととぎす

渡に舟を呼びて偶々首を回らせば。

(橘 千 蔭)

水天遠き處子規啼く。

(中根氏の友宮本好風氏が下の歌を譯されたもの)

四 (以下の二首は春遊記中の新樂府と見出しあるものの中)

儂別れむ君當に去るべし。

歸りやしやんせといふたが無理か

君が心却て儂を怪しむ。

あれ聴かしやんせ明けの鐘。

儂が言、君信んぜすや。

請ふ聴け五更の鐘を。

五

聞く君萱草を種うと。

願くは一根を以て分て。

忘れ草なら一もと欲しや

妾欲して背に樹えんとす。

種ゑて眺めて忘れたや

相對暫らく君を忘るかと。

### 織細巧緻

細かくて手機用なのは殆ど國民性の一つと謂つてよろしからう。之を姉妹藝術に徴して見ても、盆石は大自然の風物を寸尺に縮めて、山あり川あり橋あり人あり茅屋ありで、うまく取容れて配合する。畫は一枚の唐紙に千羽の鶴をわけて見事に飛翔させる。建築は四疊半の茶亭に名工が畢生の心血を凝ぐ。彫刻は一個の胡桃に百匹の猿を彫りつける。日本人ほど小手のきく國民はないと云はれてゐる。否西洋人の眼で見れば、三度の食事に二本の箸で一片の香のものを挿む事すらが、已に驚異すべき巧者さである。この性質は、國文學に幸して織細巧緻の着想となつたものだ。

寛平の御時菊合に洲濱を造りて、菊の花植ゑたりけるに、くはへたりける歌

ふきあけの濱のかたに菊植ゑたりけるをよめる

すがはらの朝臣

秋風のふきあけに立てるしら菊は 花かあらぬか浪のよするか

これは、寛平菊合にも、古今集秋の部下にも出てゐて菅公の秀詠である。秋風颯々濱邊を吹けば吹かれて積るいさごの山、吹上けの濱は至る處の海岸に見られるものだが、別けても彼の紀伊國和歌山市の西南から雜賀村に至る一帯は、長汀曲浦の絶勝の地とて月に千鳥に白雪に、觀賞の景物も少くはないが、菊も亦處の一名物である。そこで洲濱の菊を吹上の菊と見立て、秋風の吹くと云ふなる吹上の濱回に立てる白菊は、處がらとて波、の花かと疑はれ、花の花かと思直され、得も云はぬ面白い風情であると稱へたもので、形式の方で下の句に三つの「か」を疊んだ點もよろしいが、菊の時



候にふさはしい秋風をはじめにしてその縁語で「吹き」として「吹き」の秀句で「吹上の濱」と思ひついて、それで白菊の背景がすっかり出来たと云ふので「白菊は」と立てらせて「花か、あらぬか」と云ふ。「白菊は花か、花でないか」とこれだけの部分をとつて言ふならば、天下此程の愚問はないであらう。白菊は花に極つたものだ。と斯う驚かせておいて「波のよするか」白波と白菊と髣髴映照して幽韻一入漂渺たる光景として「成程」と肯かせる着想は逆説的な巧緻さがある。

加之全體この洲濱その物も日本趣味的なものだ。今日の島臺の前身で、小さい臺の上に山川花鳥自然の情趣を寫して樂しまうと云ふので、最初は單なる女郎花合であり、菊合であつたものを、後には段々趣向を凝らしてその花に一々名所の名をつけて出す。この時の菊合にも

左方 占手 山城皆瀬菊

二番 嵯峨大澤池菊

三番 紫野菊

四番 大井戸難瀬菊

五番 攝津國田義島菊

六番 奈良樟河菊

七番 和泉吹居菊

八番 紀伊國吹上濱菊

九番 紀伊國網代濱菊

十番 逢坂關菊

とした。菅公のはその八番のであつた。左方は大きな洲濱一つにしたので、座席へ入りにくかつたので符號をつけておいて毎度に割つて出して合せたと云ふ記事もある、此は文學そのもの、織細巧緻な國民性の表れとして遊戯と文學との相交渉する一考察資料として興多いものと思ふ。

後鳥羽上皇が千五百番歌合をお催しになつて、當時の歌仙三十人に各自の自信ある秀詠百首宛持ち寄りせられた時「宮内卿」と云ふ若い女房は、まだ大家の列に入れるにはどうかと思はれたが、あまりに斯の道に熱心なので特に御召し加へになつて「御身があまり熱心なのに免じて、特に許す。きつと朕が面おこすやうの秀歌を詠め」と仰せになつたので、宮内卿は有がた涙にくれたと云ふが、さてその時詠んだ歌と云ふのは

うすく濃き野邊の緑の若草に あとまで見ゆる雪のむら消え

時は今、春、野邊見れば、若草もえて見るから生々する……と見ると、その一つ色の緑も、濃緑あり中緑あり新緑あり淺緑ありで、仔細に見れば、緑の色素の配合は色々である。と作者がこまかに觀照してゐる様を見せて、さて、陽光の一樣平等なるべきに何故のこの濃淡ぞといふかる。人のせい、雨の故か、牛馬の故か、人は別にふみもしだしもない。春雨は等しく銀糸をそいでゐた。牛馬は一匹も秣喰ひには來なかつた。人かあらず、雨かあらず、牛か馬か皆あらず……と作者の想はこゝに一轉して、早春の以前にかへる。一陽來復すれば流石野澤の水もぬるんで、雪ははだらに溶けかゝる、その時自分は連日野の面を見わたすと、満目皚々降り積んだ、あの白雪も次第々々に影失せて、アレ丘が出た石が出た、小柴も見え出す芝生も伸びる、白い雪がとけて黒い地肌が見え出す。その白は次第に減つて黒は段々大きくなる。或時は猫の如く或時は牛の如く又象の如く、沼の如く池の如く海の如く……やがてまるきり黒くなつ



た。黒くなつたと思ふ土が、段々黄ばんで青ばんでそれで緑の若草となつた。あゝ儲てはアノ緑の濃い處は雪の消えの早かつた處で、淺緑の處は雪が遅く消えたせいだナアと想ふ。かうした想が結晶してあの三十一文字となつた譯だ。今一つ時間経過の着想の細かな例をとれば近世掛園派穂井田忠友の歌に

汲む人の少きほどぞ知られけり 檜の葉沈む山の井の水

と云ふのがある。人住まぬ深山の奥の巖を割つて清冽水を敷くやうな清水が湧き湛へてゐる。散策の兒は谷間を辿り樹の根を攀ぢ、岩が根をつたひ、かけちを傳つて今こゝに來た。ホツと一息ついて、周圍を見廻すと、見るから氣持のよい山の井の水、ドレ一口と立ち寄ると、朽葉色した檜の葉が一枚きれいに寂しく底に沈んで透いて見える。あゝこの水が山の井ならで里の井であつたならば、里人は勿論旅行く人も目をとめて、甘露々と汲みほし、飲みほしする處だらうに、こゝは人里遠き深山のことゝて、たまさかに來た我ならで、又汲む人もないかして、アレあのように檜の葉が沈んだまんまになつてゐるよ。そもこの檜の葉たるや、と一轉して檜の葉の前身を想像して見る。深山の奥に唯一の木、愛なき土に生えて、大日の恵みと雨露の哺みとに、送り迎ふる春又秋、段々寸延びて天をも摩する一本前の喬木となつて朝に朝日、夕に夕日を浴びながら、そのめぐし兒の一片と生れて、此春よりの幾瀬のむつみ、夜があけると「山の井さんお早う」「ア檜の葉さんお早う」今日は可い天氣ですね」「本當に可い天氣ですことあなた一度お姿をわたしの處へお映しなさいな」空が曇れば曇つた會話、雨とて風とて月の夜とて、いつも睦しくさゝやきかはす山の井と檜の葉、「すぐせ」云ふものゝ不可思議はこゝに見られる。さうする中にも、月日のめぐりはをやみなく、やがて春くれ夏くれて、早や秋の風又木がらし、檜の葉は次第に顔の色が悪くなつて、此迄のいき／＼とした濃青は薄青となり、蔦色となり黄色を帯びてくる、「どうしたんです檜の葉さん」此頃は本當に居たまらなくなりました。だつて秋風や木枯嵐が、色々とい

ぢめるんですもの、わたしどうしようかと思つてゐるんです」「ぢやあ、いつそわたしの處へいらつしやいな、こゝなら秋風も木枯嵐も霜も雪もやつて來ませんわ」「サウ、ではあなたの處へ轉宅してよ」「えゝゝさうなさい、それがよろしい」で、バサリと一葉落ち散つた。散つた當座は、輕くて薄くて上に漂ひ、中に漂ひ、ブカリ／＼としてゐたものゝ、だん／＼水分を吸つて重くなつて山の井の底深く沈んで、水と葉とはさながらに常住不斷の接吻を續けてゐる。それも人里近い板井の清水ならば、この睦み居もいつも闖入者があつて又しても汲まれ／＼して濁らされるのだが、人里遠いこの山奥ではさる憂もなく、檜の葉と山の井と心ゆくまで親しい平和な幾月を経てる。と斯う想ひ到れば周圍の静けさ寂しさは充分に味はれる譯で、それを僅かに三十一音に盛つた作者の着想は、彼の一個の胡桃に百匹の猿を彫りつけるのと相似た巧緻さである。

叙情の細緻なものは寧ろ、神經の尖つた現代作家の作品に傑作が多いが、古典文にでも随分精詳緻密なものがある。源氏物語桐壺の卷の始めの方に、更衣の君が病氣危篤で、里の實家へ歸つて養生することの御許しを受けて、今に御暇乞をしようとする間際の描寫に

かぎりとして別る、道のかなしきに いかまほしきは命なりけり

いとかく思ふ給へましかば」と、息も絶えつゝ、聞えまほしけなることはありけなれど、いと苦しけにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覽じはてむと思し召すに云々

君の御おもひも前の世の契りも、一方ならぬ宿世とて玉の御兒さへ御産み申した彼れ更衣は、後宮幾その佳麗が嫉妬の的となり、剩へその身病に堪へ兼ねて、離れがたの帝の御そばを、強ひて御暇して退出しようとする。見送る帝も見かへる更衣も、胸の思ひは千緒萬緒



「これ程の物思ひをするのでしたら、まだく申し上げたいこともございましたのに、今をかぎりとお別れする今日の門出の遣る瀬なき。あゝ、妾は生きてゐたい、いつまでもく生きてゐたい。そして我君様の御情けにお報い申したいと思ひます」

と御かへしをする。美しい眼は病に疲れながらも口より以上に口をきく。帝は之をみそなはして又しても戀着思慕の御思ひと愛撫憐愍の焔が燃えて「いとしの君よいぢらしの更衣よ」と思召される。「いつそ里へは歸さないで、こゝでもかくも精一杯養生をさせて見ようか」とも思はれる。余思ふに更衣は王朝婦人の典型とも謂ふべき、しとやかな美しい、すなほな、弱々とした女主人公であつたらう。その人が更に病氣したと云へばそよとの風にも得たへぬ風情であらう。更にくその病氣が危篤となれば一層弱美の様が忍ばれる。作者がその人を寫すに「聞えまほしけなることはありけなれど云々」と弱い接尾語の「け」を四度まで疊んで仔細にその美しい傷心を表してゐる。

又、増鏡の末章むら時雨の巻に、笠置の砦に敵手に落ち、後醍醐天皇は六波羅軍の手に渡らせられ、一時宇治の平等院に御滞留、やがて京都の六波羅へ御出でになる。處が、こゝは以前から鎌倉にお親しい持明院派の後伏見、花園兩上皇と東宮量仁親王との三所が御住まひになつて居るので、後醍醐天皇をば別棟の粗末な南の板屋にお移し申す。別棟と云つても、同じ構への六波羅のこと、て朝夕の奉仕、出入の下部、三度々々の供御に至るまで、彼と此とは隔てを付けて、向ふに十人仕へればこちらは僅かに五人三人、向ふへ新鮮な大きな鯛をおすゝめすれば、こちらへは粗末な乾魚を參らせると様に、何かにつけて天皇の御機嫌を損ねる仕打であつたと云ふ。この種の委細は到底一般國史では表されてない趣だと思ふ。その本文は次の通である。

六波羅の北なる檜皮屋には、もとより、兩院春宮おはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御しつらひなど

して、おはしませするも、いとほしうかたじけなし。間近きほどに、よろづ聞しめし、御覽じふるゝことごとにつけても、いかでか御心動かぬやうやはあらむ。口をしようおほしみだる。

平家物語卷八山門御幸の一章は實は色々の内容を含んだ文章だが、その中の一節に、皇儲を定められる所がある。故高倉院の第一皇子は安徳天皇だが、今平家と共に西海に落ちさせられたので、天下第一も君主なかるべからずとあつて後白河法皇が然るべき御世嗣をと御物色になる。二の宮守貞親王は豫て平家が此事あるを豫想して西海へお連れ申してゐるので、順序としては三の宮惟明親王が立たるべきだと先づ御引見にならうとて「三の宮こちらへいらつしやい」と御仰せになると、どうしたことが、大さうおむづかりになるので、法皇も御氣色を損ぜられて「あゝ、やかましい、あちらへおやり、早くく」と云はれる。つぎに「四の宮こちらへいらつしやい」と言はれると、愛らしくチョコ／＼とやつてきて、行きなり法皇の御膝に上つて、さも睦まじけにニコ／＼笑つてゐられる。その時の法皇の御心持は、正に推すべきであらう。祖父君と思へばこそ、このやうに馴々しくしてくれ、この人懐つこい調子が已にお氣に入つてゐるのにしけく見れば、そのお顔は、高倉院の御幼時そつくりであると云ふので、とう／＼此宮を儲けの君と定められた。四の宮御諱は尊成親王後に後鳥羽天皇とは此方のことを申すのである。さて當時の法皇の御心持をば、平家物語の作者はうまく寫して

法皇御涙を流させ給ひて、「けにもすすろならむ者のこの老法師を見て、いかでかなつかしけには思ふべき。これぞまことのわが御孫にておはします。故院の幼生に少しもたがはせ給はぬものかな。これほどの忘れがたみを、今まで御覽せられざりつることよ」とて御涙せきあへさせ給はず。

ついで、いよく四の宮を天皇と御定めになる一段を寫して



淨土寺の二位殿、その時は未だ丹後殿とて、御前に候はれけるが、「さて御位は、この宮にてこそわたらせ給ひ候はめなう」と申されたりければ、法皇「仔細にや」とぞ仰せける。

一天萬乗の君位は「仔細にや」と云ふたつた四文字で極つた。すれば尊成親王の一寸の御笑ひは承久の亂を生み、新島守の悲劇を生み、正中元弘の騒ぎを生み、つひに、建武の中興を生んだ譯で、意味甚深の御笑かな、尊かりける御ほほ笑みかなと申上げた位だが、これ等の情趣の紆餘曲折は遺憾なくこの作に表れてゐる。

若し夫れ、世界の最短詩形たる俳句に至つては、僅々十七音を以て全宇宙を包攝すると云つても虚誇ではなからう。上述諸例が彼の「中華國民耳さうぢ」と銘打つて、散髪の後を細大幾種の耳搔をつかつて少しの痛さと、こそばゆさと、痛快さを味はせて、あのむつかしい外耳中耳の隅から隅まで掃除をすると云つた風の小手のきゝ方たるに對し、俳句が示す微妙な趣致は、僅か八疊の小座敷で、大刃の槍を提げて、リュウ／＼ハツシと自在に揮ひまはす腕の冴えにも比すべきものだ。

貞享三年四月と云ふ月には、我俳句史上一時期を劃する大事件が起きた。それはかの俳聖芭蕉が

古池に飛び込む蛙の水音を聽いて

古池や蛙飛び込む水の音

とよんだ一事である。

この句に對する諸家の解釋批評は千種萬様で、それが爲めに「古池水鏡集」と云ふ一冊の單行本まで出る位の騒ぎであつた。今一々それ等を列擧する暇がないから、便宜上左の三説に分類して一通り略叙して後に卑見を加へよう。

一、訓詁的評釋

イ、古池の句を情より起りたりと云ふは、一字も俳諧を知らぬ人の評なるべし。是程目に見えたる姿はあるまじ。然らば句の姿はよく整ひて、後の情は聞えぬとあらば、さもあらんか。此句は蕉門建立の句にして、先姿後情は、明らかかなり。姿は古池へどぶり／＼と蛙の飛び込む様は、爺も婆も童も知るべし。されど句情の後なるは、水の音といへる音の一字に春の夕暮の朦朧として淋しき風情を云ひのこしたるなり。

しかれば一句の様は、目に見えても、童も云ひ出づべき句ながら、其感情の淋しき風情は、詩歌にても及ぶまじ。(里江)

此評は「古池や蛙飛び込む」までを視覚の句、平凡の句、叙景の句とし「水の音」を味ひの句、情趣の句、含蓄餘韻の妙句と見る解で、末には公任の「朝まだき嵐の山の寒ければ 紅葉の錦着ぬ人ぞなき」の咏などと比較されてゐる。後句の餘韻はさることながら、前句を平凡と見るのはまだ淺い。

ロ、只蛙は暮春になれば、鳴き立つ聲のしけきものなるに、其聲だにせで、飛こむ音のみ聞ゆるは、しみかへり寂しき心地すと、こゝに情を調べて古人は聲のみ詠じ來れるに、其音をきゝ出して始めて正風を發起せられたり。(法橋吾山の朱紫)

成程古人は「手をついて歌申上ぐる蛙かな(宗鑑)」など云つて、蛙の聲のみ眼つけてゐたのを、此翁はその聲無き寂しみに加ふるに音有る。寂しみを以てして「さびしみ」そのものを高潮したと云ふのは一隻眼と謂ふべきだ。

二、神祕的評釋

この句は玄妙不可思議、凡人の得て解すべからざるものと云ふ説で以下の如きものがある。

イ、絶唱、一唱三歎に堪へたり。(茂蘭)



ロ、此證において翁も、白雲の卿にホ、笑み給ふべし。(風葉)  
ハ、信じて古を好む。果して探り得られしな。(梅人)

ニ、此句は眞如實相の立意にして、最も大事中の大事なり。中々他より評すべき句にあらざるを何某くれがしの註釋 種々に釋きなすも、少からず。是俳諧に居し俳諧を知らざるの俗なるべし。いかに解くとも玄意を探ること能はず。「音」の一字をいかにおもふやらむ。姿は解くべく情は解くべからずの玄旨なり。是に評釋を加ふるものは、玉に煤を塗り、金に箔するの落度をとらむ。無用の舌を動かすことなかれ。といふ蕉風一派の肝要只此の一事に有り。(曲齋の七部婆心録)

ホ、始終の句法あり、口傳。(槐主人の蕉風俳句大槩)

俳句を知らずして俳句を収々するは無論僭越であらうが、さりとて、此等諸説のやうに、高く祭りあけては、勿體がつき過ぎて俳句と云ふ文字的表現義術の本旨と矛盾するやうにもならう。此等は彼の翁を尊ぶの餘り彼の翁の本意でない解釋を下したものと謂ふべきであらう。

三、哲學的評釋

此には唯一つ野口米次郎氏の日本詩歌論(邦文の方四二—七五)を引く。(禪學的な解は他にもあるが)

The Old Pond: A frog leapt into—— List; the Water sound;

私は先づ以て西洋人は、此發句を讀んで、如何なる印象を得るであらうかを質して見たいと思ふ。私は或者の耳には、單に、音楽家の字母と響くのみで、又蛙などは詩歌としては、馬鹿々々しいと語られても決して之を無條理とは思はない。此の俳句の作家芭蕉は、之を得た刹那に、自己の詩歌の行くべき眞實な大道を悟つたと

傳へられ、近年其權威は多少崩れたと云ひながら、一部の俳人間では神聖視されて居る。日本人が芭蕉の蛙の俳句をして、上乘の詩歌として許す所以は、之に依つて腦底廢寺の庭秋さびて古い池へ突然飛び込む蛙の聲で、天地の寂寥が破られた光景を描くことが、出来るからである。單なる野景愛好者たるのみでなく、哲學的傾向の人たらんには、必ずや之を禪佛教の神祕主義に解釋せんとするのであらう。作家芭蕉は無言の寂莫の裡に、一聲起つて僅かな一微動にも、天地の靜と動は轉換する。生と云ひ死と云ひ唯是れ境遇の一轉に過ぎぬと云ふ觀念に覺醒して、人生の深き信仰を得るに至つたと想像されて居る。此の俳句の眞意味は要するに、作家自身の外、誰も知るまいと云ふのが正當であらう。

そこで最後に余の解を附け加へよう。此は亦上述諸家に言はせれば、天國の神を地上に据ゑ、玄妙の哲理を淺薄な茶話に墮落せしめると批難されるかも知れぬが、少しく心理に即して味はつて見たいと思ふ。

先づ、「こゝに古池がある。とそこへ蛙が一びき飛び込んだら、チャブんと水の音がした」

俳境は此數言に盡きて居る。どんな高級な解釋を下しても此より以外の何物を出すことも出来ない。然るに「池」ときいて吾々は何を聯想するか。單なる池は清澄の水を湛へて、そばには釣殿泉殿があつて納涼觀月の雅會もこゝで催される。池には金鱗美しく金魚も泳げば緋鯉黒鯉も泳ぐ。處が「古池」と「古」をかぶせたらどうか、そこは水さび垣崩れ、岸は雜草に閉鎖されて、訪なふものは夜毎の月や宿無しの犬や、餌に飢えた狐や、眞黒の土蛙位なものだと想ふ。

次に「蛙」と出て来る。暗にぶつつかる暮は無氣味だが通常の蛙は、どこか瞑想的な哲人肌な處がある。「飛び込む」となつて、アノ小さい紅葉のやうな四肢の躍動が鮮やかに閃いて見える。瞑想的な小さな愛すべき妖魔の飛躍その結果として「チャブ——」と「水の音」がするのは當然の歸趣である。然るに吾々の感覺はもと相對的のもので東京銀座



の真中では大聲疾呼もさほどに耳立たないが、夜陰無人の廣室では蚊の聲さへもひどく響く。今の蛙は後の場合で四周寂たる古池へ突然「チャブン」が響いたのだから之を聞いた彼の翁は、肉薄戦で大砲の音を聴くより以上深く胸に沁みに違ひない。而かも翁は唯その「チャブン」を味へて悦に入つてゐようと云ふのではない。

伐木丁々として山更に幽なり

山莊の閑居に主客相對して、主人は語らず客も亦黙してゐる一瞬間、チヨキソ——、チヨキン——、谷の彼方に木を伐る斧の音がする。その音やんで後の静けさは道理に於ては以前の静けさと同じであるべきだが、斧の音の媒劑によつて一層靜かに思はれる。今も丁度それと同じで蛙の音が閑寂を破つて後の静けさは更に一段深い、翁が所謂「さび」の上乗なる場面がこゝに展けたのでその静けさに沈潜して恍として我を忘れるその一瞬こそは眞に一刻千金の價値ある一瞬と謂ふべきだ。遠山寺の晚鐘がゴーンと響く

ゴーン

イでゴーンと鳴ればロまでは萬人一樣に聴く音だが、ロから以下の餘韻は唯イの始あから傾聴せるもののみが能く聴取し得る餘音だが、更にハ以下は音なきに聴く沈潜者の心に残る鐘の音で、芭蕉の蛙はこゝまで沈潜した趣である。それは丁度茶を嗜む人が點茶一服飲み盡して尙ほ餘瀝の幾滴に甘軟芳香の味の韻に舌を悦ばしてゐると同じ趣で、こゝに至れば禪味と茶味と俳味と、三味は畢竟是れ一なりと謂ひたい。

尙又この聯想が自然なだけに配合も亦極めて自然であつて、古池、蛙、水の音の三俳材は三味線の三つの絃のやうにしつくり調子が合つてゐる。若しも此一つを取りかへたらばそれは到底詩にはならない。古池をかへて

淺草や蛙飛び込む水の音

としては如何。讀者は雷御門や本堂前の賑やかさの方が先きに思ひ出されて 蛙の音は小さいものになつてしまふ。では蛙をとりかへて

古池や身投げ飛び込む水の音

としては如何。此は又物騒千萬で、早く交番へ知らせに行かずばなるまいとの躁急な光景になる。それでは水の音をよして

古池や蛙飛び込む蛇が喰ふ

としては如何。殘忍、悲哀、磔の一つも投げ込んで、蛇の頭をこついてやらう位なことしか思へなからう。古池、蛙、水の音この三配合に無限の詩趣を見つけて、以上吾々か滔々數百言を費す程の妙趣をたつた十七音に包んだ彼の翁は、八疊の座敷の槍遣ひ以上の手きゝである。

### 第三章

我國語は言語學上所謂漆着語にして、各語を連結するに「て」にはを以てす。是漢文の如き生硬を免れて優美なる所以の一なり。加之各詞母音を含むこと甚多く音調隨て流麗和諧なり。

#### 漆着語

又加添語とも云ふ。此は言語發達上、中期に屬するもので、もう一つ前には孤立語があり、もう一つ後に

織細巧緻 漆着語



は曲折語が發達した。(尤も言語學最近の説では現今は其曲折語が更に孤立語化して複雑した還元状態にあると云ふが) 孤立語は漢語のやうなもので、例へば「於」は

於此 此において

とすれば前置詞となり、

贈寶玉於其友 寶玉を其友に贈る

とすれば補語附きの助詞の様なものになり

於戲盛哉 あゝ盛なるかな

とすれば感歎詞にもなる。「之」と云ふのも

不知之 これを知らず

とすれば通常の代名詞だが

奉命之匈奴 命を奉じて匈奴にゆく

とすれば動詞にもなるし、

此之謂也 これをこれ謂ふなり

とすれば感歎詞若くは強意辭にもなるし

江南之橘 江北之積穀 江南のたねばな江北のからたち。

とすれば我第一類の助詞のやうに體言相互をつなぐ中間詞(江南江北から見れば後置詞で橘、積穀から見れば前置詞)ともなる。つまりその位置によりてのみ活きを變化づけられる語である。

屈折語又屈曲語とも云ふ。此は語根はそのままで、語尾を曲折させて種々の意をあらはすこと印歐語のやうなものを云ふ。ドラマ Drama は「劇」と云ふ名詞で、ドラマチック Dramatic も同義ドラマチカル Dramatical は劇的の意である。ミュージック Music は「音楽」と云ふ名詞で、ミュージカル Musical は音楽的と云ふ形容詞、ミュージシアン Musician は音楽家と云ふ名詞。ポエム Poem は詩でポエトリー Poetry も詩で、ポエチカル Poetical は詩的でポエチック Poetic は詩學又は詩でポエター Poet は詩人と云つた風に語尾の變化で種々の用をなす。

然るに我國語はと見るに、動詞助動詞の用法に稍曲折語的な部分があるが大部分はさうでない。

文典の方で動詞助動詞の連続を見ると「行く」と云ふ一品詞が

行か きくくけけ

と變化して、その「行か」は行かず、行かしむ、行かる、行かまし、行かまほし、行かむなど云ふし、「行き」は行きつ、行きぬ、行きたり、行きけり、行きき、など云ふし「行く」は行くなり、行くことしなど云ふし「行け」は行けりと云ふ。けれども之を除いてあとは皆てにはによつて連結するものばかりで、

君が行く、君の本、君に似る 君を思ふ。

君とわれ、君へ向ひて、君より彼に傳へられたし。

君よりも彼は冷淡なり。君から彼に語られよ。

君までを疑はしと云ふか。君とてもおなじ旅寢の假枕。

君してそを知らせばや、

實に我國語を持つ文典的特性は、この「てには」を多分に持つて居ると云ふことであつて、體言につくものに如上の



諸種がある外にも、體言にも用言にもついてその意味を種々に限定する制限助詞（助詞はてにはのこと）がある。は、ば、も、し、ぞ、なむ、こそ、のみ、ばかり、まにまに、がてに、つつ、すがら、ことに、なべ、なも、がてら、と云ふ風のものだ。まだその外に用言のみにつく

と、とも、ども、とて、して、にして、ものゝ、からに、で、つゝ、を、に、ば、が、

感歎の意を表す

な、か、も、よ、や、かな、は、はも、なむ、かも、を、ゑ、ものか、い

命令希望の意を示す

よ、や、ね、ばや、か、がな、がも、なむ

禁止の意の

なそ、

など随分多いのに、同じ一つの「と」が示す意が又幾通りもあつて

君と我と、人來と見しは案山子なりけり、

繪に書くと（「とも」の意）筆も及ばじ、

とある軒端にトみて

ありとあらゆる手をつくして

など云ふから使ひわけがむつかしい。外人の不慣れな會話を聞いてみると體言用言はおほつかながらどうか使ふやうだが、この、てにはだけはどうもうまく使へないと見える。

それよろしあります。

あなたそれするいけません。

など云ふ風な語をよく耳にする。

繁冗と簡結との對比から観れば國文のくだく、しいのは漢文のときばきしてゐるのに及ばないかも知れぬが、音調の耳に柔かなことは到底漢文の佶儷贅牙な比ではない。

大日本帝國皇帝

を漢文的に云へば「だいにっほんでいこくくわうてい」であるが、國文的に云へば「おほひのもとつみかどのくにしらすすめらみこと」となつてすつと柔くなる。マア漢文をジャーマンとすれば國文はフレンチとも謂ふべく、漢文が鵠なら國文は鶯とでも譬へられよう。

賴杏坪は有名な漢學者だが、後に歌を香川景樹について習つた。入門の始めに詠んだのは

鶯が 梅の小枝に客居して 而して後 春は來にけり

と云ふのであつたが、段々國文の雅醇を體得し、後藝州藩に仕へて「聽訴の筵にて」と題して

民草にめぐみも露はかけもせて 冷ゆるしもとを置くが悲しさ

と詠んだ。この前後の二首にも漢文國文の對照觀は成立たう。

森田思軒は明治文學史上佛文學の紹介者としても小説作家としても認められた人だが、その譯は佛文を英譯したもの



から重譯されたと云ふ。その文體は漢文直譯體だから今日から之を見ると随分ギクシヤクしたものだ。今「探偵ユーベル」の一節を探ると

ヴキンセントは叫べり。「然り乍ら明朝に至り渠が見えずなる事もあらん」ボニーは云へり。「我々渠を守護すべし」フホムベルトは叫べり「渠の衣服をアラタめよ」「然り然り、探偵をアラタめよ」と若干の人は自らユーベルのホトリに飛びゆけり。

「諸君は渠を守護すべき権利あらず。亦た渠をアラタむべき権利あらず、渠を守護するは渠の自由を狭縮するなり。渠をアラタむるは渠に威迫するなり、且つアラタむるとは愚なり此度の穿鑿のはじまりてよりユーベルが大切なるものをば、復た一も身にツケをらざるべきことは太はだ明かなればなり。」

ユーベルは叫べり「人々をして余をアラタめしめよ余は之を諾す。」  
是れ甚だ驚くべきにあらず。

人々は叫べり「渠諾す、渠諾す、我々をして渠をアラタめしめよ」

余は人々を止めユーベルに問へり「御身は諾する歟」「然り」「御身は其諾の旨を書きつけにて與へざるべからず」「余は眞に喜て諾するなり」

ザラセス其諾の旨をかき、ユーベル自ら名を署せり。其うちに渠は既に衣服を搜索されをれり。蓋し人々はユーベルが署名し終る間を遅つに堪へざりしなり。

今は之を譯するの繁を省くが、とにかく之を純國文體に改作すれば、ずつと音調は滑らかなになることは明瞭だ。其他同氏の譯には、今なら「總督と閣下と主公と」とする所を「曰く總督、曰く閣下、曰く主公」とし、「變だなあ、何だつ

てまご／＼してるんだい、全體君は黒人最良ではないのかい」とでもする處を、「怪底、公は猶豫す、公は黒人の友歟、あらず歟」とし、「僕は典獄に向つていつた。好い天氣ですネエ」とする處を「余は典獄に向ていへり好晴日」とし「可いよ、可いよ、オイ大將、僕にもたれよ、病院まで連れてつてやらう」とすべきを「足れり、足れり、老侶伴、來りて余に靠れ、余病院に送り行かむ」としてゐる。凡て此等は和漢兩文の調子を對照する好例であらう。

流麗 和諧 各音の通性

辭書を著すか、讀むかしたことがある人は覚えがあらう、今日は大抵アイウエオ順になつてゐるが、このア行の一行に屬する詞が非常に多くてヤ行やラ行に比べては殆ど五倍がけ位である。今大日本國語辭典に就いて頁數をあたつて見ると、ア行は

あ	一七四頁
い	一八二頁
う	一二四頁
え	四五頁
お	一四四頁
計	六六九頁

たるに對して、ラ行は、

ら	二九頁
り	五六頁



る	八頁
れ	二五頁
ろ	一七頁

計 一三五頁

而もこれは各語の頭の音だけに就いて言つたことで、若し各語の二音目三音目數音目にア行音を含む語をあけるならばその數は遙かの多額に達することだらう。ア行音とは通常謂ふ母音である。吾々が一番無造作に發音し得る音で、一番清明な音である。隨つて、母音の多い國文も清明な調を帯びるのは當然の結果であらう。が併し、今は以下の論にも關係することだから、この五音の個性をも附加しよう。發音學や音韻學では「ア」を開口音、「イ」を閉口音、「ウ」を合口音、「エ」を半開口音「オ」を半合口音と云ふ。それはそれ／＼の音を發する時の發音機關殊に口の形によつて分けたもので、或は之を支那の宮商角徵羽に配して呼ぶ人もある。ア韻を含むアカサタナハマヤラワ、ガザダババは凡べて快活な積極的な感じがあるし、イ韻を含む、イキシチニヒミイリキ、ギジヂビビは凡べて悲哀、不明、苦悶、暗鬱と云つた風の消極的な感じがする。ウ韻を含むウクスツヌフムユルウグズヅプと、ユ韻を含むエケセテネヘメエレエゲゼベべとはア韻イ韻オ韻の諸音に對して中間性を待つてゐるしオ韻を含むオコソトノホモヨロゴゾドボボは雄大、莊嚴豪放磊落と云ふ風の量的に大きい感じを起させる。此が一般的に言はれる各音の通性である。(勿論各語は各種の配置によつて千種萬様の情趣を持つものだが)

國文の音調美

一、母音を多數に含むこと　そこで我國文の音調上の第一特徴は、この母音を多く含んでゐること

ある。今最も通俗的な小倉百人一首について最初の十首をしらべて見ると、一つも母音を含まないと云ふのは一首もない。(今日の發音によつて附圈する)

あ。きの田のかりほのいほの筈をあらみ	我が衣手はつゆにぬれつゝ	天智天皇
春過ぎて夏來にけらししろたえの	ころもほすてふあまのかくやま	持統天皇
あしびきのやまどりのおのしだりおの	なが／＼し夜をひとりかもねむ	柿本人麿
田子のうらにうちいでて見ればしろたえの	富士の高嶺に雪はふりつゝ	山邊赤人
おくやまに紅葉ふみわけなくしかの	こゑきくときぞあきはかなしき	猿丸太夫
かささぎの渡せる橋におく霜の	白きを見れば夜ぞふけにける	中納言家待
あまのはらふりさけ見ればかすがなる	みかさの山にいでし月かも	安倍仲麿
わがいはは都のたつみしかぞすむ	よをうち山とひとは云ふなり	喜撰法師
花のいろはうつりにけりないたづらに	我身世にふるながめせしまに	小野小町
これやこの行くもかへるもわかれては	知るも知らぬもあふさかの關	蟬丸

二、ア列音を多く含むもの　次には一首一句の中にア列音を多數に含む時には聲調の美一段と引き立つ。平忠度の  
さ。ざ。な。み。や。し。が。の。み。や。こ。は。あ。れ。に。し。を。む。か。し。な。が。ら。の。や。ま。ざ。く。ら。か。な。

は上の句に七個下の句に九個合せて十六個即ち一首の三十一分の十六までが開口音だから朗誦して非常に綺麗に響く。無論その想に於ても舊都今昔の感がよく表はれてゐるからでもあるが、この音調美がこの歌をして秀吟たらしめた主因



の一つであらう。源實朝の

ものふのやなみつくらふこての上に あられたばしるなすのしのはら  
も取材以外下の句に多くの開口音を含んでゐる音調美がある。其他

た。ら。ち。ね。の。は。は。が。み。國。と。あ。さ。ゆ。ふ。に。 さ。ど。が。し。ま。べ。を。う。ち。み。つ。る。か。な。  
い。ま。は。と。て。わ。か。れ。に。た。折。る。あ。を。や。ぎ。の。 か。み。も。さ。か。だ。つ。け。さ。の。か。は。か。ぜ  
あ。が。た。み。に。は。る。來。る。人。の。か。ざ。し。に。と。 植。ゑ。し。や。ま。ぶ。き。は。な。さ。き。に。け。り  
か。は。ぞ。ひ。の。や。な。ぎ。の。絲。に。か。い。り。け。り。 殘。る。氷。の。か。た。わ。れ。の。月  
君。が。た。め。み。づ。き。く。さ。生。し。と。も。か。く。も。 なら。む。か。ば。ね。の。老。い。に。ける。か。な  
雲。井。に。も。か。け。ら。む。と。こ。そ。思。ふ。ら。め。 富士の裾野のはるのわかごま  
は。り。ま。が。た。あ。か。し。の。門。な。み。月。て。り。て。 夜。船。う。れ。し。き。た。び。に。も。あ。る。か。な  
を。か。み。が。は。あ。か。と。き。さ。む。み。か。は。か。み。の。 ゆ。つ。い。は。む。ら。に。さ。る。さ。は。に。な。く  
などは何れも同一例に入るべき佳咏であらう。

良寛 和尙  
澤田 名華  
石川 依平  
大田垣 蓮月  
黒澤 翁滿  
千種 有功  
八田 知紀  
平賀 元義

三、頭韻脚韻に近い反復法

我國の韻文（散文は勿論）には押韻律はなくて唯音數律だけであると云はれてゐるが、時に頭韻脚韻に近いものもあつてそれが文詞の流麗を助けてゐることもある。

あ。ら。ば。あ。ふ。夜。の。あ。り。も。こ。そ。す。れ。 (A 韻)  
か。ひ。の。く。ろ。こ。ま。く。ら。き。せ。ば。 (K 韻)

と様の頭韻

坂はてるてる。鈴鹿は曇る。 あひの土山雨がふる。 (Ru 韻)  
秋はきぬ。紅葉は宿にふりしきぬ。 (Nu 韻)

と様の脚韻がそれだ。併し、多くの場合は唯この頭脚に限らず疊語疊句などをも繁用してそれで文調を調べる場合の方が多い。近松の傑作國姓爺合戦の第二齣千里が竹の末尾

そ。ろ。ひ。も。そ。ろ。ふ。た。供。廻。り。名。も。日。本。に。改。め。て。何。左。衛。門。何。兵。衛。太。郎。次。郎。十。郎。迄。面。々。が。國。所。頭。字。に。名。乗。二。行。に。立。て。ほ。つ。た。て。ろ。承。り。候。と。お。先。手。の。手。振。の。衆。ち。や。ぐ。ち。う。左。衛。門。東。浦。塞。右。衛。門。呂。宋。兵。衛。東。京。兵。衛。暹。羅。太。郎。白。城。次。郎。ち。や。る。な。ん。四。郎。ほ。る。な。ん。五。郎。う。ん。す。ん。六。郎。す。ん。吉。郎。も。う。る。左。衛。門。じ。や。太。郎。兵。衛。さん。と。め。八。郎。英。吉。利。兵。衛。今。參。り。の。お。供。先。跡。に。引。馬。虎。斑。の。駒。母。を。助。け。て。孝。行。の。名。を。取。り。口。取。り。國。を。取。る。

同じ近松の時代物「賀古教信七墓廻」鉢たき齣の一部に

川邊に下て櫛を摘み、岸に上りて石を積み、花を摘んでは父の爲、石を積んでは母の爲、水を汲んでは佛様、のいさま、いくつ、十三二重ともなき用帷の綻び一つ縫ひ着せぬ。母に何處に隠れん坊、父よと呼ぶも木隠れて、飯食ふなふ乳吞ふ、兄よ妹と叫べども、此處に應ふる弟もなく、伴ひ賺す姉もなしなどある皆、この例とすべきだ。

四、返し若くは繰返し これは詞の一部を二度繰返すもので、此方の多いのは謡曲である。謡曲の次第（其事の次第を



冒頭に詠ふもの)には殊に多い。左の諸例の上の七五は凡て繰返す。之を七字五字と云ふ。つまり二十四字に詠ふのである。

今をはじめの旅衣。くく 日も行末ぞ久しき (高砂)

年立ちかへる春なれや。くく 花の都に急がん (東北)

琴の音そへて音づる。くく 是や東屋なるらん (千手)

今日思ひ立つ旅衣。くく 歸路をいつと定めん (船辨慶)

次には「道行」と云つて、行路の景色を詠ふ歌にも用ひられてゐる。

住み馴れし、嵯峨野の奥を立ち出で。くく。 (雨月)

旅衣、木曾の御坂を遙々と。くく。 (巴)

狗の渡りや足早み。宇治の里にも着きにけり。くく。 (浮舟)

墨の衣の碓氷川。下す筏の板鼻や。佐野の渡りに着きにけり。くく。 (鉢木)

併し繰返しの度数の多いのは神樂歌催馬樂の類であらう。神樂歌、小前張の「線角」などはその最も多いものである。

總角

本

あけまきを、 わさ田にやりてや、一そをもふと。二。三。四。五。

末

そをもふと、 なにもせずして、一春日すら、二。三。四。五。

此等の繰返しは、之を朗誦してゐる間にその詞が含む情趣が綿々躍動して、柔かく而もしんみりと人の心胸を浸す趣がある。

繰返の詞の一部を改めたものは上代早く佛足跡歌に端を發し其後歌謡に多く見出された。佛足跡歌のは

釋迦のみあし岩にうつしおき行きめぐり

うやまひまつりこの世は終へむ

我が世は終へむ

ますらをがふみおけるあとは岩の上に

今ものこれりみつゝしのべど

ながくしのべど

と様に多少想を豊かにしつゝ、調を偕へる効果がある。

五、秀句法 これは我國特有の修辭と云つても過言ではなからう。我國文學は此法の爲めに惠まれもしてゐるが、又咒はれもしてゐる。惠まれた例は世々の文學にざらにある。就中此なくては成立たないのは紀行や謡曲や戯曲の道行であらう。

うきをばとめぬ逢坂の關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱。沖をはるかに見わたせば、汐ならぬ海にこがれゆく、身をうきふねのうき沈み、駒をもとゞろとふみならず、瀬田の唐橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や世をうねの野になく鶴も子を思ふかとあはれなり。時雨もいたくもる山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ち



る篠原や、篠わくる道をこえゆけば、鏡の山はありとても、涙にくもりて見えわかず。物を思へば夜のまにも、老蘇の杜の小草に、駒をとめてかへりみる云々

(太平記卷五俊基朝臣の關東下り)

のやうなもので、秀句があればこそ出来た流麗である。外國人が日本文學を英譯したり獨譯したりする時一番惱まされるのは、この秀句だと云ふが、成程此は口語に直すにも「山路を打出ると云ふその打出を名に持った打出の濱にさしかゝつて」と様にごみ入つてくる。

歌の方にも

いづくにか今宵はやどをかり衣 日もゆふぐれの峰のあらしに

俳句にも

世の中は蝶々とまればかくもあれ

川柳にも

煮えきらぬ中だにかひへ鹽を入れ (上杉謙信のこと)

狂歌にも

氏なくて玉の越路へ行く雁を

人も仰ぎて見る北の方 (宿屋飯盛)

の如く随分廣く多量に使はれてゐるが、その爲め、却つて詞の爲めの詞に墮落して眞摯の情熱を缺いたものも多い。我邦の女郎花の歌文に傑作がないのも、女郎花と女とを秀句的に併用したものばかり作つたからだ。近松の心中物など熱烈なる情火の燃えてゐる最高潮に「どうしようかかう生薑酒熬りつくやうに氣がなつて、胸かきまはす玉子酒、こゝ

ろ二つに打破つて、君がかたへと走り行く、後は涙の玉子酒」など云ふので戀の眞劍味は軽く茶化された嫌がある。

六、拍子調

純粹音調其の物の爲めに工夫せられたものは拍子調の嚙しである。中には意味の有るものもあるが多くは無意味の添音で、意味は無いが、何となく文詞を引き立たす功力がある。神樂歌には

大 宮

本

おほみやの、ちひさことねりや、テラニヤ、テラニヤ玉ならば、テラニヤ

末

たまならば、ひるは手にするや、よるはまきねん、テラニヤよるはまきねんテラニヤ

と云ふ調子で「於介於介」と云ふのもある。催馬樂には「ハレ」「アハレ」「アハレソコヨシヤ」「サン」「オケ」「オケヤ」「サキンドチャ」「ソヨヤ」「ナヨヤライシナヤ、サイシナヤ」「ヤラ、イシナヤ、サイシナヤ」「オシトンド、オシトンド」「オシトンド、トシトンド」「ナヨヤ」「タリヤリタンナ」「トウく」「タンナ、タンナ、タリヤ、ランナ、タリチリラ」「タラリ、ラリ」などがあり、

東遊歌には、

一 歌

ヲ、ヲ、ヲ、ヲ、ハレナ、手をとゝのへろな、歌とゝのへろな、さかむのね、ヲ、ヲ、ヲ、ヲ、ヲ、

二 歌

國文の音調美



ヲ、ヲ、ヲ、ヲ、わがせこが、けさの琴手は、アハレ、七つ緒の、八つ緒の琴を、調べたることや、なをがけや、まのかつのけや、ヲ、ヲ、ヲ、ヲ、

など云つて後世歌謡には段々變つた拍子調がかはつて、磯節のやうなものは囃拔きでは一向引き立たぬものになる位だ。

七、對

句 國文特有の修辭とは謂へなからうが、我邦では殊にこの觀念が早く發達した。已に神代の神々の名からしてが、對句のものが多く、

天常立神——國常立神

渥土煮神——沙土煮神

活楸神——角楸神

大戸之邊神——大戸之道神

伊弉諾神——伊弉冊神

の類がまだくある。祝詞は全對半對の語句のみによつて莊重味を帯びてゐるかの觀がある。今大祓詞だけについて對句を拾つて見ると

神漏美——神漏岐。神集へに集へたまひ——神はかりにはかり給ひ。神問はしに問はしたまひ——神はらひに

掃ひたまひ。下つ磐根に宮柱太敷立て——高天の原に千木高知りて。天の御影——日の御影。本打切り——末

打ち斷ち。千くら——置きくら。本刈りたち——末刈り切り。高山の末——短山の末。高山のいほり——短山

のいほり。朝のみ霧——夕のみ霧。朝風——夕風。船解き放ち——體解き放ち。被ひ給ひ——清め給ふ。

祝詞の文脈を多分に取り容れた柿本人麿の歌にも多くの對句がある。今「高市尊(天武皇子)城上殯宮之時作歌」の

中から之を抜くと、

かけまくもゆゑしきかも——いはまくもあやにかしこき。天の下治め給ひ——食國を定め賜ふと。ちはやぶる

人をやはせと、——まつろはぬ國を治めと。おほ御身に、大刀とり帶ばし——おほ御手に弓取りもたし。

齊ふる鼓の音は雷の聲と聞くまで——

吹きなせるくだの音も敵見たる虎か吼ゆると。

山上億良は當時漢文學を誰より多く歌に應用したと云はれてゐるが、その漢文は全文對句によつて綾なされた六朝の四六駢麗體であつたから、彼の長歌や歌序には美しい對向か澤山にある。萬葉卷五、子等を思ふ歌も

瓜はめば 子もおもほゆ

栗はめば ましてしぬばゆ

の對句で始まつてゐる。今一つ彼の作で名高い貧窮問答歌(矢張卷五)にも

天地は廣しといへどあが爲めは 狭くやなりぬる——日月は あかしといへど あが爲めは照りや給はぬ。

などある。

祝詞萬葉以外、上代に出たもので、懷風藻と云ふ漢詩集にも

日邊瞻日本 雲裡望雲端(在唐憶本卿 釋辨正)

對峰傾菊酒 臨水拍桐琴(秋夜山池 治部卿境部王)

と様なものが多いし、風土記にも

携手促膝 陳懷吐噴(常陸風土記 香島郡古津松)

など可なりに多い。

對句は主として聲調を整へるものであるから、朗誦を主にする朗詠集には句々悉く



三五夜中新月色 二千里外故人心

式のものばかりだがそれは漢詩だから略しておく。

漢語を國語に融化した軍記文になると大分今日の人口に膾炙した對句もある。太平記第五卷大塔宮の熊野落の

雨を含める弘村の樹。——夕を送る遠寺の鐘。

或は高峰の雲に枕を歇て、苔の庭に袖を敷き。——或は岩漏る水に渴を忍びて朽ちたる橋に肝を消す。

見上ぐれば萬仞の青壁刀に削り。——見下せば千丈の碧潭藍に染めり。

節つけて謡ふ謡曲には勿論

甘泉殿の春の夜の夢、心をくだくはしとなり——驪山宮の秋の夜の月、をはりなきにしもあらず。

春前に雨あつて花の開くること早し。——秋後に霜なうして落葉遅し。

山外さんごに山あつて山盡きず。——路中に道おほうして道きはまりなし。

山青く山白くして雲來去す。——八樂み人愁ふ是れ皆世上の有様なり。(熊野)

と様な麗句が多い。一々斯う列舉しては際限がない位だが最後に馬琴の八犬傳を引例しておかう。

第二輯卷之一伏姫懐胎の處に

秋士は娶らずして神通たしひひ——春女は嫁がずして戀孕こひなめり。聞かずや、

唐もろこし山楚王の妃は常に鐵くわがねの柱に倚ることを歡びて遂に鐵丸を産しかば、干將莫邪劍に作れり。——我邦近江

なる賤婦は人に癩聚かさを押することを歡びて遂に腕かひなを産みしかば手孕てなみ村の名を遺せり。

第二輯卷三犬塚信乃のことを云へる處に

人而同じからざれども他人にもよく似たるものあり。——人心同じからざれども又知己なしと謂ふべからず。

第三輯卷の四村雨の寶劍の處には

けに音にきく村雨の寶劍、拔けば玉散る露か、——雫しづくか。奇也——妙也。燒刃のほひ天に虹霓こういの引く如く——

地に清泉の流るゝに似たり。豊城三尺の水——吳宮一函の霜。寔に世に稀なるべし。神龍かみりゆうこれが爲に雲に吟じ、

——鬼魅おにまこの故に夜哭かん。

第三輯卷の五額藏道節と切り合ふ處には

こゝろえたりと抜合せて、丁々發矢と戦ふ太刀音、電光石火と晁めかす。一上一下手練てなの刀尖やぶさ、沈んで拂へば

おどりこへ、引けば著入り、進めばひらく。樊噲はんたいが鴻門を破るとき、——關羽かんうが五關を越るの日。孰たしか劣り、

——孰たしか勝らん。天には隈なき月の照り、——地に亦茶毘ちあびの光あり。

などある。加之其全篇を通じて、その題目のつけ方が皆對句法になつて

第一回 季基をしへを遺して節に死す——白龍雲を挾んで南に歸る。

第二回 一箭を飛ばして俠者白馬をあやまつ——兩郡を奮うて賊臣朱門に倚る。

など云ふ句を漢文で記されてゐる。

(造形藝術に於て、シムメトリーが美の通性たる如く、對句は時間藝術たる文學の通性とも謂ふべく各國文學共に此法がある。が、それだけ文學としては低度な技巧で、あまり繁用すると下手に飾つた理髮店のやうな嫌味に墮する嫌があるが、我國文學に於ては大分此技巧によつて音調美を濟したものがあつたやうだ。)



八、枕詞、序詞 草まくら旅ゆく君、さにつらふ妹、など云ふ枕詞（又冠辭とも云ひ古くは發語諷詞なども云つた）水莖の岡の葛の葉かへすくも、あしびきの山鳥の尾のしたり尾のながくし夜、など云ふ序詞とは、音調美化の爲にのみおかれたものと見ることは出来ないまでも形式に重きをおく我等が祖先の遺した特殊の遺産の一つであらう香持雅澄が萬葉古義枕詞解に

言靈のあやしく妙なることわりは、おくか知られず、そこひはかりがたき中にも此枕詞といふものはたとふべきすぢなく、いふべき物もなく、あやしく貴きもの、限りになむありける。さるからに古の心ことばを、心に得まほしくおもふ人は、まづ此枕詞を貴み重みして深く味ひ考ふべきことにぞありける。

と云ひ、又

凡上れりし世の言語は、しらべのうるはしく文あるをよろこぶならはしにてそのことばのあやによりてぞ、神もこよなくかまけたまひ、人もひたぶるにめで給ふことにて、後の世心を巧にして詞をなをざりにするとはい

とも云つてゐる。彼の説では枕詞は單に音調の爲めに用ひるのでなく下な詞を上品に飾る爲めにおくものだと云ふのだが、成程此語の原始的用法はたくぶすま新羅と云へば、單に新羅と云ふよりは典雅であり青雲の白肩の津と云へば單に白肩の津と云ふよりは上品であつたかも知れぬが、その典雅上品と云ふものも畢竟は純形式的技巧から出たもので廣義の見解から云へば矢張音調美の一種で而かもさうした用法は古代よりも中世、中世よりも近古、近世と次第に増して來てゐる。さうならこそおしてゐるには、うまさけ三輪と云ふ風の四音や、ことひ中のみやけと云ふ風の六音の枕詞は次第に用法がすたれて主として、ちはやふる、あしびきの、くさまくら、ひさかたの、うばたまの、ちゝのみの、

は、そはのと云ふ風の五音の枕詞のみが盛に用ひられるやうになつたのである。だから最初にはやふるは逸はや振の意で神を形容した枕詞として用ひてもゐたらうが、後世では、原意の如何に拘らず、ちはやふるは神の上に冠するものなること人の帽子を冠ると同様に思ひ込んで使つてゐる。

序詞の方は枕詞よりも音數が多いので、唯音調のためにそへるとしてはチト御大層の感じがあるので後世では、一首の歌詞なり一節の語句なりに密接する序詞のみを獎勵して之を有心の序と云ひ、さうでない唯機械的にくつつけたものを無心の序として退けた。

天の川みなわさかまきゆく水の

源實朝

の上の句は單に「はやく」を云ふ爲めの序詞と云ふのみならず、銀漢星冴えて天心皓月かゝる立秋の光景をも叙して一首の主旨にも密接するから有心の序だが、

浪間より見ゆるこじまの濱楸ひさしくなりぬ君にあはすて

の上の句は單に「ひさしく」を云ふ爲めに最後に「ひさ」の音を含む「ひさぎ」につゞく句を工夫したまでの物で、小島の楸ととだえし人と何等の関係もないから無心の序である。（但し、その楸が古木であり、それを見ての咏ならば有心になる）併し序詞に有心無心の別を立て、詮議立するのは三十一文字と云ふ短小の詩形になるべく多くの想を盛らうとせられかけた後世のことで、當初の序詞は主として音調の關係上美句をえらび、えらぶと云つても木に竹をつぐやうなおきやうは出来ないから、それがやがて意味の上にも聯接を保つと云ふ風になつてゐたらしい。

何にしてもこの序詞と云ふものがある爲めに、初心の徒は解釋上非常に苦しまされて、今日から見ると音調の美を増す長所よりは晦澁難解の短所の方が大きく、爲に殆ど廢れた氣味がある。余が始めて古今集の序文を見たとき



あをやぎの<sup>〇</sup>糸<sup>〇</sup>絶<sup>〇</sup>え<sup>〇</sup>ず<sup>〇</sup>松<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>葉<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>散<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>う<sup>〇</sup>せ<sup>〇</sup>ず<sup>〇</sup>して<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>づ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>つ<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>ひ<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ば、歌の<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>知<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>こ<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>心<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>え<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ん<sup>〇</sup>人<sup>〇</sup>は、大<sup>〇</sup>空<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>月<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>見<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>加<sup>〇</sup>く、い<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>へ<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>仰<sup>〇</sup>ぎ<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>こ<sup>〇</sup>ひ<sup>〇</sup>ざ<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>め<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>も。

とある附圈の語句の序詞であることとを又しても忘れ／＼して苦しんだことがある。而かも貫之のこの序詞などは序詞としては巧みな方なのである。

九、接頭語 接頭語の中意味あるものは、純粹に音調の爲めにあるものとは云へないが、無意味のものは矢張音調美の要求からつけられたものだ。

生酒、生絲、生藥、生娘、生醬油、生葡萄、生蕎麥、生眞面

の「生」は「純粹」の意があるし、

え。せ。者。え。せ。修。験。者。え。せ。法。師。え。せ。山。伏

のえせは「似而非」の意があるから音調がよくてもわるくても必要な箇處にはつけられるが、左にあぐるやうなのは、最初はともあれ、後世では専ら音調の爲めにおくものと見てよろしからう。

迷ふ  
走る  
牡鹿

崎  
坂  
雪

安し  
走る  
謀る

さ

衣 霧 緑 夜

空 吉野

靡く

ま

弓 砂 柴垣

黒し 細し 弱し あを

を

暗し 筑波 篠 野 田

い

行く 向ふ 觸る 隠る

相

成る 濟む 願ひ

かき

曇る 遣る

さし

出す 控ふ

とり

さたす 扱ふ

たち

越ゆ 別る

うち

眺む 忘る

國文の音調美



一〇、所謂清音の多いこと 從來所謂清音は今日の發音學上謂ふ所の清音とは違つてゐるやうだが暫らく慣用の稱呼に従つておく。我國固有の語は正しい直ぐな清音ばかりで濁音半濁音、鼻音促音拗音のやうなねぢけたひねくれた音は後世の外來音とは此迄よく國學者の口によつて稱へられた。尤も一部反對の學說もあつて徳川時代には論議の花は可なり賑はうた。鼻音の「ん」一つでも本居宣長は『上古には決してこんな不純音はなかつた、今日の「ん」に相當するところは「む」とした』と云ふに對して上田秋成は「上代と雖も「ん」の音はあつたのだが、唯だ「ん」の音に相當する文字がなかつただけだと云ふ。この二つの論の對峙があまりものくしいので、谷口蕪村が茶を入れてあなむつかしの假名遣やな字義に害あらずんばあゝまゝよ」と詞書して

梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら

と句した位だ。今それ等の論議を明らかにすることはやめるとしても、上代に清音の多かつたことは、今も祝詞を読むのに「は、が」などの助詞は勿論、その他後世濁る處をすんで讀むことの多いのででもわかる。

又、拗音や促音や半濁音はキュービー、ラツバ、ペンシルと様な外來語に多いのも事實であらう。がそれ等が文學の上に齎らす効果としては強ち從來の國學者の云ふやうに清音が多いから文調が雅醇だとは断定しにくからう。各音には各音の持つ個性があるから、その個性に向く音貌用に使はれてゐる時は、いつも文調が整つてゐると見てよろしからう。

清音 ハラ〜と涙をこぼす 輕落の貌

半濁音 パラ〜と木の葉散る 輕打の貌

濁音 バラ〜と豆をまく 散亂の貌

と様に、用法が正しければ音の清濁は問題でない。(此點に於ては香川景樹の調の説は正しい)で吾々は寧ろ清濁二音が持つ聯想上の趣を比照してそれによつて清音多き國文が持つ特色を推すのが至當であらうと思ふ。この清濁二音の聯想上の對照については嘗て上田萬年氏が「國語のため」に載せられたものがあるから今それを借りて左に掲げる。

清音の聯想的特質

濁音の聯想的特質

- |          |      |
|----------|------|
| 一、小なる事   | 大なる事 |
| 二、少き事    | 多き事  |
| 三、強き事    | 弱き事  |
| 四、輕き事    | 重き事  |
| 五、銳き事    | 鈍き事  |
| 六、陰なる事   | 陽なる事 |
| 七、明らかなる事 | 暗き事  |
| 八、壯なる事   | 老なる事 |
| 九、速き事    | 遅き事  |
| 一〇、淋しき事  | 騒しき事 |
| 一一、有る事   | 無き事  |



- 一二、靜なる事 動く事
- 一三、美しき事 醜き事
- 一四、優しき事 劣れる事
- 一五、賢き事 愚なる事
- 一六、善き事 悪しき事

成程「ちち」と「ぢぢ」「はは」と「ばば」「肩をトんと叩く」と「大砲をドーンとうつ」「ツ」と「泳ぐ水鳥」と「ツ」と進む汽車「キ」とあく「ギ」とねぢる」などと對照して見れば略此表は當つてゐるやうだ。そこで我國文が一體に優美可憐の趣に富んで莊重雄大の趣致に乏しいことは、音調上斯うした清音の特質を多分に發揮してゐると云ふことも一原因と看做すことが出来るよう。

一一、音數律 我國文に押韻のないことは前に謂つた通りだが音數律だけは早くから發達して居た。即ち長歌ならば

- 五 天地の 七 わかれし時ゆ 五 かむさびて 七 高く尊とき
- 五 駿河なる 七 富士の高嶺を 五 天の原 七 ふりさけ見れば
- 五 わたる日の 七 かけもかくろひ 五 照る月の 七 光も見えず
- 五 白雲も 七 いゆきはかり 五 時じくぞ 七 雪はふりける
- 五 語りつぎ 七 言ひぎゆかむ 七 富士の高嶺は(山邊赤人望 不盡山一歌一首)

即ち五七 五七五七……(こゝでは八句)…… 七七調。

短歌ならば

- 五 白雲に 七 羽うちかはし 五 とぶ雁の

七 かずさへ見ゆる 七 秋の夜の月(古今集秋上讀人不知)

即ち五七五七七調。

旋頭歌ならば

- 五 うちわたす 七 をちかた人に 七 物まをすわれ
- 五 そのそこに 七 白く咲けるは 七 なにの花ぞも(古今集雜體よみ人しらす)

即ち五七七調二句。

今様ならば

- 七 春のやよひのあけほのに 五 四方の山邊を見渡せば
- 七 花盛りかも白雲の 五 かゝらぬ峰こそなかりけれ。(以下同じ)

軒のあやめもかをるなり

花橘も匂ふなり

夕ぐれざまの五月雨に

山ほとゝぎす名のるなり。

秋の始めになりぬれば

今年も半ばは過ぎにけり



我が世ふけゆく月影の

傾く見るこそあはれなれ。

冬の夜さむの朝ほらけ

ちぎりし山路は雪深し

心のあとにつかねども

思ひやるこそあはれなれ。

(慈鎮和尚 四季)

即ち七五調。

連歌ならば、

五うぐひすの 七巢こもりといふ 五作物 發句

七あな嬉しやな 七餅祝ふ頃 二の句

五梅が香の 五先づ鼻へ入る 五春立ちて 三の句

七かすみのころも 七裾はぬれけり 四の句

五佐保姫の 七春たちながら 五尿をし 五の句

七しつとのための 七若菜なりけり 六の句

五澤水に 七つかりて洗ふ 七嫁が脛 七の句

七うそをつきく 七花をこそ見れ 擧句

(山崎宗鑑 犬菟玖波集)

即ち、五七五——七七調。

俳句ならば

五天人や 七あまくだるらし 五春の海

(松永貞徳)

即ち五七五調

狂歌は五七五、七七調、川柳は五七五調、新體詩は七五、七六、八七、五五、七七調等色々あり、箏歌や、小唄や、戯曲挿入の鄙歌も種々の調を含んでゐるが、音律を無視して作つたものは一つも無い。

(音律に関する研究の細緻なものは近頃では五七調の七五調に變じたる理由(國學院雜誌高橋龍雄氏) 岩野泡鳴氏の「新體詩作法中の音律論」、五十嵐力氏の「國歌の胎生及び發達がある。高橋、五十嵐二氏は隨分社會の反響があつたやうだが、岩野氏のは左程稱せられてないやうだ。けれども本當は氏の研究が一番細緻で手が込んでゐて、五十嵐氏のは岩野氏のやり方を國歌に當てはめて、修辭的に洗鍊された語句で飾られた趣があつて此等を併せ見れば非常に有益であらう。)

細かな議論はそれ等に譲るとして我國文學では古來七五調が最も有力であつたことだけは明瞭であらう。(最上古の長歌短歌は五七調であつたものが王朝以後次第に、七五調になつたものと云ふ説は正しいにしても) 隨て、この七五の調子が韻文と云はず散文と云はず、多く取り容れられたものが、音調美をより多く發揮してゐると見ても差支はなからう。軍記、謡曲、戯曲の道行は大體七五調本位であり馬琴の小説はチト食傷の氣味がある程七五調が多い。小唄、端唄、長唄、箏歌や半太夫節、河東節、一中節、富元、清元などの歌、淨瑠璃の歌詞等皆七五調を土臺にしてその上に字あり、字足らず、五音調拍子調や囃しの間奏曲を挿んだものである。即ち小唄の

こゝは山かけもりの下く 月夜がらすはいつもなく しめておよれの夜はよなか

國文の音調美



端唄の福壽草

初春の、日向にならぶ福壽草、めでたき御代の長閑さに、花の心の移氣な、ついつほみさへ開きそめ。

長唄（江戸長唄）の

鶴 龜

それ青陽の春になれば、四季の節會の事はじめ、不老門にて日月の光りを君の叡覽にて、百官卿相袖をつらね  
其數一億百餘人、拜をすゝむる萬戸の聲、一同に拜する其音は、天に響きおびたゞし、庭の砂は金銀の、玉  
をつらねて敷妙の云々

筆歌の

松 風

久方の 月の桂の影高く 風ふきおくりまさごぢを みがきなしたる光をば 晝かとはかり見渡せば浦のたま  
やの秋ふけて打もねならぬあまびとの しほなれ衣袖寒く云々

半太夫節の

異見會我

春雨に、障子あくれば南に 梅に鶯たわむるゝ 羽風に花の散る風情 これやじけつの雪ならむ。

河東節の

助六江戸ざくら

春霞 立てるやいづこみよしのの 山口三浦うらくと うら若草や初花に やわらぐとてをたがゆふて、

にほんめでたき國の名の、豊葦原やよし原に、根こじて植ゑし江戸櫻 匂ふ夕べの風に連れ、鐘は上野か淺草  
か、其名をつとふ花川戸 云々

一中節の

小町少將道行

戀せずば、玉の盃そことなく、物のあはれはよも知らじ、いたはしや少將は、小町御前を負ひ參らせ、いつこ  
とさしてしら玉か、何ぞと人の問はんには、露と答へて消えなまし、あわれ二人が中々に、いつ下紐を打解  
て、とくさ色なる狩衣に、紫匂ふ藤袴、萎る、袖をかいとりて、甲斐々々しげに見ゆれども、いばらからたち  
そぎ竹や、道の小石に足痛み、裾の紫ひきかへて、緋の袴と疑はれ 云々

富元の

那須野

梟松桂の枝に鳴きつれ 狐菊の花に隠るやこのふしど、萩吹きおくる夜嵐に、いと物凄く更け渡る、ニ上野邊  
の狐火思ひにもゆる もゆる思ひの 本調子白露と、消えし玉藻が立ち姿、風に亂る、絲秋の、花こきたれし白  
妙や、紅深く月影に 合うつし心や仇言の 早くも變る飛鳥川 云々

清元の

花がたみ

しの、めの 罌をぬけし初鳥、霞もひくや三本の、根引の松の野も山も、のどかに笑ふ梅が香や、櫻ほのめく  
愛嬌の よろしい春を早や過ぎて、藤もかきつも由縁の色に、五月の雨のおやみなく、またいつ逢はふの約束



も離れぬ中へさしこむ月に、明かすきぬたの布さらし。云々  
 などあければ幾らも同じやうな音律のものがある。

一、附朗讀文に就いて 我邦の朗讀は西洋のエロキューションに比して遙かに無味だと謂はれてゐるが、從來の實地について見ると必ずしもさうではない。朗詠譜を見ると早く印度の聲明などに習つて朗詠の詩賦が發達し、梁塵秘抄を見るに後白河法皇などは御一代ずつと今様に熱中せられたことが出てゐる。平家琵琶や太平記讀や讀賣は近世のはやり物だが、矢張朗讀の分子を多分に含んで居る。美文韻文の朗讀、脚本小説の對話は明治以後に入つても、方々で演ぜられてゐる。外山、山、與謝野寛の諸氏の朗讀振は殊に立派だと聞いてゐるし坪内逍遙氏の脚本朗讀も有名なり、文學界一派の若い詩人が寄るとさはると新體詩を朗誦したことは、透谷全集や藤村氏の作品によく出てゐる。各種學校で催される文藝會學藝會には度々朗讀對話が演ぜられた。余もその學藝會に關聯して一時この方面のことを少ししらべたことがあるから、今その一部を左に記しておく。

讀方には三つの種類があつて、第一は器械的讀方と云ふ。此は表情ぬきで、唯棒のやうに一本調子で讀むもの。第二は理解的讀方で、此は文章の意義内容をよく理解して句讀點を明瞭によみわけ、喜怒哀樂も或度までは表情する讀方を云ひ、第三は審美的讀方と云つて、此は其文の音調美を充分に發揮して表情も巧妙にするものを云ふ。處が、この最後の讀方にしようと思ふと音調の悪い文ではどうもうまく行かぬ。文章としてはすぐれて居ても音調美のない文章は朗讀には不向で、結局眼に見せる文章は耳に聽かせる文章とは別々の用意の下に作らるべきだと思ふ。先づ朗讀文として必要な條件をあけると

- 一、音律を美的にすること。
- 二、含蓄餘情を節してなるべく情趣を敷衍すること。
- 三、閉口音合口音を省くこと。
- 四、複雑な倒置法や引用法や暗喩法を用ひないこと。
- 五、高々十分か廿分位に讀みこなせるものなること。
- 六、なるべく強烈な單純感情をもること。

などであらう。

「旅は苦しい」とよりは「旅は憂いものつらいもの」の方が音律は整つてゐるが、更に個想をもつて

家に在れば筈にもるいひを草枕 旅にしあれば椎の葉にもる (有馬皇子)

とすれば尙秀歌となるけれども之を朗讀文とするにはこれだけでは、不充分だ。若し唯この一首だけを朗讀して落涙の滂沱たるものがあると云ふのだつたら、聽衆は歌境の前後についての事情を十二分に諒解してゐなければならぬ。つまり含蓄餘情が多いから朗讀文には不向である。然るに太平記の著者は後醍醐天皇の「笠置落」を寫して

去程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまるらせて、宮々卿相雲客、皆歩躡なる體にて、いづくをさすともなく、足にまかせて落ち行き給ふ………忝くも十善の天子玉體を田夫野人の形にかへさせ給ひてすることも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。………梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞し召して、木蔭に立ちよらせ給ひければ 云々

と云ふ此ならば朗讀して、充分にその情を表すことが出來よう。



嘗て曾呂利新左衛門を朗讀させたことがあつたが

「とう／＼その罰金を云ひ出した大閣様が罰金を出さねばならぬことになりました」

「胡瓜が胡瓜を喰ふとは怪しからん」と人をやつて見せられますと、成程曾呂利の云うた通り「木賣りが胡瓜を喰つてゐました」

の附圍の箇處の練習に困つた。

「木でつくつた釜を見ました」

「そんなもの火にかけたら直ぐもえるではないか……」

の木は「キ」と本音通りに讀むと「イ」とも「シ」とも「ヒ」とも紛れ易いので「キー」と引張らしたが、それも妙でないといふので「松の木」でつくつた釜」と餘計の音を足して發音の明瞭を計つた。朗讀文に閉口音の多いのは實際閉口だ。

坪内逍遙氏の新曲浦島や、赫耶姫は朗讀向きの美文だが、中には修辭がこみ入り過ぎて聽きてに直ぐにその情趣を髣髴せしむることに困難な箇處もある。

あまり長いものはだれる氣味がある。マア十五分内外長くとも廿分以下位の處がよろしからう。

坪内逍遙氏の桐一葉、殊にその一齣の長良堤の訣別などはよく朗讀文にされるが、片桐且元のやうな複雑な性格の主人公を朗讀で發揮させようと云ふのは無理だと思ふ。

尙その文體用語も取材に應じて調節する必要がある。嘗て「木村重成の出陣」を朗讀させた時、若き妻「さつき」が夫重成との訣別を歎いて

アレ丑の刻、寅の刻、この刻々が我が脊の君の、命を刻む刃の音かや  
と云ふ風に作つたが、若しこれを

オヤもう十二時、やんがて一時、このセコンドの音こそは我が最愛の夫の挽歌

としたならばあまりに近代的にならう。

アラマア十二時、もう一時に間もないこと だん／＼御出發の時刻が迫りますのね

などしては、日常の對話としても拙劣なものとならう。

九代目團十郎は「活歴」で有名だが、その臺詞もなるべく寫實的に「オヤ今のは夢であつたか」と様に云つたが、歌舞伎の見巧者と云はれる觀衆の多數は、それでは承知しないで「あゝ、不思議やな怪しやな、今のは夢でありしよな」式を希望したと云ふのも、朗讀文の方から見れば當然の要求であらう。

朗讀は各人の自由に工夫すべきものだが、之を學校のやうな、學級組織の下に練習するとなると、一定の規矩を要する。で、自分は嘗て韻文散文の朗讀調を作譜したが、事實學級教授には課さないで一部有志の女學生に朗讀させたが、結果は相當に好成績であつた。

散文の朗讀譜は「孝女妙沖」と題する自作文で大體謡曲様のものなのを樂譜に作つたのだが、今は手許にない。韻文の方は大町桂月氏の山村水廓（加藤清正の告別）と云ふ新體詩に節つけしたもので、此なら今も暗誦してゐるから、諸君のお笑ひ草までに左に掲げておく。

歌 詞

八道の山よいざさらば

年のなゝとせ戈とりて



踏みあらしたる日の本の

ものゝふは今歸るなり。

釜山の浦の秋ふけて

空もしぐるゝ夕暮に

波路はるかに帆をあけて

汝れとは永く別るなり。

うらみも深きありなれの

川のながれともろともに

望は逝きぬいざさらば

八道の山よつゝがなく。

知遇の恩に身をすてゝ

四百餘洲をわが駒の

ひづめに蹴むといさみしも

さめて果敢なき夢なれや。

我を知りにし太閤の

世になき後は誰が爲めに

千里の外に戈とりて

異境の山に軍せむ。

恥をしのびて故郷に

歸るも後に死なむ爲め

主君の家の行末を

思へば重き命なり。

あはれ太閤世を去りて

石田小西の小人原

よつぎの主はいとけなし

狐に似たる家康の

かならず事をあやまらむ。

やがて六尺のわがからだ

いかでかたゞにもだすべき

わが幼時よりはぐゝまれ

めぐみをあびし豊臣の

家を守りて死なむ身の

ながくは住まじ世の中に。

あとに見すつるものゝふの

亡き魂も知るあらば

三途の川や六道の

辻にしばらく我を待て。

これを限りの見納めに

今ひとたびと見かへれば

波音すごく雨あれて

野山は霧におほろなり。

八道の山よいざさらば

國のほまれとたゝかひて

花と散りにし日の本の

男の子の骨を守れよや。



変へ調<sup>4/4</sup> 第二回は第一回の倍の速さ即ち<sup>2/4</sup>

//:

5 5 5 5 | 5 5 5 5 | 5 5 5 5 | 5—0— |  
 ハチダウノ ヤヤヨ— ありなれ の—  
 うらみも ふかき—

$b^3$  5  $b^3$   $b^3$  |  $b^3$  3 3— |  $b^3$  3 3 2 | 1—0— |  
 トシノ— ナナトセ ホコトリ ナ  
 かはの— ながれと もろとにも に

5 5 5 5 | 5 5 5 5 | i 5 5 5 | 5—0— |  
 フエアラ ヲタル— いせノモト ノ  
 のぞみは ゆきぬ— いざさら ば

$6 b^3$  3 3 |  $b^3$  3 3— |  $b^3$  3 3 2 | 1—0— |  
 モノノフ ハイヤ カカへルナ リ  
 はちだうの やまよ つつがな く

1 2 2 2 | 2 2 2— | 2 2 2 2 | 2—0— |  
 フザソノ おんに アキケテ  
 ちぐうの

5 5 5 5 | 5 5 5 5 | 5 5 5 5 | 5—0— |  
 シラモ— シシガル、 ユフヤダ レ  
 しひやく— よしうを わがごま の

$5 b^3$  3 3 | 2 12 5 5 |  $5 b^3$  2 12 | 5—0— |  
 ナエヂ— ハル—カニ ホヲアゲ— テ  
 ひづめに けん—と いさみし— も

5 5 5 5 |  $b^3$  3 3 <sup>321</sup> | 1 2 2 2 | 2—0— |  
 ナレトハ ナガク— ワカルナ リ  
 さめて— はかな—き ゆめなれ や

//:  
 5 1 1 1 | 1 1 1 1 | 1 1 1 1 | 15 0 0 0 |  
 フレラ— シリニシ タカカフ ナ  
 あはれ— たいかふ よをさり テ—

5 2 2 2 | 2 2 2— | 2 2 2 2 | 2—0— |  
 ヨニナキ アトハ— タガタメ ニ  
 よつぎの ぬしは— いとけな し



5. 5. 5. 5. | 5. 5. 5. 5. | 5. 5. 5. 5. | 5. 5. 5. 5. | 5. 5. 5. 5. | 5. 5. 5. 5. |  
 チ サ ト ノ | ヲ フ ニ ー | ホ コ ト リ | テ |  
 い し だ ー | こ に し の | こ び と ば | ら

5. <sup>b</sup>3 3 3 | 2 <sup>12</sup> 5. 5. | 5. <sup>b</sup>3 2 <sup>12</sup> | 5. ー. 0 |  
 4 キヤウノ | ヤーニ ー | 1 クサレ ー | シ  
 かなら ず | こと を ー | あまら ー | ん

5. 5. 5. 5. | 5. 5. 5. 5. | 5. 5. 5. 5. | <sup>b</sup>6 <sup>5</sup> <sup>b</sup>3 0 0 |  
 ハヂチ ー | シノビチ | フルサト | ニ ー  
 きつねに | になる ー | いへやす | の ー

1 5. 5. 5. | <sup>b</sup>3 3 3 ー | <sup>b</sup>3 3 2 2 | 2 ー. 0 |  
 カルモ | ノチニ ー | シナムタ | メ  
 いかでか | これを ー | もだすべ | き

5. 5. 5. 5. | 5. 5. 5. 5. | <sup>b</sup>6 6 6 6 | <sup>b</sup>6 ー. 5 0 |  
 シュクソノ | 1 へノ ー | ユクサエ | マ ー  
 やがて ー | るくしやくの | わがから | だ ー

i 5 <sup>b</sup>3 1 | 2 5 1 ー | 5 2 2 2 | 1 ー. 0 | ://  
 オモへバ | オモキ | 1 ノチナ | リ  
 すててかひ | ある ー | ときはこ | む

4/4 中間速に  
 變ロ調

6 7 i i | i i 7 6 | <sup>#</sup>4 4 3 2 | 3 ー. 0 |  
 ワガエサ | ジヨリ ー | ハダクヤ | ヲ

1 1 1 1 | 1 <sup>b</sup>3 3 2 | 1 2 2 2 | 2 ー. 0 |  
 メダミニ | アビシ ー | トヨトミ | ノ

5 5 5 5 | 5 5 5 5 | 5 5 5 5 | 5 ー. 0 |  
 4 へマ ー | ヤモリチ | シナムニ | モ

5 i. 2 2 | 5 5 <sup>b</sup>3 2 | 1 1 2 <sup>b</sup>3 | 5 ー. 0 |  
 ナガクハ | スヤジ ー | ヨノチカ | ニ

5 5 5 5 | 5 5 5 5 | 5 5 5 5 | 6 5 <sup>b</sup>3 0 |  
 アトニ ー | えスツル | モノノフ | ノ ー

5 i 5 5 | 5 5 5 ー | <sup>b</sup>3 5 5 5 | 5 ー. 0 |  
 ナキタヤ | シヒモ ー | シルアラ | バ



5 2 2 2 | 2 2 2 — | 1 2 2 2 | 2 — 0 |  
 サ ン プ ノ カ ハ ヤ — | ロ ク ダ ウ ノ  
 5 5 5 5 | 3 3 3 3 | 1 2 2 2 | 2 — 0 |  
 ヲ ジ ニ — | シ ヲ パ ラ ク | ク レ マ ヤ | 2 — 0 |

第一回、第二回の倍の速さ即ち 2/4  
 //:  
 5 1 1 1 | 1 1 1 1 | 1 1 1 1 | 1 5 0 0 0 /  
 コ レ マ — | カ ギ リ ノ | ミ チ サ マ = —  
 は ち だ う の や ま よ い ざ さ ら ば —  
 5 5 2 2 | 2 2 2 2 | 2 2 2 2 | 2 — 0 /  
 1 ヤ ヘ ト タ ビ ト — | 2 2 2 2 | 2 — 0 /  
 く に の — | ほ ま れ と た た か ひ て  
 5 <sup>b</sup>3 3 3 | 1 <sup>d</sup>3 2 1 — | 5 1 6 5 | 5 — 0 /  
 ナ ミ オ ト ス コ ク カ ゼ ア レ — マ  
 は な と — | ち り に し ひ の も と — の  
 5 5 5 5 | 6 5 3 3 2 1 | 1 2 2 2 | 2 — 0 |  
 ノ ヤ マ ハ キ リ = — | オ ホ ロ ナ リ  
 を の こ の ほ ね を — | お も れ ば や

### 第四章

又我邦は山紫に水清く、柳緑花紅の春の朝、紅錦繡の秋の夕ばえ、自然の妙趣四時盡くることなし。是其思想の纖巧なる所以の一なり。而して其皇統は連綿、其國體は無缺、人民其堵に安んじて鼓腹擊壤、未天變地異の甚しく怖るべきに逢はず、又革命一揆の紛亂に遭はず、置酒高會して花晨月夕に歌舞宴樂す。此亦少なからず我文學思想に影響せり。

### 萬有神教的自然觀

我國が自然美に恵まれた樂土であることは強ち吾々の自惚だけではなささうだ。それは早くは支那人によつて不老不死國とも謂ふべき蓬萊が島と想像せられ、近くは歐米人によつて、東洋のパーク、東洋のバラダイズと迄稱へられてゐるのである。隨て我國の自然美を叙したり誇つたりすることは従來の文學一々枚擧に隙なき程で、今又それを繰返すまでもない。

「驚き」が哲學の始めだと云ふが、我等が先祖は、自然現象に對する驚きといふよりは寧ろ歎美(アドマイヤ)から出發



して一個の宗教哲學を建てた。洋々たる太平洋の蒼溟と、澎湃たる日本海の怒濤を見れば「空や水、水や空なる」の歎美となり、「われて碎けてさけて散るかも」の驚異となる以前、早くも海底靈あるかと疑はれ、こゝに綿津見神を想像した。蜿々たる峰巒北より南より西より東より八重百重、五百重、千重に連且し群峰の精凝りて駿甲の境に富士の神山となる。この統配のいかめしさは日本地理の明らかになる以前にあつては壯美と感ずる前に先づ一個々の山々峰々の威に服してそこに大山祇神を想像し、山のみならず、そこにある大きな巖や古い大木を見るとこれにも靈あるかのやうに注連繩を張つて齋き祭つた。このやうにしてあらゆる自然現象を神の象徴とし、日には大日靈貴尊、月には月讀尊、星には天香々背男、風には級戸邊命、雨には高靈神、土には埴山姫神、野には草野姫神を想像して、機會ある毎に之を尊び之を祭りその靈を慰めその靈に恵まれて來た。太古の我國民は畢竟萬有神教信者であつた。

## 自然の樂園

自然を祭り、自然を賞んでゐた國民は、やがて自然に馴れ、自然に親しむ國民となつた。全體我國の山水で永く國民の畏怖脅威的となるやうな景致は餘りない、濱を見れば自砂青松、野山を見れば柳綠花紅の優美の趣は早晚親しまれるべき素質があつたのであるが、この事を如實に示すものは歌垣の風俗であらう。常陸風土記によると筑波山は當時あの邊唯一の歌垣の場であつたらしい。月清く風爽やけき夕、享樂の男女は手を携へて彼の山上で徹宵歌ひ舞ひ踊りした。自然と人間とはこゝに相親近して人は自然の兒の如く、自然は人の奴の如く、公園の如く俱樂部の如く利用されて威嚴の箔は剥がれた代りに親しみの滋味を増して來た。ついで漢學が渡來し文化が進み、佛教が渡來し、厭世觀か一部にひろまるに連れて自然美の觀方感じ方も亦變つて來たが、大體に於ては享樂的であつた。

日本紀神代卷には木華開耶姫と磐長姫とがある。「木の花」は「難波津」の歌では「梅」のことだが、この時は「櫻」

である。磐長姫と對して開耶姫は美しいが短命だ、磐長姫は醜いが福壽だとしたのは、美人薄命の原始的思想でもあり、自然人事融合觀の濫觴でもあるが何よりも興多いのは後來我國華として、代々の國民が唯一の慰藉でもあり誇でもありする處の櫻を神格化して作話した點にある。

履仲天皇御即位第三年冬十一月、磐余市磯池に御船遊びを催されたが、宴酣にして櫻花の一朶がヒラ／＼と流れて來た。一座はこの唐突なる美の闖入に好奇心が搖いて、とど長眞膽連が命を拜して、花の故郷探索と出かけ、掖上室山まで行つて件の親木を見つけて復命申上けた。サア大變だこりや改名の必要があると云ふので宮の名を一磐余ノ稚櫻宮とし、御使の連は稚櫻部造と姓を賜はり、當日の酒を献つた余磯にも稚櫻部臣の名を賜はつたと云ふ。上古の悠長さ

と、自然の享樂とが結びついた美しい佳話と謂ふべしだ。

櫻が我が國歌の材になつたのも、その御代とは纔に一代の後、允恭天皇の御代からだと云ふ。衣通姫はその時の御妃として、和歌三神の一つとして、更に御容美しくして御肌の光澤が御衣を通したので名を負はせた御美姫として有名だが、春の一日天皇は此姫を召して井の傍に咲いた櫻を嚮はし

花ぐはし、櫻のめで、ことめでははやくはめでず、わがめづるこら

と詠ませられた。人の花と花の花と双美を一所に侍らせられた天皇の御満悦想ふべしであるが、これが本邦の櫻の歌の最も古いものだと云ふ。

萬葉歌人はよく雪を歌ひ梅を歌ひ、時鳥を歌つて居るが漢文學に啓蒙せられただけに、唐情に囚はれた跡があるのはやむを得ないことだ。けれども天智天皇か夕映を見て

わたつみの豊旗雲に入日さし こよひの月夜あきらけくこそ



と詠まれたのは實感味がある。

春秋の争ひ

同じ天皇が藤原鎌足に命じて、群臣を召して春秋の争ひを催されたのも矢張漢文學に暗示を得られたものであらうが、永く後世の「春秋戰(春秋の景色を争ふ)」とも謂ふべき雅會の濫觴となつた。萬葉卷一には、その時の額田王の御歌を載せてゐる。この御妃は秋黨であつたと見えて落想に秋を稱へて居られる。

天皇内大臣藤原朝臣に詔して春山の萬花の艶秋山の千葉の彩を争はしめたまふ時、額田王の歌もちて判り給へる歌

冬こもり 春去り來れば なかざりし 鳥も來なきぬ 咲かざりし 花もさけれど 山をしみ 入りてもき  
かず草深み とりても見ず 秋山の 木の葉を木の葉を見ては もみづをば 取りてぞしぬぶ 青きをば 置  
きてぞ歎く 會訃したぬし 秋山あれば

拾遺集第九卷には

春秋いづれかまさると、とはせ給ひけるに作て奉ける(紀 貫之)

春秋に思ひ亂れてわきかねつ 時につけつゝ移る心は

同じく

元良親王承香殿のとしこに春秋いづれか増るととひ侍ければ 秋ぞをかしう侍るといひければおもしろき櫻を、これはいかゝといひて侍りければ

大方の秋に心は寄しかど 花見る時は何れともなし

後世の註釋によく引例せられる

春は唯花の一重に咲くばかり 物の憐は秋ぞ勝れる

と云ふのも同集に「題知らず、讀人知らず」としてあがつてゐる。

更科日記には、著者菅原孝標女が、自分の歌話を掲げて

春秋の事などいひて云々 いづれにか御心とゞまると問ふに、秋の夜に心をよせてこたへ給ふを、さのみお

なじさまにはいはいとて、

あさ緑花も一つにかすみつゝ、 朧ろに見ゆる春の夜の月

とこたへたれば、かへすくうち誦してさは秋の夜はおほしすてつるななりな

こよひより後の命の若もあらば さは春の夜をかたみとおもはむ

といふに、秋にこゝろよせたる人々は、皆春に心をよせつめり、これのみやみむ秋の夜の月とあるにいみじう興じ思ひわづらひけるけしきにて、もろこしなどにも、むかしより春秋のさだめは、えし侍らざるを、このかうおほしわかせ賜ひけむ御心ども思ふにゆる侍らむかし。

とある。「淺緑」の歌は新古今集春の部上にも出てゐる。

徒然草十九段には春をひいきして

「物のあはれは秋こそまされ」と人毎に言ふめれど、それもさるものにて、今一きは、心も浮き立つものは春の景色にこそあめれ。

と云つてある。ともかくも、斯うこまかく春秋の景物を對照するやうになつたのは、自然美觀賞の一進境を示してゐる



と觀てよろしからう。

王朝趣味と自然美觀賞

遺傳と環境が國民性なり個性を決定することの一適例は、吾人之を王朝に就いて見る。

上述のやうな自然趣味を有してゐた諸民を祖先として王朝の兒は生まれたのである。そしてその朝夕目に視る四圍の風物とは見ると、後年「山紫水明處」の一句に盡くせる平安京のそれで、山河襟帶と云つても、此程その熟語に適確に當嵌つてゐる地勢はなからう。四明が嶽、如意が嶽は眺めてもよし登つてもよし、北に聳ゆる鞍馬山、西に尾を曳く愛宕山、三十六峰が土佐繪の屏風なすその中には、浮世の嵯峨の趣も愛すべく、志賀の山越に甘冽數滴の清水の味や、落花繽紛紅綠亂の艶美もなつかしく、秋さりくれば小倉山、峰の紅葉に朝まだき錦かさねてめづるも一興、麓流るる大堰河、銀線蓮歩楚々悠々と東にうねつては大賀茂の流れに合ふ。おゝこの大賀茂の流れこそは、女性的なる平安京を、彌が上にも優化し軟化し美化し淨化する景致の源泉である。源は比叡の麓、琵琶の湖、エメラルドを削つて溶かせて湛へたやうなあの琵琶湖の水、インクラインの工事も起らぬ古は自然の歩みに任せて、さゝなみや大津の里、昔ながらの山櫻と歌枕の下を潜つて白河や夜船の夢も安らげく糺の森に北から來た高野の川に野宮や賀茂の祭の賑を聞きとり南に折れて市の東を縦に四條五條の夕景色、月も流れを尋ねてすむかとばかり、水美しく澄みに澄んで、布を酒せば布しろく、肌を洗へば肌滑らけく、友禪染と京女は正しくこの流れから産まれた人と産物とであらう。

此河と彼の山と、加ふるにその氣候は温暖、而かも山の氣は海よりも變化多くて一日の中一刻の間、雨に嵐に、雲霧に變々轉々極りなき光景を展開する。

祖先以來自然に親しんで來た我國民殊に朝廷奉仕の雲の上人は、この親しきが中にも親しみ多い環境に接して殆ど極

端と思はれるまでに之に滲透した。

所謂王朝趣味とは一面に於て肉の歡樂を追ふことにもあつたらうが一面に於ては自然の美に浸る趣味であつたことは否定することが出来ない。その好例としては源氏物語の至る處に戀の場面がありながら、又その戀毎に自然の背景があつて篇中の主人公や人物が、その自然の風物を見聞き味はつて更に一層感慨を深ふするやうに作られてあることである。

開卷第一桐壺の卷に更衣の薨後みかどが命婦を御使として更衣の母北の方の二條の宅を見舞はせられる一段がある。「夕づく夜のをかしきほど」に宮を出て先方へつくあたりの趣は

草も高くなり、野分にいとどあれたるこゝちして、月かけばかりぞ「やへむぐらにもさはらずさし入たる」

様で「蓬生の露」を分けてよくも御出で下さいました」とは先方の初一發の挨拶。それから哀しい四方八方の話があつて、「夜も更けましたサア御暇を」と立たうとする頃

月は入かたの空きようすみわたれるに、かぜいと涼しく吹て、草村の虫のこえく、催し顔なるもいとたちは

なれにくき草のもとなり

とあつて、鈴蟲の贈答歌となり、それから宮へ引き返すと 帝は

おまへのつほせんざいのいと面白さかりなるを御覽するやうにて

四五人のしとやかな女房としめやかに語らはせられてゐる。そこへ命婦が御返事を申上げる。

この悲しい背景の月が一方では歡樂の背景になつて始終更衣を敵視してゐた弘徽殿の女御の方では

月の面白きに夜ふくるまで、あそびをぞし給ふなる



と云ふ状態、一つは帝へのあてつけでもあらう。帝は我身の憂きにつけても北の方のさびしさを思ひやつて雲のうへもなみだにくる、秋の月 いかですむらんあさぢふの庭など咏んでゐられる中に

月も入りぬ。

とある。其他どの巻を見ても、どの場面を見ても無背景の記事は殆ど無いと謂つてよからう。

この男いたくすゝろぎて、門ちかき廊のすのこだつものにしりかけて、とばかり月をみる。菊いと面白くうつろひわたりて、かげにきほへる紅葉のみだれなど哀とけに見えたり、(帚木)

や、深う入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花ざかりはみな過にけり。山のさくらはまださかりにて、いりもておはするまゝに、霞のたゝすまひもをかしうみゆれば、かゝる有様もならひ給はず、所せき御身に、めづらしうおほされけり。寺の様もいとあはれなりみねたかくふかきいはのなかにぞ、ひじり入りたりける。(若紫)

八月廿四日、よひ過るまで、またる、月の、心もとなきに、ほしの光ばかりさやけく、松の木すえ吹く風のおと、こゝろほそくて、いにしへのこと、かたり出て、うちなきなどし給ふ。(末摘花)

木がらしの堪へがたきまで、吹とほしたるに、残る木すゑもなくちりしきたるもみぢを、ふみ分けるあとも見えぬを見わたして、とみにも得いで給はず、いと景色ある深山木に、やどりたるつたの色ぞまだのこりたる。(寄生)

のみならず、其巻の名の中、空蟬、夕顔、末摘花、紅葉賀、花宴葵、神、花散里、須磨、明石、潞標、蓬生、松風、

薄雲、槿、初音、胡蝶、螢、常夏、野分、藤袴、梅枝、藤裏葉、若菜、鈴蟲、紅梅、椎本、早蕨、蜻蛉は何れも自然物から來たものだ。

更に又古今集四季の歌は後世歌人の自然美觀賞に對して典型を與へた氣味がある。

暗鬱な冬に鎖された九旬の蟄居が終ると、一陽來復して鳥に鶯花に梅、先づかうした景物に、王朝の春は序幕を開く。殊に鶯の嚀曉たる梭の音は春告鳥の名に違はない。古今集歌人はまづこれを歌つて

春來ぬと人はいへどもうぐひすの 鳴かぬ眼はあらじとぞ思ふ (壬生忠岑)

と云ひ

鶯の谷より出づる聲なくば 春くることをたれか知らまし (大江千里)

と云ふ。

鶯の好配として霜に争ひ、嵐にきほひつゝ逸早く破蕾する梅、古今集歌人はこれをも稱へた。殊にその色の清楚よりもその香の馥郁を悦んだ。なる程梅が香は他の花よりもしるきものではあらうが、之を西洋草花のヴァイオレット、ス पीトピーなどに比べたならば遙に淡いものである。この淡白も王朝趣味の一要素であり、やがて發達した日本趣味の一基調をなすものである。

色よりも香こそあはれと思ほゆれ たが袖ふれし宿の梅ぞも (よみ人しらす)

うぐひすの笠にぬふてふ梅の花、折りてかざさむ老かくるやと (東三條の左のおほいまうち君)

正月七日には若菜の粥が節物になつてゐる。都も鄙もおしなべて、花がたみ手にして、東郊西野に雪間を分けつゝ、すゞな、すゞしろ佛の座、ごぎやう、はこべら芹、なづなと青やかに摘むその樂しさ、古今集歌人は之をも歌つた。



春日野の若菜つみにやしろたへの 袖ふりはへて人の行くらむ (貫之)  
は、奈良三條の大路あたりの光景であらう。しめやかに暖い春雨が降ると

梓弓おしてはる雨けふ降りぬ あすさへ降らばわか菜つみてむ (よみ人しらす)  
と思ふし、折角若菜摘みに行つてもまだ春淺くて若菜の出が遅いのをぢれては

春日野のとぶ火の野守いでて見よ 今幾日ありて若菜摘みてむ  
と云ひ「み山には松の雪だに」と云つて「都は野邊の若菜つみ」を比照し、天皇(光孝)までも「君がため春の野に出で  
て若菜つむ」と云はれた位だ。

千條の弱柳ちまたにしないで、そよ吹く風とそほふる雨とにみづくしい情趣を呈する。歌人の詩囊には之もあつた。  
淺みどり絲よりかけてしらつゆを 玉にもぬける春のやなぎか (僧正遍昭)

櫻、花咲く日の本つ國では幾ら梅でも若菜でも、霞でも、柳でもまだ本當に春らしい氣分にはなれないが、二十四番  
の花暦、次第に進んでやがて陽春も二月に入れば満山満野、繚爛として笑まひこほる、櫻の美觀、こゝに始めて我國の  
春らしい春の景色は整ふのである。古今集歌人の何で之を見おとさう。

さくら花咲きにけらしもあしびきの 山のかひより見ゆるしら雲 (紀 貫之)  
雲か霞か白雪の靨黓たる叙景詩としての先蹤の秀咏であらう。

見渡せば柳さくらをこきませて みやこぞ春のにしきなりける (そせい法師)  
洛陽の三月春錦の如きをめでた一幅有聲の畫であらう。

世の中にたえて櫻のなかりせば 春の心はのどけからまし (在原業平)

雨とて風とひたぶるに、氣にかゝる餘りにもらした風雅の愚痴であらう。

折りとらばをしけにもあるか櫻花 いざ宿かりて散るまでは見む  
櫻に對する熱愛と執着の表現であらう。  
うつせみの世にも似たるか花櫻 さくと見しまにかつ散りにけり (よみ人しらす)  
佛教に眼をあいした無常變易の咏歎である。

たれこめて春のゆくへも知らぬまに 待ちし櫻も移ろひにけり (藤原のよるか朝臣)  
は、「櫻の花を見ざるの記」とも謂ふべき歌で、後來兼好が「花はさかりに」の一段で共鳴した秀咏である。

三春の行樂も夢と過ぎて、落花枝にかへらず、風物己に夏よそひする四月晩春の候ともなれば落花によする惜春の感  
轉々切なるものがある。歌人の感懐はこゝにも表れて、

うぐひすの鳴く野へ毎に來て見れば 移ろふ花に風ぞ吹きける  
落花無常我之を哀しむが故に鶯も亦同じ思ひの音にやなくと云ふ、リツプス氏に云はせれば正に是れ感情移入の好適例、  
吹く風を鳴きてうらみよ鶯は 我れやは花に手だに觸れたる (よみ人しらす)  
餘計の辯解が餘計に興味づける。

散るはなの鳴くにしとまるものならば われ鶯におとらましやは (典侍治子朝臣)  
女性らしい春愁賦の一つ。

こまなべていざ見に行かむ故里は 雪とのみこそ花は散るらめ (よみ人しらす)  
「ブーブー」とおぼけのやうな音をさせて嗅い煙と穢い土埃を残して往く今時の紳士淑女の自働車の群と對照すると此



は亦何たる淡白さであらう。何たる野趣であらう。

(尙古今集歌人は藤と山吹とを歌つてゐるが、あまり秀味も無ささうだ)

斯くて夏の巻には「藤、ほととぎす、たちばな、短夜、蓮、常夏」を歌ひ、秋の巻には「立秋、秋風、銀河、虫、月、秋夜、雁、紅葉、いなほせ鳥、鹿、萩、女郎花、藤袴、薄、月草、時雨、露、霧、菊」を歌ひ、冬の巻には「時雨、山里、雪、梅」などを歌つてゐる。中にもほととぎすに憧憬れたり興じたりしたものが目立つて多くなつたのは萬葉時代の繼承でもあり、支那趣味の影響でもあらう。菊も奈良朝の末から王朝の始めにかけて支那から將來したもので菊合などに大騒した當時の光景は前掲「吹上の濱」の洲濱の所に述べた通である。

大自然と謂つても京の四周はあまりにも小さく整つた自然である故か、王朝人の自然觀は雄大豪壯とひろがらないで纖巧細緻一方に傾いた。

**自然美の縮小** これが一體の趣味を爲し、此根底の上に彼等の衣食住一切、年中行事一切が築かれたらしい。

服装の方の襲と云ふのはいつも「表何色裏何色」とあがつてゐる。色がひの反物を裏表にして袷に仕色して、その色の互に映る趣に興味を持つたのだが、その色あひに染める染料は山梔でも、椽でも月草でも、皆自然物であるし、何よりもその襲の名稱が、自然美に近いことを示してゐる。葡萄染、卯花、青朽葉、梅襲、紅梅、紫苑、白藤、白躑躅などざつと二百種類もあるが大部分は自然の草花木花の名稱である。

住宅は所謂寢殿造でその中庭には池あり橋あり木立あり、池畔に近く泉殿釣殿もあつて納涼觀月の雅遊もこゝで、催されるがその園藝法は一に自然の模倣で、小さいなりに、ミクロコスモスならぬミクロネーチュアを表現してゐる。

庭を秋の野らにつくることや庭に春の草花木花を植ゑることは一般人の嗜好であつて、之が爲めには一廉の高貴な人も、輕装で山野に出かけてこれと思ふものは根こじにこじて持つて歸つて植ゑたものだ。否な萬事に應揚な王朝人は人の家の庭さきにある花卉でも欲しいと思へばドシ／＼手折つたり根こじたりしたものらしい。大鏡には紀内侍の庭先の紅梅を村上天皇の仰せで宮人が掘りに行くと「勅なればいともかしこし」の歌で一寸風流に嫌味を云つただけで、件の梅は宮中に移植されたことが載せてあるし、枕草子には清女が「女ばかりと侮つて、いくら叱つても平氣で庭の草花を持つて行く」とてひどくこほしてゐる記事があるし、源氏物語の夕顔の巻には、源氏が五條の大通りで軒ばの花をゆかしんで「くちをしの花の契りや一枝折りて參れ」と仰せられたので隨身が行つて手折らうとすると、中からいたいけな女の童が来て「どうか、これにのせておあげ下さい、枝がたわんで折れさうですから」とて、たきこがした扇面までも出してくれたとある。

一世の風流子と云はれた河原左大臣はその邸内にみちのくの千賀の鹽釜の雛型をつくり、實地に潮くむ處まで似せる爲めに月々二十石の潮水を難波の海から淀川傳ひに運ばせたと云ふ。これは彼の洲濱の趣味と相通じたものだ(後年近世の名俳坂田藤十郎は京の水でなくては湯あみはしないと云ふので江戸の芝居を打つ時は人夫數多に鴨河の水を荷なつて江戸へ運ばせたと云ふが、此は河原左大臣の贅澤な一面がひどく展びたやり方だ。)

**年中行事と四季の行樂** 太平の世は廟堂を擧つて欠伸の府と化した。その所在なさの單調を破るべく色々の行事

が行はれた。五節句の節物は正月の松、三月の桃、五月の菖蒲、七月の棚つ物、九月の菊と皆自然美自然物に交渉をもつ若菜摘みに、七草粥に、春は平安の兒の最も自然に親しむ季節である。花に霞に百鳥に眼をも耳をも樂しませては、



昨日は東今日は西、南の京もなつかしく、北の郊外見所なきにしもあらずと寛潤の衣をふりはへて子の日遊びの小松曳き、或はかちより或時は白馬銀鞍の遠乗と洒落れる公達もあつたらう。夏にもなれば都は享樂の士女が一年の書入時、賀茂の祭の賑ひに宮も家も人も皆々葵をかざし、折の花を胸や肩に數ヶ處もかざしてキャツ／＼とはしやぎまはると云ふ騒ぎ、青葉に罩むる紫野に、牛車駈くるは郭公を聞く上藤か。卯の花垣根菖蒲草長谷の歸りの田舎道えならぬ言の根をかけて、我一語友一語、或は又「ふすかとすればしののめの」あさまだきには橘の香をなつかしみ、夜は又夜で澤邊に近く飛ぶ螢をあぐがれもゆる魂かとあはれび、秋さりくれば七夕の星合の空に織女の戀をゆかしみ「梶の葉に幾秋かきつ露の玉章」としるし、信濃の駒や甲斐の駒を朝廷に召すとて幾山坂を田舎人の、かひ／＼しくも牽きわたす駒引の御催し、やがて嵯峨野の秋かけて、人まつ蟲の聲も響くやうになると「殿上の逍遙」とて蟲籠手に／＼蟲狩に出かけ、おのれ／＼の獲物をつとに内裏に歸つて主上に捧げる。九月九日重陽の宴、十月五日殘菊の宴。冬は五節や豊明、麻燎の煙ほのたつて舞姫の舞の振はこ、を一世の晴と美しく、白酒黒酒の盃を賜はつて一の攝關も六位の地下も顔ほてらせて歌ひ楽しむ。に至るまで大抵の行樂は自然が一半の補助をしてゐる。お負けに四季折々の消息までも時の草花に結びつけるし、上述以外の行事の裝飾にも先づもてはやされるのは草花木花であつた。之を今日文化の兒が、小松が入れば植木屋に注文し、郊外に行くには馬車自動車を驅り、神田祭も祇園會も肝腎要の金なくて何の己れが祭かなで株式日報の記事に眼を豎に切らして居るのに比べると年代以上の懸隔がある。

故人追懷の情

自然を見て笑ふ間は順境だが自然に對して泣くやうになると人は逆境に立つ。が、併し順境の人は觀照淺薄で、逆境の人のみ能く深刻な觀照に浸ることが出来る。早く萬葉歌人は

故郷となりしならの都にも 色はかはらず花は咲きけり

こぞ見てし秋の月夜は照らせれど 相見し妹ぞいやとしさかる

さゝなみの志賀のからさきさきくあれど 大宮人の船まぢかねつ

と歎いたが王朝多感の天才詩人業平に至つて、千古の絶唱

月やあらぬ春や昔の春ならぬ 我身ひとつはもとの身にして

となつた。後に菅三品が

桃李物言はず春幾ばくか暮る

煙霞跡無し 昔誰か栖みし

と云つたのも此情だ。天地の悠々たるに對して我生の一瞬たるを歎くのも此と近い情だ。

うきことも戀しきことも秋の夜の 月には見ゆる心地こそすれ

王朝末期の女業平とも謂ふべき才媛和泉式部はかう咏んだ。降つて源平の世となつて、福原の新都、住むに快適ならず、淨海の横暴に我人共に不平滿々たる折柄仲秋三五明月の夜が廻つて來た。人々は誰あつて新都の月を見めでよう云ふものはない。或は伏見に廣澤に、若くは都門の西數里、須磨より明石の浦傳ひ、源氏の君の故跡を訪らひなどおもひ／＼の月見の中に、後徳大寺の左大臣藤原實定卿のみは、舊都に駒を走せて姉君の邸を訪づれ待宵の小侍従などとしめやかな一夜をあかして、

舊き都を來て見れば 淺茅が原とぞなりにける

月の光は隈なくて 秋風のみぞ身にはしむ



と今様を賦せられたとある。此も月の美の昔さながらなるに月下にひろがる人界の昔の榮華今の荒敗に想到した今昔の感懐であらう。

土御門上皇はまだ御若い年だのに父帝後鳥羽院の御諭しのままに御位を順徳院に譲らせられた。後にわざと御自作と云はれないで「名もなき童の咏んだものだが此に點を入れてよ」と時の歌聖定家の許へ送られた御咏草の中に

秋の色をおくり迎へし雲のうへに なれにし月もものわすれすな

とあつたので、定家は始めて院の御歌なるを知つて恐縮に堪へず「あさましくはかられ奉りける事」などしるして

あかざりし月もさこそは思ふらめ ふかき涙もわすられぬよを

と御返し申上げた。更に思へば嘗ては、菅公が筑紫の配所を照らした月は又、保昌が笛吹く上をも照らし阿佛尼が旅行く路をも照らし俊基の鎌倉下りをも、謙信が能登の陣をも信玄が野田の城をも、太閤が名古屋の陣をも、四十七義士が討入の夜をも岩倉公が海外の蟄居をも照らした月であることをしおもへば、古人と共に、

幾世々の詠めし人のあとにまた われをもゆるせ秋の夜の月

と云ひたいやうにもならう。處が此種の想は明治大正の今日までも一貫して在る。唯月のみならず、花でも、鳥でも、山河でも、凡べて自然の恒久不變に對して人事の有爲轉變を歎いたものだ。

ふるさとの花のものいふ世なりせば 昔のことをいかでとはまし

は前の菅三品の朗咏と同一趣旨だ。

國破れて山河あり城春にして草青みたりと笠うちしきて時のうつるまで涙をおとし侍りぬ

は、芭蕉が「奥の細道」の咏懐で、「三代の榮耀も一睡の夢」と自然の山河に對して嗟歎してゐる。嗚呼天地何ぞ悠久な

る。人間何ぞ須臾なるの感傷は舊くして且つ新しい人情の一つであらう。

**遠人思慕の情** 時間の悠久と共に空間の普遍なる自然は又よく遠人思慕の對象となる、風に多く鳥に多く殊に月に多い。

雁については有名な史記列傳の話がある。前漢武帝の天漢年間忠節蘇武が匈奴に使用して岩窟の中に幽せられ、飢ゑては氈毛を雪に和して命をつなぐ糧とし、苦節粒々十九年の久しきに亘つた。頃しも炎暑早や去りて秋も最中の空の色、せめては無事とのたよりなりとも故郷の老母に言傳てばやと、空飛ぶ雁に托した消息、そのかひ空しからずして件の雁はやがて上林苑に下り廷臣の手に捕へられて、彼の近況が武帝にわかり、急ぎ講和の約を結ばれて無事に再び故郷に歸ることが出来たと云ふ。

秋の野に初雁かねぞ聞ゆるなる たが玉章をかけてきつらん (紀 友則)

も此から思ひよつたものであらう。更に又

あまのはらふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも (安倍仲麿)

古今集撰者は羈旅の部に此一首を入れた。作者仲麿の人物については是非の論がある。非とするものは我國の文化を促進する大切な使命を帯びながら徒に彼の文物に心酔し彼の上の朝廷に盡したのは非國民的生活だと云ふ。是とするものは彼の文才を稱へ彼の唐朝知名の詩人と詩酒相徴逐した詩才を稱へ、彼の一介羈旅の身を以てよく、光祿大夫兼御史中丞北海郡海國公にまで封ぜられた榮達をも稱へる。論の可否は暫らく措くとして、彼が入唐したのは元正天皇靈龜二年八月十六歳の時のことで時の遣唐使多治比縣守について行つた。留學生がいつしか留唐人に變つて、彼の文化を痛くめ



でて飛んだラフカヂオハーン先生が出来てしまつた。玄宗皇帝は彼の才をめで、段々重く任用せられ、その名も唐朝の趣味から朝衡と改めた。爾來匆々三十五年の月日が流れて我朝からは藤原清河が派遣された。彼も流石に故郷戀しく乃ち、清河に連れられて歸國の途についた。見送りに來た王維や包結や趙驛と明洲の海岸で心ゆくばかりの離別の催しをしてゐる中に、月は海角を離れて渤海灣頭一帯を白銀化した。彼の一首は此時の歌で

我が幼時幾たびか見はやした故郷嫩草山の月は今しも我が胸裏にアリくと浮べられる。アハレ彼の天上一片の皓月よ、今宵も在りし昔のごと三笠の山に冴えてゐることであらう、寧樂のちまたを照らしてゐることであらうあはれ懐かしの月よ山よ故郷よ、能ふべくんば此身此ま、一飛びに故國をさして歸らうものを

と矢の如き歸心の熱を盛つたもので、之を漢詩に譯して送別の一行に示すと一行もその意を悟つて擧座哀愁の涙にくれたと云ふのも尤である。而も宿命は遂に彼をして故山の月を見せしめなかつた。折角出帆はしたが、途中颶風に遭つて難船のまゝに安南に漂着し、それから東の大陸傳ひに北行して又もや唐都に入つて二度のつとめに御覺え愈々めでたく我朝の寶龜元年彼の朝の大曆五年七十三歳を以て逝いた。

無限に續く空間の自然物に對して限られたる人の兒の弱さは熱い強い想像の翼を延ばして千里萬里を飛翔する。源氏物語須磨の卷には

來し方の山はかすみはるかにて誠に三千里の外心地するに權の雫も堪へがたし。

古里を峰の霞はへだつれど 眺むる空はおなじ雲居か

とある、これは

白氏文集卷十三に

冬至宿楊梅館

十一月 中長 至夜

三千里外 遠行人

若爲獨宿楊梅館

冷枕單床一病身。

を引いたものだ云ふ。

増鏡新島守の卷には

はるく見やらる、海の眺め二千里の外ものこりなき心ちする、今さらめきたり。鹽風のいとこちたく吹

きくるを聞きめして

我こそは云々

同じ世にまたすみのえの月や見む 今日こそよそにおきの島守

とある。此は矢張白樂天の「三五夜中新月色、二千里外故人心」をとつたもので、「二千里の外」はこの種の場合誰しも思ひよる句であつたらしい。

尙同趣のものを飛び、に引くと

さるにても我夫の秋より先に必ずと、ゆふべの數はかさなれど、あだし言葉の人心、頼めてこぬ夜はつもれども、欄干に立ちつくして、そなたの空よと眺むれば、夕暮の秋風、あらし山おろし野分も、あの松をこそはおとづるれ、我まつ人よりの、音づれをいつ聞かまし (謡曲、斑女)

偕はまことの父上か、喃懐かしや戀しや、母は冥途の苔の下、日本とやらんに、父上ありとばかりにて、便を聞かんしるべもなく、東の果と聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を開き、是は唐



士、是は日本、父は爰に在すよと。繪圖では近いやうなれど、三千餘里の彼方とや、此世の對面思ひ斷え、若や冥途で逢ふ事もと、死なぬ先から來世を待ち、歎きくらし泣きあかし、二十年の夜晝は我身さへ辛かりし、能ふ生きてゐて下さつて父を拜む有難やと聲も惜しまぬ嬉し泣き。(近松、國姓爺合戦、獅子が城)

今はしばし休みぬべしとて、枕はかたづけぬれど、いつも旅にてはいざとときくせにて、露まどろまれます、雨なほやまねば、をりくはあれまもる雪の音いぶせく、松吹く風も心ほそきに、京には今や夢みるらんと思ひやりつ、云々。(有賀長伯)

さらば道中恙なく、折から烈しき日まけせず、許我へ参りて名をもあけ、家を興して冬籠、北山風吹く頃は、風の便にいらせてたべ、筑波の山のこなたには、恙もなくて君ますと、思ふのみにて侍りてん。今より弱る玉の緒の、たえなばこれをこの世のわかれ、憑むは我見ぬ冥途のみ、二世の契は必よ、御心變らせ給ふなどはかなき事をゆふだすき、かけてぞ契る願言はさかく見えてもおほこなる未通女心の哀なり。(馬琴、八犬傳 信乃と濱路の別離)

都にも旅なる月のかげをこそ おなじ雲井のそらに見るらめ

(修行して伊勢にまかりたりけるに月の頃おもひ出でられてよみける (西行法師))

旅衣うすしと家につけやらば いと寒けき草枕かな 契 沖

やどりして我も一夜の松がねを わかる、岸のよこぐものそら 本居 宣長

武藏の海さしいづる月は天飛ぶや カリフォルニヤに残る月かも

(此はベルリ來航の時佐久間象山が戯れに彼に代つて咏んだもの)

花鳥風月に托して遠人征人を慕ふの情は、蓋し古今東西を通じての不易の人情の一とも謂ふべく、故高山樗牛氏は、「月夜の美感」に於て唐朝詩人張若虛が、春江花月夜獨逸の詩人ハイネが星に寄せたる哀思亦この範疇に出ないことを論じてゐる。

**枕草子の自然觀** 清少納言は之を一個趣味の女性と評するが適切である。戀に生きた小野小町や和泉式部、人生觀照に終生した紫式部に對して清女の生活は理智と趣味との綯ひ交ぜであつた。否な高き理智の苗床に萌んだ高い趣味の生活であつた。その自然觀には時代性の類型的なものもあるが、又彼女獨自の鋭さ細かさを帯びたものも少くない。類型的なものをあけると

淵は、かしこ淵、いかなる底の心を見えて、さる名をつきけむと、いとをかし。ないうりその淵、誰にいかなる人の教へしならむ。青色の淵こそまたをかしけれ、藏人などの具にしつべくて、いな淵、かくれの淵、のぞきの淵、玉淵。

と様な「物は盡し」とも謂ふべき記事で、もとく實地に觀賞しての實感でないのだから、唯當時人々に膾炙してゐる固有名詞を列舉し、その名の音調にすがつて「かしこ淵」とあれば「どんなに深く心の奥底を見られて、こんな名を負うたことか」とをかしみ、「青色の淵」とあると藏人の服装云々と云ふ、一語兩義の外面的な觀方である。この種のもの

一二、峰。(段は金子元臣氏の評釋本による)

一三、原 四〇、蟲 五〇、瀧 五一、川 五四、草 九六、森 一五一、井 一六五、島 一六六、濱 一七三、

遠人思慕の情 枕草子の自然觀



野二〇二、岡 二〇七、星 二四八、崎 などで、後世歌枕とめではやす地名も多く入つて居る。彼女が独自の趣味と見られるものは、開卷第一

春は曙やうくしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるいとをかし。日入りはてて、風のおと蟲の音など、いとあはれなり。冬はつとめて、雪のふりたるはいふべきにもあらず。霜などのいとしろく、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして炭もてわたるもいとつきんし。

春曙、夏宵、秋夕、冬曉、略吾人の趣味に等しいそれに附加した叙景の細緻は、どうしても趣味に生きた彼女の觀方だ。「曙」と云ふ詞そのものが已に柔かみと豊かみと暖かみと晴れた趣を含んで居る。春にふさはしい夜の引きあけを表す詞だ。その春の曙がほの白んで、と見れば薄明は早や薄紫にたなびく峰の横雲を見せてる足らへるもの、象徴であり、平和そのもの、自畫像でもある。彼女がめでたのはこの趣だ。

夏の晝間は幾ら最負目に見ても愛すべき分子は少い。名日が西の山の端にかけつて、暮れぬと告ぐる蜩の聲も涼しく、サツと一浴を終へた輕衣の裾に袂に吹くそよ風、人はこの時晝間の暑さから救はれて復活の新生に入る。まして月あり螢あらば佳興は更に一段であらう。雨は王朝人おしなべて嫌つたものだが彼女は殊に嫌であつた。(成程あのゾベラくとした服装では雨中の外出雨中の行事は随分難儀でもあつたらう)が、その嫌な雨とさへ妥協の出来ること程夏の夜は楽しいと云ふ。秋は夕暮が一等よいと云ふ。ナゼに一等よいかと云へば、夕日の影も華やけく、夕燒雲も美しい。

詩人が久遠の國や永遠の生を思ふやうな神秘的な趣さへもある。それを彼女は愛でたのであらう。處へ、時をさして歸り飛ぶ、黄昏の天使とも謂ふべき鳥の群がアレく三羽四羽又二羽と云つた點景的な描寫は如何にも秋の夕の情趣の特異をうまく捉へてゐる。雁の遠音や遠影、凋落を宣る風の音、夜寒を叩つ蟲の聲々など秋景の焦點はなるほど夕にあるとも謂はれよう。

冬の夜いざとくさめて雨戸を繰れば、雪白妙の路の内外、さならでも霜あつくおく夜あけの都は静けさ淨けさを通りこして寧ろ神々しい趣もあらう。そこへ「火など急ぎ起して云々」と軽く人事を添へたのも室内生活を本位の彼女の生活をよく表してゐる。外はしろがねの満一白中は炭火の紅はせて時ならぬ牡丹の花を咲かす對照は冬早起の人々には直とうなづかれる趣であらう。

二段には、賀茂の本祭(夏祭)の記事がある。

祭の頃は、いみじうをかし。木々のこの葉まだしけうはなうて、わかやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、何となくそよるにをかしきに、すこし曇りたる夕つかた、よるなど、忍びたる時鳥の、遠うそら耳かと覺ゆるまでたどしきき聞きつけたらむ何ごちかはせむ。

源氏物語の葵の巻を見ても、榮花物語初花の巻を見ても賀茂の祭が都人士の一大享樂であつたことはわかるが、物見事の賑はひや、棧敷のしつらひのをかしさや、内裏よりの御使の次第の記事が主で、此人事にバックをつけて一段の生彩を添へたものはこの文章であらう。殊に彼女が時鳥の愛好者であつたことは此草子の數ヶ處に散見してゐるところから推してもわかる。

三十八段「鳥は」のところには



時鳥は、なほ更にいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞え、歌に卯の花、花橘などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたけなる心ばへなり。五月雨のみじか夜に、ねざめをして、いかで人よりさきに聞かむとまたれて、夜深くうちいでたる聲のらうくしう愛敬づきたる、いみじう心あくがれせむかたなし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべていふもおろかなり。夜なくもの、すべていづれもいづれもめでたし、ちごのみぞさしもなき。

と云つて百鳥の中の第一かのやうに推稱し、三十四段に木の花を並べた所にも「卯の花は品おとりて何となけれど、咲くころのをかしう時鳥のかげにかくらむと思ふにいとをかし」と云ひ、八十六段には五月雨の晴間に、中宮の御許しを得て四人連で紫野の明順朝臣の住宅のある方へ、ほととぎす聽に行つた名文があつて彼女は鶯よりも何鳥よりも時鳥を愛し「時鳥鶯に劣るといふ人こそ、つらう憎けれ」とまで極言して居る。

八段には、五節を天候の上から見ての趣味論がある。

正月一日、三月三日はいとすらかなる。五月五日は曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕つ方は晴れたる空に月いとあかく星のすがた見えたる。九月九日は曉がたより雨すこし降りて菊の露もこちたくそほち、おほいたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる。つとめてはやみにたれど、なほ曇りてや、もすれば、ふり落ちぬべく見えたるもをかし。

いつの節句でも快晴と云ふのでは清女の注文には合はない。九月九日の好みなどは、天氣の神も大分工夫しなければ、彼女の氣に入らぬ譯だ。

五十七段には草花のあけつらひがある。

草の花はなでしこ、からのほ更なり、やまとのも、いとめでたし。女郎花、きちかう。菊のところくうつろひたる。刈萱、寵膽は、枝さしなどもむつかしけなれど、こと花みな霜かれはてたるに、いと花やかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。わざととりたて、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたけなり。名ぞうたてけなる。かりのくる花と、文字には書きたる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしけなり。壺菫、菫おなじやうの物ぞかし。おいていけば同じなどし。しもつけの花。夕顔は、朝顔に似て、いひつゞけたるもをかしかりぬべき花の姿にて、にくき實のありさまこそいとくちをしけれ。などてさはた生ひ出でけむ。ぬかつきなどいふもの、やうにだに、あれかし。されどなほ夕顔といふ名ばかりはをかし。

草花を論じてこれ程簡結で而かも濕ひのある文は彼女以前にはなかつた。否以後と雖も兼好の「家にありたき木」宣長の「花のさだめ」など極僅かな名篇が之と比肩するに足るだけであらう。

九十七段には長谷詣の往返を寫して

卯月のつごもりに、長谷寺にまうづとて、淀のわたりといふを物せしかば、船に車をかきすすて行くに、菖蒲、菰などの末みじかく見えしを、取らせたれば、いと長かりけり。菰積みたる舟のありきしこそ、いみじうをかしかりしか。「高瀬の淀に」はこれを詠みけるなめりと見えし。三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲かるとて、笠のいとちひさきを着て、脛いと高き男、童などのある、屏風の繪にいとよく似たり。二百廿五段にも同じ筆つきで大秦まうでの文

八月つごもりがたに、大秦にまうづとて見れば、穗に出でたる田に、人多くさわぐ。稻刈るなりけり。「早苗



とりしかいつの間に」とは、まこと、けにさいつ頃、賀茂に詣つと見しが、あはれにもなりにけるかな。これは女もまじらず、男の片手に、いと赤き稻の、もとは青きをもたりて、刀か何にかあらむ、もとを切るさまのやすけに、めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。いかでさすらむ、穂をうへにして並みをる、いとをかしう見ゆ。庵のさまことなり。

何気なき道途の囁目に軽いスタッツ風の寫生をしたものだが、彼女の自然趣味は寧ろこの種の文によく活きくと描かれて見える。

百十一段九月或日の朝は追懷的に同趣の叙景を序でたものだ。

九月ばかり、夜ひと夜降りあかしたる雨の、今朝はやみて、朝日の花やかにさしたるに、前裁の菊の露こほる、ばかり濡れかゝりたるも、いとをかし。すいがい、らもんなどのうへにかいたる、蜘蛛の巢のこほれ残りて、所々に絲も絶えざまに、雨のかゝりたるが、白き玉をつらねたるさまなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいと重ねなりつるに、露の落つるに、枝のうち動きて人も手ふれぬに、ふとかみざまへあがりたる、いみじういとをかしといひたる、こと人の心ちには、つゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ。

百三十二段うつくしきものには可憐美の併列があつて彼女並に彼女の屬する寛弘時代の好みを代表したやうな一句がある。

蓮の浮葉のいとちひさきを、池より取りあけて見る。葵のちひさきもいとうつくし。何もくちひさき物は、いとうつくし。

又印象的な描寫は、後世の俳句に似て俳句にも勝つた名句も少くない。

百八十七段

月のいとあかきに、川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。は短文として余の最も好める一段だが、尙次の三段も同趣の文だ。

二百五段

日は入日。入りはてぬる山ぎはに、光のなほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり。

二百六段

月は在明。東の山の端に、ほそうて出づるほどあはれなり。

二百七段

星はすばる。牽牛。明星。ゆふづつ。よばひ星をだになからましかばまして

其他風は百六十二、百六十三、雪は百五十の各段に記され二百五十六段には有名な「香爐峰の雪はいかに」の機智も出てゐる。

木と木花の好みは三十七段の「木は」三十四段の「木の花は」の兩段に表はされてゐる。木の花では、梅、藤、梨、桐、棟などをあけてゐるが、愛鳥の時鳥との配合上卯の花と橘のこと、がほめてある「卯の花は品おとりて何となけれど云々」と時鳥のかげにかくるらむと思へばよろしいと云つた前掲の文で、

橘は、橘の濃くあをき花のいとしろく咲きたるに、雨のふりたるつとめてなどは世になく心あるさまにをかし。



花の中より實のこがねの玉と見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたる櫻にもをとらず。時鳥の夜すがとさへおもへばにや、なほ更にいふべきにもあらず。

とある。矢張時鳥と可憐とを愛する趣味の文である。「木」の段ではかつら、五葉、柳、橘、その木、檀、やどり木、榊、楠の木、檜、かへの木、あさはひの木、ねずもちの木、棟の木、山梨の木、椎の木、白樫、柏木、棕櫚などをあげ、榊は神木でもあり、神樂歌にもあることなどをほめ、白樫も歌物語の聯想からめで、棕櫚は支那趣味のをかしみをめでてゐるが、「ゆづり葉」の一節は味ひのある叙述だ。

ゆづり葉のいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青う清けなるに、思ひかけず似るべくもあらず。莖の赤うきら／＼しう見えたるこそ賤しけれどもをかしけれ。なべての月頃は、つゆも見えぬもの、しはすの晦日にしも時めきて、なき人のくひ物にもしくにやと哀なるに、又齒のぶる齒固の具にもしてつかひためるはいかなるにか。「紅葉せむ世や」といひたるものもし。

思ふに清女が一生は、中宮の一侍女としてよりも、和漢の故事に通じた女學者としてよりも、歌で鳴る清原家のいつき娘としてよりも趣味の第一人者として意味深きものがあるのではなからうか。中宮の侍女としてならば宰相の君を始め歴々の子女が澤山ある。(但中宮と意氣投合したことが彼女の趣味性を發揮するに好事情を附與したと観るのは正當だ)女學者と云ふ上から観れば紫式部の方が遙に學殖があつたらう、大進生昌をやりこめたり「廬山夜雨草庵」の句に答へたりしたのは寧ろ彼女の機智を示したものだ。歌の方では當時彼女以上のものに和泉式部、赤染右衛門、江侍従、紫式部、馬内侍などがあつて之を梨壺の五歌仙と云ふ。彼女は歌の家に生まれながらそれ等の女流以上の歌を詠む自信がないので、後にはあまりよまなくなつた。一面きかぬ氣がつよくて「一二にてをあらむ三四にては苦しがるべし」と頑張

111882

つた彼女のことだから咏むからには第一等の歌が詠みたかつたのであらう。「世に逢ふ坂の關はゆるさじ」とか「草の庵を誰れかたづねむとか」「ほととぎす尋ねてきし聲よりも」とか咏んで喝采を得たと云ふのも當意即妙の機智頓才の場當りに過ぎない。歌そのものはさして秀歌でもない。が彼女の趣味の眼の高いこと細かいこと鋭いこと冴えてゐること、濕ひに富んでゐることにかけては當時も一品であり後世にも稀だ。そしてその趣味の一半は上述諸段の自然觀にあらう。

王朝宮廷の植木 因に王朝宮廷の樹木を統計的に示すと (金子氏の擧げられたものを借りる)

- 櫻 一〇、 梅 七、 紅梅 五、 棟 七、 梨 六、 柳 五、 竹 五、
- 松 五、 五葉松一、 藤 三、 枇杷 三、 橘 二、 楓 二、 辛夷 一、
- 木蘭 一、 椎 一、 桐 一、 柿 一、 栗 一、 棕櫚 一、 夏櫨 一、
- 棕 一、 椴 一、 櫨 一、

櫻は三月に南殿のそれが花盛りなので、茲で上下の諸臣を集へてみやびやかな酒宴を催されたことは榮華、源氏の諸物語によく見えてゐる。其内「左近の櫻」(左近衛府の司る櫻との意)は南階の下に在つて右近の橘と相對してゐる。禁中秘抄によると桓武天皇遷都と共に植ゑられ、その後度々類焼の厄に遭うてその都度若樹の櫻をあとに植ゑて近代のは堀河の朝のものが残つてゐるのだと云ふ。

之に對する右近の橘は大内裡圖考證、安通志などにその記事があるが宮中に植ゑそめたのはいつともわからぬ。日本後紀嵯峨天皇大同三年六月甲子の處に



禁中に、一株の樹あり。凋枯日を経て生意既に盡く。忽ち花葉を生じ、楚々として愛すべし、茲によつて右近衛府奉獻す、宴飲物を賜ふに差あり。

とあつて南殿に植ゑられたのは嵯峨の朝であつたらしいが、此も火災毎に植ゑかへくせられた。天徳三年十二月に植ゑたものなどは高さ一丈二尺もあつたと云ふが、今上陛下御即位の御大典後余が眼のあたり拜觀したのはずつと小さかつた。

梅壺の梅、清涼殿の梅共に持て囃された。梨壺の梨、桐壺の桐、藤壺の藤はそれく、植木によつて異名ある後宮五舎の一つである。竹は殿上人がその枝をかざして清少納言が「この君」の秀句となつたとか、ともかくも前掲の立木が宮廷を趣づけだことは少くはなからう……と同時に今日と雖も我國民の庭木としての好みは王朝時代と大差ないことが分る。(白楊や山楂子やランタナを植ゑかけたのは西洋趣味の模倣であらう)

自然詩人西行

我に一個のワーツウオースが在るか、我に一人の陶淵明があるか。余は之を詳にしないが、さう聞かれて直ぐ聯想するのは西行である。その身は武門の出にして、一度は鳥羽の御代につかへ、北面の武士とか左兵衛尉とか武張つた肩書の所有者であつたものが、一朝從弟憲康の頓死に遭つて「棄恩入無爲、眞實報恩者」と觀じ、最愛の妻子をあとに、嵯峨の庵に姿をかへると共に名も圓位とし「行脚の旅の空、高野山、吉野山、長谷の觀音、伊勢神宮、東海道から奥州街道、踵を返して西の方では中國四國西國まで流萍飛蓬のさすらひをつゞけて終に洛東岡崎の双林寺に長逝した。彼が歌は山家歌集、御裳濯川宮川の兩自歌合に載せてあつて今日尙諸家の推稱と批評とに喧しい位である。從來彼並に彼の歌を評するものは即興詩人的特性をあげ、人間愛をめで、宗教悟入をめで、自然愛を稱へ、など

人々によつて少しづつ違つては居るが皆その一面は確かに把握し得た評だ。近頃又彼は「さすらひ」の趣味に生きたと云ふ人もある。余は思ふ。彼の生涯に於いて最も太い一線は自然愛であつた。否自然愛と謂ふには餘りに強く熱い自然即生命であつたと。國文學を通じて觀ると單なる自然愛は已に上代にも發達してゐた。王朝に入つては尙更に繊細都雅な味を増した。けれども自然美に對して全人格的に滲透し、執着して其中に息づけるものは我西行を置いて誰ぞと云ひたい。その中には彼自からが自然を抱擁した事もあらう。又彼自からを大自然の懷裡に投じたこともあらう。或は自然と彼とが交互にソプラノとなりアルトとなりバスとなつて、美妙な二部合奏をした事もあらう。ともかく彼と自然との間には皮膜一重の隔りも無かつたと觀るのが至當であらう。それを證據だてる爲めに以下少しく山家集を順々に繰つて説かう。

柴の庵による梅の匂ひ來て やさしき方もあるすまひかな  
詞書には伊勢の「にしふく山」の庵居の所詠とある。旅寢物憂き假の庵も梅故愛すべき宿と變つたと云ふのだ。

今更に春を忘るゝ花もあらじ やすく待ちつゝ今日もくらさむ  
花を下待つ彼の心はまるで戀人の消息を待ち焦るゝ戀の兒のやうではないか。

おほつかないづれの山の嶺よりか 待たるゝ花の咲き初むらむ  
あの山この山いつ咲くことかと明け暮れ眺むる彼の心境を表したもので、どこの山邊もまだ一向に花のけはひの見えないので幾分の焦躁と不安とをこきまぜての春の初花に對する最初の一瞥の地點に好奇心を煽つてゐる趣であらう。

吉野山こすゑのはなを見し日より 心は身にもそはすなりにき

子供に翫具西行に櫻とでも云ひたい位で、吉野の山にチラと櫻が咲きそめたらさあ事だ、モウ我が心は有頂天だと云ふ。(内村鑑三氏の話によると吉野の花盛りに相客が襖一重を隔てゝの話にこの櫻を浸して何とか氣のきいた銘酒を賣出



すことにして、こゝに一つの醸造會社を建てたら屹度儲かる云々と聞えたとあるが、西行の歌に比べて雅俗雪泥月鬣以上の差異だ)

ねがはくは花の下にて春死なむ そのきさらぎのもち月のころ

彼の死亡申込書の何たる風雅なことであらう。自然の笑ふ春の季節、自然の寵兒の花と月とに看取られて、靜かにこの庵双林寺の死の床から久遠の旅出がしたいと云ふこの一首、これに彼が生涯を物語つてゐるかのやうな觀がある。彼が臨終の氣が、りは七珍萬寶でもなかつた、子孫繁榮でもなかつた。まして今時の富豪のやうな遺産處分や生命保險の手續などは夢寐にも心につけなかつたことであらう。

佛には櫻の花をたてまつれ わがのちの世を人とぶらはば

平家物語を見ると淨海入道の臨終に「我死なば、香花の盛を以てする勿れ、供養の盛を以てする勿れ、唯彼の頼朝が首を斬つて墓前に手向けよ」との意を遺言してゐる。何たる娑婆氣ぞ。それから見ると西行が「櫻の花を」と所望したのは對象がすつと淡泊で執着は遙に強い。この世の生きの限りの幾春毎を見て見て見盡して死んで見たいと思ふものは矢張あの櫻だとの心持を想ふと心にくいまで櫻の愛に活きた彼の風貌が想ひやられる。

花もちり人の來ざらむをりはまた 山のかひにて長閑なるべし

彼は花下の賑やかさを好んだらうが、落花以後の淋しきをも愛した。外の所でも

とふ人も思ひたえたる山里の さびしさなくば住みうからまし

とも云つてゐる。嘗て古今集の躬恒は

我宿の花見がてらにくる人は 散りなん後ぞ戀しかるべき

と云つた。これには孤寂の悲しみが見えるが、西行のは「來るものは拒まず去るものは追はず來往畢竟外界の些事」と軽く見る。運命に對する従順さも見えてゐるが、一步深く觀ると寧ろ花の下に來集ふ人々は花散つて後の寂しさを寂しがらせる豫件としてのみ効果を認めてゐるのではないかとさへ疑はれる程寂しさに安住し寧處した跡が忍ばれる。

失戀の兒はよく「誰も居ない處で一人で思ふ存分泣いて見たい」と云ふが、自然の兒なる西行も俗を雜へず唯一人、寂しさを體得してその孤寂裡に眞劍味を發揮しようと思ふのであらう。曰く「山のかひにて長閑なるべし」曰く「寂しさなくば住みうからまし」何ほう心にくい述懐であらう。

いかでわれこの世の外の思出に 風をいとはで花をながめむ

花の咲くばかりが自然であらうか、花にのみ相對して相笑むは廣い自然の大廣間に屏障を立て、おなじみ客の男にのみ嬌びを捧ぐる藝妓の態度だ。咲く花も吹く風も等しく造化の示現と思へば、特に花を愛して風を憎むと云ふのは狭い。散る花をして散らしめよ、吹く風をして吹かしめよ。風をも厭はずして花をめでの心境それを生き甲斐のある思出したいと云ふ、そこに西行の達觀が潜んでゐる。鳩をも救ひ鷹にも恵んだ釋迦の大慈大悲は人類愛の擴張せられた萬物愛であらうが、花をいとほしき風に興する西行が雅懐は花に對する愛著と自然愛との鬭争の忍苦の試鍊にあけ得た叫びで別に又「雲にたゞ今宵の月をまかせてむ厭ふとしてもはれぬものゆゑ」と云ふのも同趣の感慨であらう。

うき世には留めおかじと春風の 散らすは花ををしむなりけり

前咏よりも更に一步を進めて、吹く風を善意に解釋したものである。否花はこの穢土に永存すべく餘りにけ高く清いと云ふことによつて、反面から花の美を高潮したものである。

ながむとて花にもいたく馴れぬれば ちる別こそ悲しかりけれ



老人はともすれば別れの間際に「又お目にかゝれますことやら……これが一生の御別れかも知れません」と云つてホロリと涙を落す。これは餘命幾何もない老境の人や致命的な痼疾に死期を宣告された病人などには無理からぬ思ひだが、年若くして「これが見をさめ」と痛感し得るものは唯よく無常迅速の佛教觀を根底的に體感せるもの、みの爲し得ることだ。そして西行は實にその部類の人であつた嘗て都への返りに遠江の國さやの中山をこえる時

年たけて又越ゆべしと思ひきや 命なりけりさやの中山

と咏歎した。この「命なりけり」の感は事々物々に投ぜられたが別けても自然の美に別れる時に強く叫ばれた。この咏もその一首である。西行にとつては愁ひ人間の形した非人間よりも一株の花弁や一朵の花房の方が、ずつと人間味のある親しい相手であつたに違ひない。その花の今枝を辭する別れは人と袂を別つより以上の哀別離苦を感じる。況や人間の身のはかなさは「又こん春」と契ることをすら許さない。この一瞬彼の瞳は沈痛な運命的な暗愁の色を帯びて居たにちがひない。

さまざまのあはれをこめて梢ふく かぜに秋知るみやまべの里

春信逸早く暖を傳ふるものとしては、花に梅あり鳥に鶯ありだが、秋のたよりを齎すものとしては花に七草鳥に雁とよりは寧ろあの冷涼一陣の風であらう。

秋きぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる (古今集秋の部上 在原元方)

は、よくこの間の心持を咏出して居る。而も西行がこの咏に「さまざまのあはれ」とは何か。待賢門院堀河との戀のおもひ出か、體仁の親王みかにまつはる憤慨の追懷か、従弟の死か、妻との別離か、愛兒を一蹴し袂を拂つて出家の途に出たあの痛ましい試練か。長谷における出家姿の妻との邂逅か……それ等もあらう。それ等以外の哀愁もあらう……思へ

ば既往茫として夢に夢見る哀愁の繪卷のその一卷々々を、繰り返させでは已まぬ風の音である。否風そのものも感慨なき能はざる風だ。三季の生は枯木立や花の梢や青葉若葉のしけみを相手に様々の悦びと歎きを織つて今や最後の一枚に、紅錦繡の美を綾なさうとする。それも處刑の罪の兒が一餐の珍味を恵まれる様の悲しみの前の氣やすめ、それを音にして颯々と吹いて颯々と鳴るあの風、底涯そこなき感傷はそれを中心にして千緒萬緒の悲哀の緒琴を弾かせる片山里の秋の趣が味へば味ふ程趣深いものがある。

うちつけに又こむ秋のこよひまで 月ゆゑをしくなるいのちかな。

題は「八月十五夜」と云ふのだ。西行は月の歌が上手だと云ふ。上手下手の問題ではなからう。命かけて愛するものを上迂りな月見の宴にうつゝをぬかす俗輩が見たてゝの俗評ならばいざ知らず。眞面目に月の歌が上手だなどと技巧一遍な讃辭をささけるのは最眞の引き倒しで、彼を稱へんとして却つて彼をそしるものと謂ふべきだ。春去り秋くれて幾春秋、人事の頼むべからざることば最早飽き／＼する程見せつけられた。五濁惡世のこの穢土に露聊かの未練はないが、秋空一霧、嫦娥の美に對するの時、俗腸頓に洗はれて我が魂は月に溶け、月の靈は魂と相さ、やく、噓秋なるかな、夜なるかな、月なるかな、奇しくもめでたきは秋の夜の月なるかな。この慰樂の餘韻が魂のどん底にこびりついた時「又こん秋」までの執着となると云ふ。これは實朝の

世の中は常にもがもな渚漕ぐ 蟹の小船の綱手かなしも

と相通じ、小西來山の

花咲いて死にとも無いが病かな

とも相通じて居る。而かしその叫びはどの邊から發せられたか。或は口耳三寸の間より出、或は喉頭一片の聲帯から出



るものもあらうが、我西行のは魂のどん底から叫ばれたものである。それは他の多くの月によせた述懐からでも、又他の自然美にあこがれた態度からでも推することが出来る。就中

深き山にすみける月を見ざりせば 思出もなきわが身ならまし

月はなほ夜なく毎に宿るべし わがむすびおく草の庵に

厭ふ世も月すむ秋になりぬれば ながらへすばと思ふなるかな

の三首は感味の多い詠歎である。

あられにぞものめかしくは聞えける 枯れたる楢の落葉は

戀する人は戀する相手の一顰一笑にも心ときめきする如く自然愛に生きる西行は自然の活字のミスプリントとも謂ふべき些細な景致をすら見逃さない。楢は樹立の時からしてさほど人を惹きつける魅力を有つてゐない。況や枯木立となつた楢に何の魅惑があらう。更に況んやその楢の枯木の落葉した一ひらと云ふやうなものは、終生認められないやうに運命づけられた造化の織兒であらう。而るにこゝに潜々たる霰が降つてその枯葉を叩くと矢張り一人前否一枚前の音をたて、こゝに一枚の葉ありとばかりその存在を認めさす「ものめかしく」の一語眞に形容し得て妙である。彼自身にさる意識はあつたか無かつたかは知らぬが、この一首の如きは確に人生の大きな暗示をも含んでゐると思ふ。社會の下積になつてゐる弱者、さならでも相對的に弱者の地位に在る人はいつもその上層から壓迫され強要され侮蔑され蹂躪されてゐる。少しでもその存在を認められる時はやがて慢侮嘲弄される時なので、丁度楢の枯葉の存在を認められる時は即ち霰に叩かれる時なのと相似た趣がある。人生苦社會苦の體驗者にしてこの歌に向つたならば、云ひしれぬ哀痛が滲出するであらう。

こゝをまた我すみうくてうかれなば 松は獨にならむとすらむ

「庵の前に松のたてりけるを見て」と詞書あるもので、前の花に寄せたと同じ愛著である。庵前一株の松も之を偶然の立木と見るのは彼の本意ではない。宿命の奇しき配劑によつて暫らく我と彼と相對すると觀る。我は彼によつて慰められ、彼は我によつて立ちがひある生を生きるを觀る。我と松と、松と我と朝々暮々の交驛も、一朝こゝを去らば我には到る處青山もあらう白水もあらう、花木風竹友に事缺く旅でもあるまいが、後に残つたこの松は見る人なくて淋しからう。ああ憐れの松よ、孤獨の我友よとの情を盛つて「松は獨に」と一個人間としての友達扱ひに叫んだものである。

此西行の生活に共鳴して山崎宗鑑が出た此は漂泊の連歌師であつた。これ等西行宗鑑の蹤をついで芭蕉が出た。此は俳行脚子の生に大部分を経た。

生きての世には稍出色ある一行脚僧の歌人と云ふ位で聲望遠く定家に比肩すべくもあらぬ様でもあつたらうが、大正の現代に在つては俊成定家よりは寧ろ西行の方が盛に顧られつゝあると云ふのもその主原因はこの自然美に生きた彼の生活記録が三十一文字となつてゐる爲めではあるまいか。

### 地理文學、旅行文學

我邦の地理に關する文學は風土記に端を發して紀行文となり、紀行文又分れて旅それ自身の爲めの旅の記とも謂ふべき漂泊文學となり、更に歌材俳材の詩囊を肥やす爲めの歌行脚俳行脚の文と、渡唐入唐、赴任歸任入湯商事等の所用を兼ねての旅の記と、神社佛閣、皇陵靈地參拜の爲めの巡禮紀行と、處變れば品變る諸國所在の珍見聞に徒然を慰まうと云ふ遊覽紀行と一身の懊惱遣るに術なく暫らく周圍を改むることによつて排悶のたづきを待ようとする近代的な旅行記となり、更に轉化しては諸國名所圖繪、神社佛閣の緣起、名所舊蹟の由來、山村陬僻の口碑



傳説などの靜的な記事ともなつた。(尤も此最後のものは地理文學のみの變形ではなくて傳統を重んずる國民性や、敬神崇佛の古代の風俗や、曰く因縁に勿體をつける中世以來の迷信なども關聯してゐよう)

旅それ自身の旅とは西行・宗祇、芭蕉の旅のやうなもので、就中西行の山家集、芭蕉の奥の細道の如きがその代表である。大自然の懷に息づき、大自然を抱擁する底の「自然に對する韻文的生活」の表白は獨りこの種のものにのみ見られる。歌行脚併行脚は古今を通じてザラに多い。遠くは宗長の紀行から近くは蘆花の「死の蔭に」若山牧水氏の諸歌集に至るまでその數十指の繁に堪へない。其他歸任の紀行には貫之の土佐日記があり入湯の羈旅歌は古今集にもあり、商事の旅の記は近世現代にかけて多く、孝標女の「更科日記」光行の海道記、親行の東關紀行、阿佛尼のうたゝねの記や、十六夜日記、今川貞世の道ゆきぶりや、増鏡中、後鳥羽、後醍醐御二所の隱岐遷行の記などは皆この種に屬する。順禮紀行や遊覽紀行には、飛鳥井雅世の富士紀行や、その他諸家の富士遊覽の記や群書類從紀行部載する處の高倉院嚴島御幸記、後鳥羽院熊野御幸記、鹿苑院嚴島詣記、高野參詣日記以下の諸紀行や近世尾張の菱屋平七の築紫紀行、橋南谿の東遊記、西遊記などがあるし排悶紀行とも謂ふべきは現代作家の作品に見られる韻文散文の凡て——例せば牧水氏の旅の歌や、藤村氏の「春」の主人公「岸本」の旅の記事や漱石氏の「行人」の主人公が須磨や明石や和歌の浦に旅した時の記事のやうなものだ。これ等の旅によつて得た奇聞珍聞は、終に類聚されて見くは歌枕となり近くは菊岡米山の諸國里人談(文化年間の作)となつた。畢竟此等の作品は我國民の「旅行觀」そのもの、推移とも交渉を持つてゐる、その旅行觀は更に亦交通機關の變遷に密接するものだから、文化の開けなかつた上代にあつては、旅舎、驛傳の設備もなく文字通りの「草枕」で

家があれば筈にもる飯を草枕 旅にあれば椎の葉にもる

の歌の如く「旅は愛いもの」となつてゐた。中世になつても大部分は、徒歩の旅行だから能因法師の

都をば霞とともにたちしかど 秋風ぞ吹く白河の關

(此は机上の咏だが)の通り、春さき都を立てば秋頃白河の關につく、まるで半年がけになる。偕ていよ／＼今日は無事に白河の關を越えたからとて、都の人にその由を言傳てやうにも

こえぬとて都につぐるたよりさへ 聞え聞えず白河の關

で、なか／＼思はしい幸便がなかつた。旅の人々は一面には旅の不自由と戦ひ一面には郷愁の戀々に得堪へぬ幾夜毎を過ぎた。第一人氣と云ふものが今のやうに多くなかつたので、ともすれば無人の山野にあてどなき彷徨を續けることもあつたものと見える。早く古事記の中には日本武尊が東夷征伐の途につかれる時伊勢の國の尾張の國境「を」つ」と云ふ所まで御出でになつて俄かに便氣を催されたので、とある粗末な圍で用を足された。その時御佩かせる太刀を傍の松の枝にかけてせられたのをつひ其ま、お忘れになつて東國へ御出發、駿河の燒津が原の奮闘、相摸走水海の難船、「にひばりつくば」と云つた火燒翁との問答、「吾妻はや」の峠の御歎きと數々の征途記録をつくつて再び「を」つへ來られるとまだその刀がかゝつてゐるので、始めてお氣づきになつて、件の松をめてたゝへられ

尾張にたゞに向へるをつの崎なる一つ松 吾兄を一つ松 人にありせば太刀はけましを衣きせましを一つ松 吾兄を

と咏まれた。尊の風流はもとよりだが、半年も一年も松の木に掛けられた刀が誰の眼にも止まらずにそのまゝに残つてゐるなどは全く人氣少く(よしやあつてもだが)生活のノンキな原始氣分を表して面白いではないか。

在原の業平は東下りの際たゞ／＼郷愁を和歌にもらして、八橋のかきつばたや、隅田河の都鳥や、みちのくのあねはの



松もそれが爲めに有名になつた位だ。業平の兄行平が因幡守に任ぜられたのは齋衡年間のことだ。出發の際別離の宴席で立ち別れいなばの山の峰に生ふる まつとしきかば今かへりこむ

とは詠んだが京と因幡は當時の道で下りは八日上りは十二日かゝつたと云ふから「まつとし」聞いても「オイソレ」と直ぐ歸京することは事實不可能であつた。阿佛尼が、鎌倉下りをする時には都へ便りするに好便がなくてわびく歩きつづけて宇都の山まで行つた時一人の上京者に逢つたので、この機をばづしてはとて多くの便を書いたとある。

會我兄弟あたりから殊に眼立つて多くなつたのは、仇の行く方を搜索する爲めに東奔西走する風俗であつた。君父の仇は俱に天を戴かずと云ふのが、彼等の無上命令のやうに權威のある時勢でもあり又、直系一等の尊族を討たれた子弟、臣下の至情でもあらうが、さてその敵の行くへの取りとめのないことは江戸で行く方をくらまして上州の深山に隠れたかと思ふと、やがて信濃路に入つて昨日は木曾の眞坂を越したと云ふ。急いで追つかけて行き着いた頃は、早や伊勢路への抜参り、京や浪華とくらまして、とゞ九州の果てまで辿つて、やうやくありかをつきとめて「江戸の仇を長崎で討つ」ことになるが、それはまだく、上首尾の方で、悪くすると旅に病んだり年老いたり、又は仇に返討されたりして本望も得とけずに亡くなるものも往々にして——、否な得てしてあつたことであらう。仇討は一種向ふ見ずの企業とも謂ふべくこの種の旅ほど心持の限定された旅はなからう。

仇討旅行より稍後れて宮本武藏の時分からは諸國武者修業の旅行がある。型の如く大小を腰に横たへ、質樸な輕装で門戸を張れる名人名士を歴訪して自分が強ければ道場破り、自分が負ければ辭を低うして門人となり、練磨幾日その師と同程度に達する時、禮を述べて又その次と巡々に劍道行脚をするものだが、此は後には仇討の爲めや、祿仕の就職運動の爲めや、自己の武藝をひけらかす小さい野心のためにせられてその旅行も不純なものに化した。

其他の旅人としては徒然草にあぐるところの梵論字、それと幾分普化宗の影響を受けた虚無僧、深編笠黒木綿紋附の浪人、雲天井に土席の渡り物や乞食の種類もあらう。

旅行を以て享樂の一つとしたのは天皇ならば王朝時代已に「温泉行幸、社寺行幸、觀風行幸」などがあるが、公卿士庶人階級としては近世以後のことであらう。それでからに「こすにこされぬ大井川」の川どめに遭つたり「あひの土山雨がふる」ので無益の滯留を餘儀なくしたり、かどわかしゃゆすりや、追剝や、ごまのはひに脅かされたりで眞の享樂的の旅行は現代明治以後のことであらう。昔は「可愛い兒には旅をさせよ」と云つたが、今日では旅は人生苦社會苦の試練としてはあまりに安易なものとなつてしまつた。

**自然文學としての旅文學** 所が上述各項の凡てが自然に關係のある譯ではない。諸國の人情風俗に見聞をこやさうとするものや、自家の職業の爲めにする旅の記などは人事が主になつて自然の分子は唯移り行く地名や山川名やその日その日の天氣位なものだ。十返舎一九の膝栗毛や、橘南谿の東西二遊記などは、どうも自然美を觀賞すると云つた趣には缺けてゐる。

自然文學としての旅の文學としては、前に西行あり後に芭蕉ありで此二人以外餘りとりたてる程のものはない。けれどもその中國文學を特徴づけるものとしては「道行文」がある。廣い意味では道途の叙景は凡べて道行文と云つて然るべきだが、我邦で通常「道行文」と云ふのは秀句や縁語を取容れて流麗な句に仕立てた軍記物や謡曲戯曲の道中記を云ひ、尙一層狭く限定して戯曲のみの道行——否な戀の男女のみの道行を指すことにもなつてゐる。



道行文の三種

一、廣義のもの

廣い意味で云ふ道行文（此は通名ではない、余が假にこの目を立てたものと承知せられたい）は早くからある。即ち土佐日記の

かくて宇多の松原を行すぐ。その松の數いくそばく、いくちとせへたりと知らず。もどごとに波打よせ枝ごとに鶴ぞとび通ふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人のよめる歌。

み渡せば松のうれ毎にすむ鶴は 千世のどちとぞ思へらなる

とや。この歌は所を見るにえまさらず。

と様の記事がそれで、同種のを列べると、

増基法師のいほぬし（八幡泊りの處）

その夜月面白うて、松の梢に風涼しくて、虫の聲もしのびやかに、鹿の音はるかに聞ゆ。つねの住家ならぬ心ちも、よのふけ行くにあはれなり。ゆにかゝれば、神もすみ給ふなめりと思ひて

こゝにしもわきて出ける石清水 神の心をくみて知ばや

土御門内大臣通親公の高倉院嚴島御幸記

廿一日（治承四年三月） 夜をこめて出させ給。都をいでさせたまふより、かむたちべ殿上人みなじやうえをぞきたる。をとに聞きし和田のみさき、須磨の浦などいふ所々、うらづたひはるく荒き磯べをこぎゆく舟は、帆うちひきて波のうへに走りあひたり、福原の入道はからの舟にてぞうみよりまいらる。播磨の國までこえけるにや。いたみのなごきこゆるにぞ、哀れにぞおほゆる。御こし近く候ひて、ところくとはせたまふ。八瀬とうしをぞさすのめして、御こしつかうまつる。播磨の國山田といふ所にひるの御まうけあり。心こ

とにつくりたり。

源光行の海道記

山重りて又かさなりぬ。河へだりて又へだりぬ。ひとり舊里を別而、遙に新路におもむく。知すいづれの日か古郷にかへらん。影をならべゆく道づればあまたあれど、心ざしは必しも同じからねば、心に准する氣色は友をそむきて似たれども、折にふるゝ物のあはれは、心なき身にもさすがに覺えて、屈原が澤に呻ひて、漁夫が嘲を耻、楊岐が路になきて騒人のうらみをいだきけんも身のたとへにもあらねども、逆旅にして友なきあはれには、なにとなく心ほそく、空におもひしられて、

露の身をおくべき山の影やなき やすき草葉も風吹つゝ。

前河内守源親行の東關紀行

曙の空になりて、せたの長橋うち渡すほどに、湖はるかにあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にて此海を望みつゝよめりけん歌おもひ出られて、漕行舟のあとのしら波、誠にはかなく心ほそし。

世中を漕行舟によそへつゝ、ながめし跡を又ぞながむる。

阿佛尼のうたたねの日記

なるみのうらのしほひ鴻、音にきゝけるよりも面白く、濱千鳥むらゝにとび渡りて、海士のしわざに年舊りにける鹽がまどもの、おもひくゝにゆがみたてる姿どもみなれず珍らしきこゝちするにも、思ふことなくて都のともうちぐしたる身ならましかばと、人しれぬ心のうちの様々くるしくて

これやさはいかになるみの浦なれば 思ふ方には遠ざかる覽。



同十六夜日記

あしがら山はみちとをしとて、はこねぢにかゝるなりけり。  
ゆかしさよそなたの雲をそばだて、よそになしぬる足柄の山  
いとさかしき山を、くだる人のあしもとどまりがたし。ゆさかとぞいふなる。からうじてこえはてたれば、又  
ふもとにはや川といふ川あり。まことにはやし、木のおほくながるゝをいかにと、とへば、あまのもしほ木を  
うらへいださむとてながすなりといふ。  
東路のゆさかを越てみわたせば、しほ木流るゝはや川の水。  
宗久の都のつと

鏡山をすぐるとても、すみ染にあらたむるわがおもかけもはかりある心地して、いざたちよりてともおほ  
え侍らず。

立よりてみつと語るな鏡山 名を世にとめむ影もうければ

さてあづまぢのたびの日かすもやうくつもりゆけば名高きところぐ、ふはの關、なるみ潟、たかし山、二  
むら山など過て、さやの中山にもなりぬ。かの西行がまたこゆべしとおもひきやとよめるもあはれにおもひあ  
はせられぬ。

この種の文では、平家の小原御幸や増鏡の承久元弘兩役に於ける天皇上皇の御遷幸の道途の叙景にすぐれたものが多  
いが、ありふれたものだから省いておく。

二、狭義のもの は軍記と謡曲とにあるもので、「音調の美」があつて朗讀吟誦にはよろしいが、文學としての情味は  
劣つてゐる。

太平記卷五 大塔宮熊野落

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫をたへ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺  
渺と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上を外に見て、月に登ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦  
の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ切目の王子に着  
き給ふ。

太平記其他の佳章としては卷二の俊基朝臣の關東再下向の記事、卷四の先帝遷幸の播磨路の記事、卷二十七の上杉重能  
畠山直宗越前へ流された時の記事などがある。

謡曲の道行は能の要求や謡の節の拘束もある爲めに、あまり長いものは少く唯體裁のよい繋ぎに結んだ「しで紐」か  
「くゝ繩」のやうな味があるだけだ。

四の宮や、河原の宮居末はやき、名も走井の水の月、くもらぬ御代に逢坂の、關の宮居を伏し拜み、山越ちか  
き志賀の里、鳩の浦にも着きにけり。(竹生島)

旅衣、末はるぐの都路を、けふ思ひ立つ浦の波の、舟路のどけき春風も、いく日來ぬらん跡末も、いざ白  
雲のはるぐと、さしも思ひし播磨がた、高砂の浦に着きにけり。(高砂)

ならのはの、名におふ宮の古ことを、思ひつゝけて行末は、石上寺ふしをがみ、法のしるしや三輪の杉、山本ゆ  
けば程もなく、初瀬河にも着きにけり。(玉葛)



思ひ立つ、空に重る雲の袖、靡きて歸る雁金も、山又山を越え過ぎて、行けば程なき旅衣、木曾の御坂も  
 近づくや、嵐に更くる夜半の空、寢覺の床は是かとよ。(寢覺 古名、寢覺床)  
 其他、難波、八島、藤戸、熊野、遊行柳、飛雲、求塚、殺生石、須磨源氏、隅田河等の始めには略々同じ位の長さの道  
 行がついてゐる。

三、最狭義の道行文と情景融合の文 道行文の範圍を極めて狭く限つたものは戯曲に於ける戀の男女の道行で、殊に心中物に多い。この種のもは主人公の心情と、主人公を取りまく四圍の自然とを綯ひ交ぜに、情につれて景搖き、景と共に情湧くと云つた趣があつて短言すれば情景融合の妙趣があるので自然觀照としても勝れてゐるし、叙情文學としても價值が多い。

一體情景融合と云ふことは、あらゆる美感の根底を爲すもので、早くリップスの唱へた感情移入説も、つゞまるとこの範圍と共通すべきものだと思ふ。我々が笑まはしい氣持で道を行くと路傍には草が咲いてゐた。スルとその草は見るから笑まはしさうに美しい。けれども事實笑まはしいのは自分の主觀であつて客觀の花ではないのである。けれどもこの場合花そのものが笑まはしくしてゐるとしかとれないそこで「花笑ひ」と云ふ。又吾々は春陽駘蕩の氣に洶然たる折柄野邊になく雲雀の聲をきいたとすれば、その聲は如何にも樂しげに響く。まるで唱歌でも歌つてゐるやうに聞えるが、事實雲雀はその本能のまに／＼叫んでゐるだけで或特種のメロディを歌ひ出さうとは意識してゐない。けれども此場合鳥そのものが歌つてゐるとしかとれない。そこで「鳥歌ふ」と云ふ。で、「花笑ひ鳥歌ふ」と云ふ感はかうした主觀から客觀を眺めて起きた主觀の感じを又客觀に投出することによつて成立するもので之をリップスは感情移入と云つてゐる。

る。すればこの點に於ては感情移入なるものは吾々が從來云ひ來つてゐる情景融合と變りはないと思ふ。

俗に「思ひなし」と云ふ語がある。自分の嬉しい時には見るもの聞くものが嬉しげに見える代りに、自分の腹立たしい時にはそよ吹く風さへ癩にさはる。そこで棒に當り杵に當り犬に當り猫に當る。怒つた時の八つ當りと云ふのがそれだ。これ等はホフディング氏の「Outline of Psychology」始め多くの心理學書では「感情の膨脹性」と云ふ語で表はされる。而も情景融合の場合に於ては、單なる膨脹性だけでは説明し切れない比較的連續的なものがある。

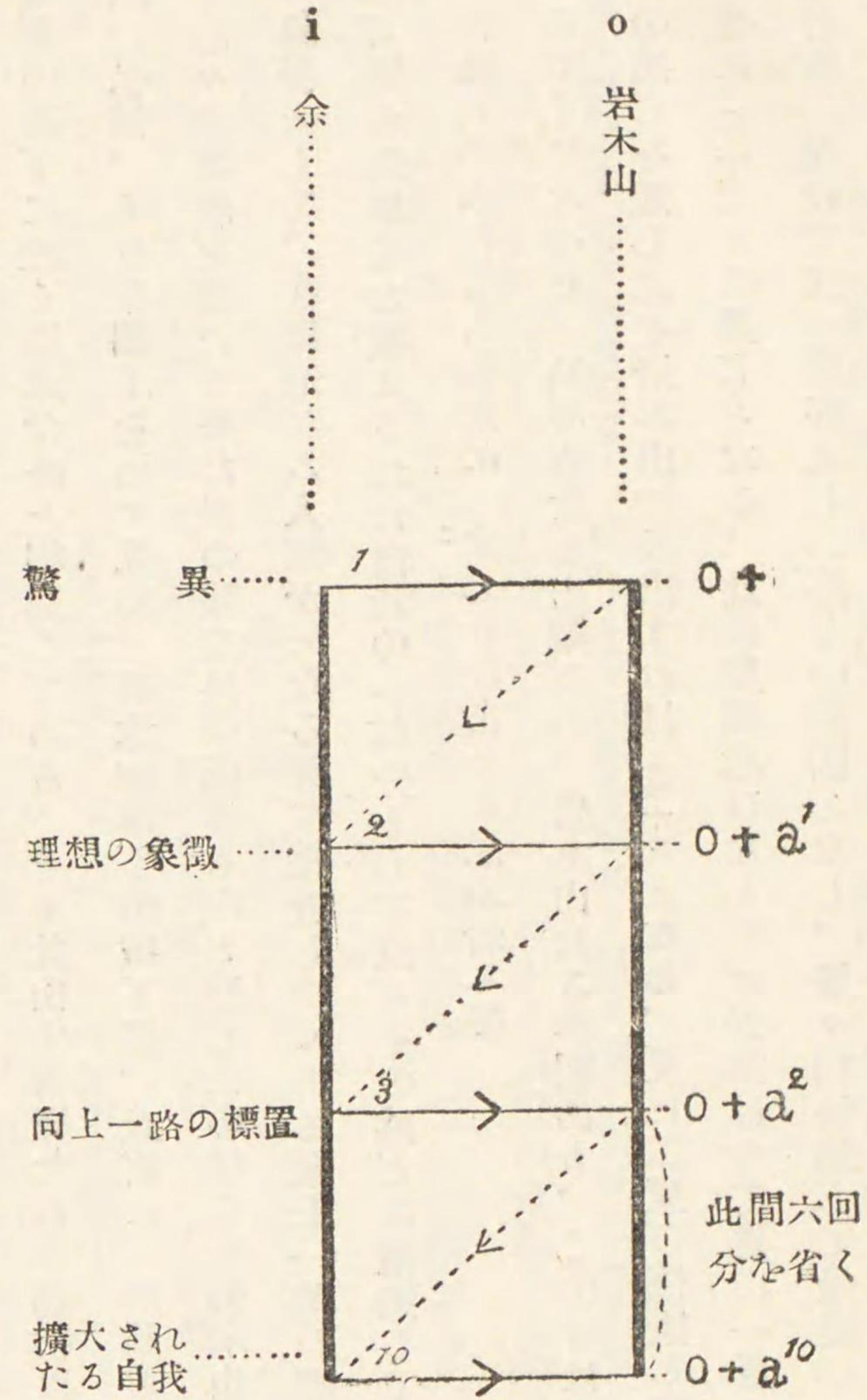
今余は書齋の窓下に近く岩木が峰と相對してゐる。そも此山の秀嶺たるや劫初以來終始斯の如きものであつたらう。林檎に名高い弘前、あけび細工を出す弘前、舊津輕藩下の城下町、武官に一戸將軍を出し、文官に本多庸一氏を出した鷹揚城街と色々の豫想を描いて來た余の豫想外の儲けものと感じたのはこの岩木山であつた。始めは大なる驚異として次は理想の象徴として、次は地なる人類が天なる神に接近しつゝある向上一路の標置として、果ては弘前生活をする上には必要不可欠の對象否な擴大された自我の一部分として段々その感じは襯熟して來た

汝を一目見しのみにて弘前に 來しかひありと思ふ岩木嶺

とも述懐するやうになつた。始め我なる主觀あり、岩木山なる客觀あり、この時は單なるIとOとである。次に一度び驚異してaの感じを起し之を岩木山に投出すればOとなる、更に二度び憧憬してa三度び四度び數多たび愛好の念を起して最後にOとなる。此は所謂思ひなしのaが加はつて更に一層より好ましいものを見せてaの感を起し、之を客觀に投けて又一層好ましい感じの誘因となし、層々相倍加して最後にaの満點に對するのである。自然美觀賞眼の鈍いもの、若くは普通人の自然美に對する場合は大抵この形式である。「景につれて情動き、情によつて景致成る」とは這般の趣を云つたもので、「感情の膨脹性」よりは永續性があるやうに思ふ。唯少數の天才だけは能く一回の



接觸で  $0 \rightarrow 0$  の心境に到達する。西行がさうであり、芭蕉がさうであり、古今東西の叙景詩人は皆さうした素質の人である。此を圖示すれば左の形式となる。



道理は大體こんなものだが、さて、我國文學に於ける情景融合の表現は道行文に始まるかと云ふに必らずしもさうではない。

佐保山の杵の紅葉ちりぬべみ 夜さへ見よと照らす月影

これは古今集に「讀人知らず」とあるが、歌の格調なり取材から推して奈良朝の末か王朝の始め頃の歌人の咏と看るが妥當であらう。

佐保山のは、その紅葉がもう散つてしまひさうになつたもんだから晝間だけでは飽きたらないから夜までも見よと

あの月は照つてゐる

と云ふのである。春の女神を佐保姫とし秋のそれを龍田姫と想像した寧樂人は、その春神のみす佐保山をどんなにめでたことであらう。杵は潤葉樹でもみぢした絶頂でも唯黄葉するだけだが、あれが櫛や楓や櫻の紅葉と入りまじつてなぞへに躑躅せる佐保山の晩秋は黄纈纈の形容語をつくりであつたらう。而かも落葉期瞬時でその面白い光景は、一夜見はぐれたら更に三季の空しい待遠しさを堪へねばならぬ。詩人の佐保山の黄葉に對する愛着は、暮れむつ告ぐる東大寺の梵鐘と共に愈々切なる折柄、まさやかに照りそめた月、あゝ月——、月——、李白春の夜桃李の園に宴するの序に曰く夫れ天地は萬物の逆旅にして光陰は百代の過客なり而して浮世は夢の如し、古人燭をとつて夜遊ぶ云々。

と。今や月光の天燭自然に黄葉を照らす、觀光の幸これに若くものなしとの意で、天上無心の月に對して、黄葉愛着の詩人の情緒を投出し、その爲めに「夜さへ見よと照らす」が如くに感じたものである。

世をすてて谷底にすむ人見よと みねの木のまをいづる月影 西行法師

解釋は省く。詞書に「ある人世をのがれてこもりるたりと聞きて尋ねまかりたりけるに、月あかりければ」とある。此も西行の感じを月に投出したものである。

右二首によつてもわかる通り情景融合は決して新しいものではなく、苟くも觀照的態度を以て外物に向ふものは程度の差こそあれ多少はこの作用を生活するのである。けれども、その味ひと表現とをもつと高度に發達せしめたものは、矢張戯曲の道行文であらう。



此世の名残夜も名残 死に行く身を譬ふれば 仇が原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ。あれ数ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて残る一ツが今生の、鐘の響の聞納め、寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名残と瞰上ぐれば、雲心なき水の音、北斗は冴て影映る、星の妹脊の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも、我と和女は夫婦星、必ず添ふと縋寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩も増るべし。

花の梅田の曉に、手に手を取つて死出の旅、男二十五厄の年、女も十九共厄で、主人への義理、世間の手前、九平次への面當てと、二重三重なす桎梏に思案餘つて相對死の門出、老近松が傑作お初徳兵衛道行の「血死期の霜」の名文の一節である。

此世の名残夜も名残——花の蕾を撈つて捨てるやうな二人の死は、老境靜に末期を待ちつゝある人々と對照してあまりに酷い不幸である。死に當面せない吾々は今二人の心中を如實に解することは出来ない。あらゆる犠牲を戀ゆるに捧げてせめてもの思ひ遣りに「死の勝利」を夢想する二個の可憐な影と影とが北大阪の郊外の夜あけを浮動するさまは悲痛哀痛の極と謂ふべきであらう。昔定家は

あけばまた秋の半ばも過ぎぬべし 傾く月の惜しきのみかは

と詠んだ。秋の半ばの暮れるにすら定家の秋思はこれ程であつたことを想へば我世の暮れを惜しむの情は如何ばかりであつたらう。而かも今宵一夜と限つた二人夜のあけることは即ち二人が死んで行くことである。「あけゆく夜の名残のみかは我等二人がこの世も名残」と冒頭まづ叫ぶ血涙の聲である。

死に行く身を譬ふれば、仇が原の道の霜一足づゝに消えて行く。

仇が原又鳥邊山とも云ふ。洛東東山のかたほとり、無常の風はいつも吹き荒んで、こゝに多くの貴賤男女を茶毘にする。王朝の古、桓武天皇の遷都以來、幾その慟哭を耳にし幾その血涙を吸収したのはこの仇が原の土であらう。即ち死出に旅立つ二人が身の上の譬喩として聯想は極めて自然である。而も今は曉がたである處から、朝霜の歩々跡方をけす儚なさに思ひよつたものである。斯うして二人が足跡は丁度二人が挽歌の音符のやうな趣があつたとも思はれる。

夢の夢こそ哀なれ——、浮世は夢とはこれ迄度々耳にもした。自分も口にもした。けれども二人が戀はあまりにも淡い儚い夢であつた、劇中劇よりも以上、夢中夢と云ふべきであつた。そもく二人が相知るに至つたのは何時からのことか、又二人が嘗めた歡樂の蜜はどんなものであつたか、それはこの作には表れてゐない。けれども上の齣で、生玉の出茶屋で逢つた頃は流石に楽しい様も見えてゐる。

浮名を餘所に漏さじと、包む心の内本町、焦るゝ胸の平野屋に、春を重ねし雛男、一ツなる口桃の酒、柳の髪もとくくと、呼ばれて粹の名取川、今は手代と埋木の牛醬酒の袖したゝるき戀の奴に荷はせて、得意を廻り生玉の、社にこそは着きにけり。見れば二人が兼ての手筈、イソくとしてかけつけて「徳さんかいな」と縋りつく、今日道頓堀の五座のせり上にも浮いて出さうな浪華女の戀知り譯知り「町一番のほつとり者」と云はれた天満屋の名妓お初……此方様それでも濟もぞいの、妾は病ひになるはいの、嘘なら是れ此瘡を見さんせと手を取て懐の、打うらみたる口説泣、ほんに夫婦に變らじなかうした苦しい中にも楽しい戀の一場面もあつた。

忍ぶ逢瀬に人目の關を、つひ彌福に男を隠し、足と手先の問ひ語り、こゝまで以心傳心の戀中ぞと思へば、唯はかない悲しいの一筋ではなかつたらう。加ふるにその地は當時名たゝる狭斜



戀風の、身に蜺川流れては、其空背貝現なき、色の闇路を照らせとて、夜毎に燈す燈火は、四季の螢よ雨夜の星か、夏も花見る梅田橋、旅の鄙人地の思ひ人、心々の譚の道、知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑はしき北の新地の色街である。あ、歡樂の夢は、春宵一刻と消えて、今や悲哀のどん底に落ちて行く相思の二人、夢に夢見る心地して、森に消え行く道中姿、戀は無常と今更のごと世の哀愁は、こゝにその焦點を示現する。

あれ數ふれば曉の……寂滅爲樂と響くなり。

情景融合の第一節である。曉つぐる鐘の音も、花見、約ある遊山の町人には、歡喜の序幕を宣るとも響かう。老いて讀經と念佛とに安立せる樂隱居の耳には無上法悅の樂とも響かう。そは思ひなしによるもので、飽きも飽かれもせぬ二人が、生の興味を餘儀なく捨て、「せめては死ぬる時と場所との一致のみに思ひを慰めよう」と云ふ今の身には、何の法悦ぞ、何の歡喜ぞ、あの世からなる矢の催促に「死ねく早く」の餘韻が嫺々として四つの耳朶を襲ふ。自らさばいて自ら宣告を下した戀に恵まれたるが故に社會に呪はれたる死刑囚は、今曉の鐘の音を、生死の距離に刻つくる目標の如くに思ひ入るのである。(余は嘗てこの筆致をまねて、木村重成の出陣を脚色して

アレ寅の刻、丑の刻、この刻々が我脊の君の命を刻む双の音かや

としたことがある。創作と模擬との高下の對照にもならう)

鐘ばかりかは草も木も空も名残と見上ぐれば——「今日も東から日が出て西に入つたと云ふことが、どうして明日も同様だと云ふ前提にならう」と哲人は云ふ。けれども我々凡俗の徒は劫初以來の自然の慣習を楯に未來永劫恐らくは同様なるべしとの無意識的安堵によつて、眼前特個の境遇に處ない以上は安易平凡に日を送り月を迎へする。此場合、我等に何の感激があらう。我家を出る「又無事に歸るもの」と高を括つて出る。路傍の一草一木を見る。「又返りにも見得

るもの」と無意識に安心して通る。けれども今日を限りの心中の男女はさうでない。家を出るにも「あゝこの敷居を跨げるのもこれが最期」との思入がある。路傍の一草一木を見ても「あゝこれも此場が見おさめか」と咏歎する「鐘ばかりかは草も木も」は、この臨終の故意の感激を表したものだ。就中吾人は思ひ餘つては「時々彼の蒼を仰ぐ」との句の如く、天を仰いで大息する。かくして「空も名残と」瞰上ける二人は、今千行萬行の紅涙にもまさる無線悲痛の文字を虚空に書いてゐるのである。そして草を見ても木を見ても、心持ちうなだれて見える。悄然たる趣に映る。まして涙眼朦朧の眼に見上ける空は、暗愁そのもの、やうそれを見て悲しみは又一段と深刻になる。

雲心なき水の音——と、この時行く雲は又その悲しみの色に流れて見れば前と同じ情趣をつくる。然るに今の雲は心なな雲である。二人が悲しみとは没交渉にたなびいてゐる。梅田の河の水音も、又我れ關せず焉と流れてゐる。そしてこのことが又二人の悲しみを一層深める。

いたづらに日くれ月くれ年くれぬ このかなしみにか、はりもなく (拙詠)

冷々たる天地悶々たる人の兒、相比照し來つて、浮世の悲しみは只この二人に迫るかとはかり

北斗は芽えて影映る——、梅田の流れ水澄みて北斗の影もげざやかにアレは牽牛かコレは織女が、人は自然の裡に自己を見る。曾我物語の中に十郎五郎の兄弟の幼時實父横死後、母が再嫁の祐信の家に養はれてゐる頃、一年の秋、空飛ぶ雁を打咏の

「アレ見よ五郎、物言はぬ禽すらも父母兄弟は列を放れず飛ぶなるぞ、五つ連れたる雁の二羽は父鳥母鳥にて残る三羽は兄弟の雁がねにてぞあるらむ。我等も兄弟三人あり母も無事にてましますに、唯父上のみのるまさぬが遺憾の極みなる云々」



と泣く哀れな一齣がある。唐の玄宗皇帝が馬嵬原頭寵愛の楊貴妃を亡きものにせられて以後の情をば詩人白樂天は長恨歌に

聖主朝々暮々情 行宮看月傷心色 夜雨聽鈴斷腸聲

と云つた。源氏物語桐壺の帝が最愛の更衣に訣れられて以後の御思ひは、又その古を追うて、あけくれ長恨歌の句を枕言にせられたとある。戀に生きる二人は又その思ひを以て星を見れば甲は彥星の如く乙は織女の如くに映る。そこで

星の妹脊の天の川

となる。天上の銀漢地上の梅田、天上の兩星地上の双影相似を求めて、二人が愛も亦斯の如しと云ふ。涙の海に一沫うたかたのやうに浮ぶ戀の甘酒を飲みほすその心持であらう。

梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも、我と和女は夫婦星。

聞く七月七日の夜、銀漢に横たはつて鵲一羽、翼を伸べて二星相逢ふ橋渡しをすると、今この一架の梅田の橋を二人が戀の鵲の渡せる橋と契りつゝ、それをあの世の唯一の光明として致死期を急ぐと云ふ宛然又物の先の密に唇を觸れるやうの趣である。

必ず添ふと縋り寄り。

抑々心中の男女が終焉の希望は唯一つ未來に於ける一蓮托生あるのみ。別けても老近松の心中の男女は悉くその最後の安心立命觀として「この世の縁はうすくとも、永き未來は極樂淨土の一つ蓮の上に往生しよう」と云ふに歸着してゐる。この佛教的來世觀がなかつた程なら彼等は到底「最愛の配偶を最酷の刃物で殺す」やうの悲劇を演じ得なかつたであらう。そこで

二人が中に降る涙

は、そも何の涙か。男の方には叔父であり且つ親方でありする所の平野屋久右衛門に對する恩愛の涙でもあらう。戀仇九平次に對する悔し涙でもあらう。女の方では天満屋に對する不義理や朋輩の思はくに對する氣慨や否もつと強く里の實父母に對する名残の情から醸された涙も多からう。又兩人共に社會の慣習に對する叛逆の氣分に湧いた涙もあつたらう。けれどもイザと云ふこの間際さう一々理由づけた涙腺のあらう筈はない滿感胸を壓してそこに理由なく分解なしにハラ／＼と流るべき涙の貯水池が、今一度び來世の戀の勝利の悦喜に水口を切られて後は涙のみが生命ある徽號かのやうにはふり落ちたのであらう。

河の水嵩も増るべし。

は「白髮三千丈」式の詩的誇大法だが、この場合の景物でもあり縁語にも適ひ、痛ましくも美しい青春男女一對の愛をいやが上にも高潮した藝術的眞實の詞だ。

つまりこの道行に於ての主觀は「最期、寂滅爲樂、あらゆるもの皆見おさめ聞きおさめ、二世の契り、悲痛の涙」と云ふ風のもので、客觀は「曉の鐘、草、木、空、雲、水音、北斗星、天の川、梅田川、梅田橋」などで此二つが緊密に縋ひまぜてある點に妙處があつて、それが讀む脚本としても詩的效果を高め、操り劇に演じて舞臺的效果を高めた所以と觀ることが出來よう。

老近松が道行文は大抵この種の妙味がある。今尙二三の例をあけると、

心中宵庚申 (半兵衛、お千代)

(姑がきつい爲めの若夫婦の心中)

最狭義の道行文と情景融合の文



情するどに人絶えて、物しんくたる寺町を、死に行く身も暫らくは、爰生玉の馬場先に、法界無縁の勸進所、無明能化の門前に、念佛を便り辿り寄る。

心中天網島 (紙治、小春)

野田の入江の水煙、山の端白くほのくくと、あれ寺々の鐘の聲、こうこうしていつまでか、とてもながら果てぬ身を、最後急がんこなたへと、手に百八の玉の緒を、涙の玉のくりまぜて、南無網島の大長寺、藪の外面のいさゝ川、流れ漲る樋の上を、最後所とつきにける。

鎗の權三重帷衣 (權三、おさる)

(間男の冤罪を解くに由なくして己むなく出奔した道行)

言はんとすれば目もくれて、胸に八色の雲とつる、故郷離れて別れ行く、月に誰寝て見よとてや、伏見とは船に寄せたる里の名の、橋の夕暮きて見れば、すゞしくの文字かたどりて、京を持たる京橋に、一つ流の御襖川、未ふく風も袂すゞしき、權三おさるは三日とも、同じ所に足とめて、居るに居られぬ梓弓、伏見に暫時すみ染の、秋の櫻が入相も、明日をば知らぬ一日の、命々と聞すと、難波の方に思ひ立ち、人目を忍ぶ乗合に、空居睡の船こけば、傍に茶船を漕ぎつれて、うどんそば切りくくくとおしまはし、豆腐奈良茶と茶を賣るも、宇治の川水落そひて、昔を胸に涙ぐむ、女ご、ろぞあはれなる。

以上は専ら老近松のものばかりをあけたが、爾餘の戯曲作家の道行文も大抵同巧異曲、唯舞臺劇がして動作を演じるには都合よく整へられたらうが、文學として讀んでの感じは、少々纖巧に失し「何々盡し」の縁語に食傷したやうなものが多い。左に三つ引例して、この項を閉ぢる。

近松半二(小近松とも謂ふ) 京羽二重娘氣質

第八道行戀の小夜風 (半七、お花)

泣くく、辿り行く先は、新地く、の掛行燈、綿屋播磨屋、橋屋、私が故郷の丹波屋も、今は井筒の清水より、深い二人がみなと染、しんぞ戀中紫の、末で扇の二ツ紋、頓と一から十文字屋、斯は違ひし身の菱屋、眞に壺屋と思ひます。今日や嫁入の若松に、忍びのこし迄かぎ提けて、間吉田屋の圓かれと、願金屋の效有ば、假令東の美濃伊勢路、鄙の宿にも伏見屋の、船に積れぬ思の数は、富士の白妙比良の雪、妹脊の鳥や耳語を、人も聞くやとたつは音、互に負うつ負はるゝも、戀の界の茨垣、身は津の國のよしあしも、讀盡されぬ憂さなれや。

竹田出雲 男作五雁金 (文七、清川)

道行夢の通ひ路

ぬる間のみ、夢とは誰かなづけ初、昨日の逢瀬夢なるか、夢現とも辨へず、涙に絞る袖袂、落て流れて清川が深いと人に云はれたる文七を初とし、五つ連たる雁金の、止らぬ枝の梟と、たとへられたる獄門の、木に曝さるゝと夕鳥、鳴くく、廓を忍び出、みれば今宵も早や四ツ橋を、一ツ渡りて又渡る、是は浮世を渡す橋、我は浮身の端女郎、火車が叱らう禿が尋う、ア、儘にして炭屋町。

近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛合作 關取千兩幟

第八 道行闇路の町續 (禮三郎、錦、但し二人は心中の間際に戀敵團右衛門九平太惡事露顯によつて救はれる)

手を取かはし行先は、あの世此世の堺筋、あゆめど道も抄らぬ、跡には親の枯れ残る、老木の老の逆様に、順



慶町も空ごとや、わしとお前が憂き事の、あだな契りを米屋町、本町筋の軒深く、思ひ初たる中なれば、煙ともせず諸共に、埋まばなどか安土町、男も同じ二世三世、生れかわりて又爰へ、親の便を備後町、永き未來を瓦町、斯くなり果つる吾々は、いつの因果を身に受けて、共に憂目に淡路町、悔むは愚痴と平野町、と思へ共棄つる身を、とがめてほゆる犬の聲、道修町筋、過ぎ行けば、早や眞夜半の月代の、空恐ろしく行き惱む、しばしは愛に伏見町、高麗橋の果て迄も、共にぞ連れん去ながら「所詮此身は人殺し、一所に死すれば親々へ、不孝の罪も恐ろし、和女は生きて亡き跡を、頼むとばかり曇り聲。

俳句の描寫する自然美

和歌は西行以後と雖も叙景のめでたいものは澤山あるけれども、自然觀そのものを根柢的に改めるとか更に深みに突込んで味到するとか云ふ風は少い。それに比べると俳句が寫す自然には一段の飛躍があるし又俳句ほど自然と密接な詩も少なからう。同じ詞形の川柳が人事を旨と寫すに對して、俳句は自然を主材とし自然に即して想を構へる。人事をよむ時にすら自然を假りて寫す。

去年まで叱つた瓜を手向かな

腕白盛りの愛子は去年の秋か冬かそれとも今年の春に病氣で死んだ。夏になつて瓜が生るとは、そこへ行つて捻つたりつねつたり、かぶつたりするので、その都度叱つたものだが、今年もその瓜が、アレあの様に大きくなつた、あの兒が居れば今頃は又例のいたづらをする處だが、天無情、今や一片佛間の位牌となつて「喰へ」と手向けても手に觸れることすら出来ぬことになつたとの意で、全く哀傷の人事詩だが、之を

いたづらを叱つた子供今はなし

死んだ孫何かにつけて思ひ出す。

などと自然抜きにしては句にならぬ。

誰かろか知らねど柿の初ちぎり 千代女

彼女が新婚の述懐で「夫の氣心はどんなか、結婚生活家庭生活がどんなか、何も知らぬおほこ娘の自分が幾分の不安と多分の希望とを持つて新たに人妻と呼ばれませう」との心だが、詞面は全部自然物である。

兩袖に唯何となく時雨かな 惟然坊

俳狂惟然坊が諸國行脚の道すがら、尾張の國で、自分の娘の某富豪に嫁いでゐるのに、途であつたが、そしらぬ顔で行き過ぎようとするのを娘が後から袖を控へて、一別以來の久潤を語らうとするにつけても、先立つものは唯涙、それをケロリと惟然坊が句にしたもので、詞の上では自然の景物ばかりである。

(尤も俳句はいつの場合でもかうだとは限らないで

油さしくくつ、待つ夜かな 上島鬼貫

で「待つ戀」を表し、少しも自然物をかりてゐないものもあるが、大部分は右にあけたやうなのである)

今俳句が自然美と交渉する着想、表現の技巧、季題に就いて左に大要を述べよう。

一、動的描寫

時雨けり走り入りけり晴れにけり 惟然坊

時雨がザーツとやつて来た、こりやたまらぬとあたり近い軒端にかけつける。かけるや否や早や晴れた。と云ふ場合で

俳句の描寫する自然美 一、動的描寫



短歌と比べてすと短小な十七字詩形では

時雨をばさけんととある軒もとに かけよる間なく早や晴れにけり

と様に間の延びたことは云つてゐられない。そこで三つの「けり」の助動詞を重ねて、詞以外の音調の上からその三動作の推移を髣髴したものである。

とりおとしとりおとしたるなまこかな

これは始め

板の間に下女はなまこをとりおとし

とあつたのを某宗匠が見て「板の間、下女、なまこ、あまり道具立が多くてごてく／＼してゐる」と云つて直したものと云ふ。如何にも海鼠そのものを表すとしては、あのヌラクラとして粘液質の息子が風でも引いたやうな不得要領な姿態は、一寸運ばうとするとツルリと迂る、又とりあける、又ツルリと云つた様子が「とりおとし／＼たる」の反復法でよく活寫されてある。

米洗ふ前を。螢の二つ三つ

これは始め

米洗ふ前に。螢の二つ三つ

とあつたのを宗匠が「を」を「に」に改めたものである。「前に」とすれば、その螢は静止した螢でもよし光らない螢でもよし、晝見た螢でもよし、晝見た死んだ螢でもよしとなるが「を」とすると、その螢は飛んでゐる。光つてゐる。時は是非とも夜である。死んで地上に横たはつて居てはならない。たつた一語のてにはで動く螢を動かして寫すには「を」

でなくてはならない。

この種のものに特に詳述したいのは芭蕉の

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

と云ふ名吟である。翁が第三期正風開眼の句と謂はれてゐるが、作られた俳境については確説はない。多分は天和三年彼が三十八歳の秋の作句であらうと云ふことになつてゐる。始め彼の東日記には

枯枝に鳥のとまりたるかな秋の暮

としたのを後に「曠野」を出す時前の詩形に改めた。

この句に對する神祕的とよりは寧ろ迷信的な附會説としては次のやうなのがある。

一、翁少ニシテ談林ノ中ニ交遊ス。一日忽チ此句ヲ唱フ。衆愕然トシテ上座ニ延ブ。幾バクモナクシテ一派ヲ唱フ。

二、芭蕉の和歌をもととして正風を立てたるは、

あのかたら三藐三菩提の佛たち 我がたつ袖に冥加あらせ給へ 傳教大師

絲によるものならなくに別れ路の 心ほそくもおもはゆるかな

此二首によりて正風體を工夫ありて

枯枝に鳥のとまりけり秋のくれ

正風體の始めの句なり。翁和歌をもととして正風を立てられしこと此にて知るべし。

(佐々博士は正風はあの謙虚な翁自身の命名ではなからう。翁が蕉風と云つたのを門弟のさがしらで正風と變へたのだらうと云はれてゐる。)



思ふに在來の俳句と稱するもの、守武宗鑑の古風に非れば完因一派の檀林風に限られた観があつたのを藝道に精進せる彼の翁としてはそれに飽き足らぬものがあつて、何とかして古風でもなく、檀林風でもない俳句界の第三帝國を建設しようとの意圖が燃えてゐたものだが、まだ本當に自分の眞趣味眞俳味に恰好な對象が見つからなかつた。會々秋の暮に於ける枯木寒鴉の好配合を得て兼ねて醗釀せる俳想が忽として這乎の形によつて表れたものと解するが穩やかであらう。三絃には俗に「つほ」と云ふところがあつてそこを押へなければ幾ら弾いても美しい音色は出ない。ヴァイオリンにも四絃の調節以外各絃の旋律を爲すために押へる箇處は定つてゐて、それ以外の處を押へて弓をひくと鳴るは鳴つても不愉快な音しか出ない。翁が「枯れ枝」の句は三絃のつほを押へたりヴァイオリンの旋律が構成されるやうな俳境の下に出來たものと想はれる。

ではこの句の妙處は佛典謂ふ處の「枯木寒鴉」に暗示せられた處にあるか。傳記によると彼は天和年間臨濟宗の佛頂和尚に參禪して居るし、俳味と禪味との奥底一脈の相似を想へば一寸面白い解釋のやうにもあるが、今日普通の國文學觀では否定されてある。

然らば前の古池の句のやうに配合の美も一特徴を爲せるかと云ふに、これは略々古池の句と同程度に於て然りと答ふることが出來よう。「枯枝」鳥「秋の暮」の三つの中一つをかへて

竹やぶに 鳥のとまりけり 秋の暮  
 枯枝に 雀のとまりけり 秋の暮  
 枯枝に 鳥のとまりけり 春の暮  
 梅が枝に 目白のとまりけり 夏の暮

などしては誰しもその不調和に心づくであらう。けれども唯それだけの美ならば他の繪畫や建築や彫刻のやうな空間藝術、造形藝術でも表現される美である。

そこで思ふに時間藝術たる文學の一種たる俳句のその秀吟の一たるこの句は、それ以上自然の動的描寫に力點をおいたものと見るべきであらう。その結果として「鳥のとまりけり」と云ふ字餘りの形になつたのであらう。その力點を抜きにすれば、わざ／＼字餘りの形を探らずとも

枯枝に 鳥とまれり 秋の暮  
 枯枝に 鳥とまるや 秋の暮  
 枯枝に 鳥とまるよ 秋の暮  
 枯枝に とまる鳥や 秋の暮  
 枯枝に 鳥がとまる 秋の暮  
 枯枝に 鳥のとまる 秋の暮  
 枯枝に 一羽の鳥 秋の暮  
 枯枝や 鳥一羽に 秋の暮  
 枯枝へ 鳥の一羽 秋の暮

など少々想の違ひはあるが、幾らも云ひ様はある筈だ。而かも斯んなことを云つては、その鳥は彼の翁の眼にとまるまでに早く枯枝にとまつてゐる鳥になる。五分前か十分前か半時間前か、一時間前か、とにかく翁が見た時已に枯枝、鳥と云ふ配合が固定したことになる。すれば當然の豫想として、最早その鳥はその枝に飽くであらう。更に飛翔一番して



今に他の枝に移るであらうとなつて枯枝、鳥の配合は不安定な配合として翁の雅心を脅かすことになる。こゝはさうではなく「枯枝に」としてこの一句に産み出す詩の背景を示し、この「枯枝」についても、全部根こそぎ枯れた木の枝か、幹は生きて枝だけ枯れたものか、他の幹も枝も生きてゐてその一枝だけが枯れてゐるのか、木はちつとも枯れてないか、その木が落葉木で、今葉が凋落し切つた處の枝なのかとの詮鑿もあらうが、俳句の解——殊にこの句の文學的解釋としてはあまり必要はない。マア何れの場合でもよいものと思ふ）次に「鳥の」でこの場面に活躍する主人公を出したので、この時翁の俳眼には

鳥の主觀——對——全宇宙の客觀

が映る。宇宙——と云へば大袈裟だが、今鳥の主觀には彼のニュートンが引力の法則を外にして、趣味の引力の各種が映じる。それは丁度吾々が會議室とか大廣間とかへ唯一人のつそり這入つて行つた時、室の縁のベンチ、中の椅子、隅つこのストゥヴ、奥の大火鉢、中央卓上の新聞がそれ／＼自分を惹きつける、つまり自分の主觀における意志の選擇作用が働く）而かも最後にそれ等の何れにも行かないで西のガラス窓際に行つて、窓下に横たはる満都の光景に一瞥を投じた時のやうなものだ。各々の趣味的引力（アットラクトする力）には等差があつて、十を満點とすればベンチは一を以てし椅子は二を以てし、ストゥヴは三を以てし火鉢は四を以てし、新聞は五を以てし窓下の眺めは十を以て惹きつけたので、とう／＼十の窓際に行つた譯だ……と様な趣がこの場合の鳥にもある。即ち

鳥のとまりけり

は、それの等の趣味的競争のたゆたひと結果とを併せ示したもので、鳥は双翼をはたいて右往し左往し高く飛び低く飛びその間に自己の休憩所を物色する……と、その邊近くには、禪宗寺の屋根もあり、裏庭續きに藪もあり、軒の外

には廂も出て居り、庭の真中には石燈籠もあり、又その横には青々とした柀の木もありして、めい／＼鳥を惹きつける。どれにしたものかと鳥は尙も羽ばたく、その感情のさゆらぎの後、それ等の何れにも行かないで庭の片隅に松の木の枯枝がサモ枯淡な一すじを斜横に出してゐる。それを見かけてフワリととまつたさも「處を得たり」と様に……と云つたもので、此時「屋根は一を以てし、藪は二を以てし、廂は三を以てし、燈籠は四を以てし、柀は五を以てし、枯枝は十を以てす、故に鳥は十の枯枝にとまれるなり」となる。さて

秋の暮

と云ふのは、この枯枝と鳥との新配合の結果醸されたさびもあれば雅味もある詩趣である。枯枝は枯枝の氣とも謂ふべき氣を以て鳥に作用する。鳥も鳥の氣とも謂ふべき氣を以て枯枝に作用するこの交流感應の結果翁が眼には快い滲透作用の結成物を見る。それが「秋の暮」である。即ちこの一幅の光景によつて翁はしみ／＼「あゝ秋の暮だナア」と體感したと云ふのである。而も如上の動作は極めて一瞬に演ぜられたもので鳥は今自分がこの稿を綴る程の時間暇も入れてないのである。吾々とても秋の暮に鳥が枯枝にとまる位の光景は随分見る機會もあらうが、翁のやうに斯程迄に自然を靜觀し味觀し體感し得ることは困難である。無論今日ではこの句があるから、その句心で觀るので、格別何とも思はない。誰だつて此位のことば氣がつくと云ふだらう。が、それは創作苦の體驗を有しない人の愚かしいきかぬ氣と謂ふべきであらう。

二、醜の美

正月の若菜を土ながら座敷に持ちあげると、土は元來座敷では穢らしいものなのが、ちつとも穢いと云ふ感じを起させない。（嵐雪の句に「ぬれ縁になづなこほるゝ土ながら」と云ふのもある）俳句が表す醜の美とは斯う

俳句の描寫する自然美 二、醜の美



した趣を謂ふ。それは「きたない美しさ」であり「美しい汚れ」であり「聖なる塵」であり「一見甚しい矛盾の奥に深い契合を含んだ自然美の一つであらう。この例としては、芭蕉の「朝露に汚れて涼し泥の瓜」と云ふのがあるが、餘り芭蕉のが重なるから他の引例を試みよう。

はき掃除してから椿散りにけり 野 坡

はき掃除しないさきに椿が散つたらどうか？ それは、はきだめに鼻紙が散らばつてあると變りない不潔物の一つであり、黴菌の孵育を聯想させるだけのもので、高々ごみ屋の對象になるだけである。それが若しあたりの塵埃を掃き清め外の醜いものを一切とりのけて、アノ見るからに氣持のよい箒目が庭の平地を痕づけてスーッと通つてゐる、その上へ落椿の一輪二輪があつらへたやうに散つてゐると作者が悦喜を表したものである。元來落椿と云ふものは春の季には入つて居るが櫻なんかの散つたのと比べて殺風景なものだ。その落ちる時はバサリと音してまるで斷頭臺の囚人の終りを思はせる無氣味さだ。散つて後は又厚ほつたい花瓣が不恰好な曲線の複合を形成して、まるで赤大根の漬物が散らがつて居るやうだ。然るに今その落椿を淨化するものは何か。それは「はき掃除してから」といふ九音に表されてゐる。キツトの皮の上等の靴を穿いて都大路の日本橋通あたりを正月の二日の雨あがりの眞晝に通る時靴は眞新しく、一點の塵も止めず黒光りがして一歩々々陽光に映えて小さい反射を閃かせつゝ行く、それも悪くはないが、若しその上の一ヶ處二ヶ處に僅かな泥が羽子板の散らし模様のやうにパツと散つて居ると一層「氣がきいた美しさ」にならう。(但し、これは余一個の好みかもしれないが) その時の泥は矢張り清い泥である。

巴里の貴婦人は、化粧法の一つとしてわざと黒子を顔につくる。顔は黒子によりて益々美しく黒子は顔によつて愈々淨くなる此を「美の黒子」と云ふ。この落椿は正しく大地なる女性がけはひの美の黒子である。一世の茶匠千の利休が

まだ紹鷗の家に一弟子として身を寄せて居た頃、「庭を掃除せよ」と云ひつかつておりたち見ると、最早綺麗に掃き清められてあつたので暫らく考へて後庭木の下に立ち寄つてユサノと揺ると葉がバラノと體裁よく散つたので、室にかへつて「掃除を致しました」と云ふ。紹鷗は之を見て非常に褒めて「風流の眞髓はこゝにある」と云つた。紹鷗の掃除とはきたなくすることであつた。これは俗人と風流人との別を思はせる一佳話でもあり茶味と俳味の相通することを示す一好例でもありする。野坡のこの句も或はそれ等を想に織り込んだもの歟否歟、とにかく俳句が表す自然美の一境をうまくとらへてゐると思ふ。

大根引大根で道を教へけり 一 茶

「一寸お尋ね致します。眞間村はどう行くのです」と尋ねる。尋ねられた葛飾在の百姓は、丁度大根を一本抜いたばかりなので「あゝ眞間ならこの道をすーつと向ふへ行つて辻を左へとつてアノ方角へ行かつしやい」さうですか、どうも有がたう」と云ふやうな一場面で、大根引をきたないものと云ふのは餘りに職業の神聖を無視することにならうから、これは美でもなく醜でもないと假定しても、畠から引かれたばかりの大根はどう最負目に見ても穢いと謂はねばなるまい。それはまだ肥やしに化しきらない糞便を含んだ土壌の幾片かをつけてゐる。それには方々に鬚根が出てゐる、菜つ葉には肥やしの落し藁がついてゐる。之をいよく口に入れるまでには洗つてほして鹽漬糠漬瀧漬などにしてあけてから、又洗つて切つて鉢皿に盛りねばならぬ。而かもこの句のやうに云へばちつともきたないらしい點がない。否むしろこの大根があるばかりに一段の野趣が引立つ。若もこの大根引が道をきかれて「ハイ」と立つて畠から出て、とある野川で手を洗つて「それは云々」と指さして教へたとすれば、手そのものは綺麗であらうが俳句が要求する綺麗さは失せてしまはう。禮儀作法を超越した自然の態度とそれを助ける土まみれの大根とがあつて、この場は詩趣を爲してゐる。



大徳の糞ひりおはす枯野哉 燕 村

糞便のきたないことは云ふまでもない。枯野は凄いもの、むくつけきものとしてはよく歌材俳材にはなるが、なつかしみのあるもの、あたゝかみのあるものとしては従来餘り歌はれてない。處がこの句はどうかと云ふに「そこに踞つてゐるのは一世の高僧である。何處の法會でも説教でも萬人の隨喜渴仰を受ける大徳である。まづ五十前後のムツチリと卑しからぬ太り肉の體格をした、下膨れの輪廓ある顔には聰明の相が表れて、白い法衣に紫の袈裟、手には經卷を持ち足には厚はまの高下駄か（坊さんは餘程の遠路でも下駄で行くものだ）若くは裾はおきまりの坊主からけをして草鞋ばかりかひん／＼しい姿とかう想像したい。今時の髪はのばした上にチツクで固めて、金縁眼鏡の奥に細い眼をしよほつかせてゐる何宗大學出の坊さんでは不似合だ。さうした大徳が今物蕭々たる冬枯の野を辿る。行けどもノ、原又原で、よく見る野中の一軒家と云ふやうな休み茶屋も何もない。口からは貴いみほとけの教を説く人も尻からは生理的の過剩物を排出せない譯には行かぬ。便意は刻々に催して來るのに便所はつひに見つからない。マ、よあたりに人はなし雲天井の大便所で薄の枯生にそれ道してそこで用を足されてゐる。と斯うなれば極めてきたならしい人糞や極めて疎ましい枯野が立派に詩趣を帯びて來て、吾々はその糞その枯野を懐しまない譯にはゆかなくなる。つまりこの句は大徳の徳が全光景に彌蔓して淨化を完成してゐる。（尙燕村の句には小便を取材して

いばりせし布團ほしたり須磨の秋  
と云ふのもある。）

三、悠々閑適 和歌が寫す自然美にも

思ふどちそことも知らず行きくれぬ 花の宿かせ野邊の鶯 藤原家隆

のやうなのんきな想のものがあつたが、俳句のやうに多分にこの情趣を歌はない。戯曲小説の背景に至つては主に生死流轉の切迫した感激の對象にすること、前の心中の道行文のやうなもので逍遙遊の情味は滑稽本か何かでなくては盛られない。この悠々閑適は大きく云へば東洋趣味の一つで、漢詩漢文には随分澤山あるが、どつちかと云ふと支那文學のそれは隱逸者流の臭味があり、國文學のそれ就中俳句は青壯年の氣まぐれものか六七十の樂隱居を聯想せしめる。

高麗船のよらで過ぎ行く霞かな 燕 村

これは高麗船の句が、春の句か、霞の句か、と云ふに皆然りとも謂ひ得るし、皆然らずとも謂ひ得る。一篇の主想は字面の裏に隠れてゐるからである。

麗日和風、空に一點の陰翳なしと云つた春日和に、濱近い村里がある。家に居て此と云ふ用事もなし、さりとして豫定の遊び事があるでもなし、マア濱へでも行つて見よう位な氣で、晝餉を終へたのんき坊が尻切れ草履かチビ下駄をつつけて、ノソ／＼散歩の足を曳く。と濱はソヨ吹く風にかすかに縮緬織をよせてホ、笑みつゝ「日ねもすのたり／＼かな」の調子で磯回の砂を洗つてゐる。浪なき沖は遙に見渡されるが視野は春靄の糝糊に盡きて、まるで錢湯の朝湯を獨り占めして浸つてゐるやうな氣持にトロリとなる。折柄この單調を變化づける高麗船が一艘チラと見え初める。千波萬波を押し切つて、遙々渡航した朝鮮の船には、異國情調を盛つた様々の貨物と、ことくに振する鮮人の一行とが乗つてゐることだらう。この界限での船つき場になつてゐるこの濱のことだから、多分船を泊めて飲料水や食糧の補充をすることだらうと少し好奇のときめきを覺えて、チーツと件の船を見てみると、船はだん／＼近く大きく見えて來たが、中途舳を轉じて、又チーツと霞の奥に消えて行くその消えて行く跡までも見詰めて、跡に立ち罩むる霞まで眺めてゐようと



云ふのだから主人公のノンキヤ加減思ふべしだ。春の日のうららかなさ、春の海の平和さ、飲食の補給をも要しない高麗船、難破の憂のない随つて（船を寄せて避難の要もない）航海とが、このノンキ極まる主人公の許に集注して一篇の主想たる悠々閑適の情を表したものであらう。又これは時間藝術たる文學の上から見ても面白いもので僅々十七音の中に家を出てから、船の後の霞を見るに至るまでには數時間の経過をあらはしてゐる。

いざさらば雪見にころぶ處まで	芭蕉
涼しさに四ツ橋を四つ渡りけり	小西來山
春雨や菊も植ゑたし寝てもよし	桐之
おらが世やそこらの草も餅になる	一茶
夕涼みよくぞ男に生れける	寶井其角
蝸牛酒の肴に這はせけり	同
明月や壘の上に松の影	同
花に風輕く來て吹け酒の飽	服部嵐雪
春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴	内藤丈草
そこもとは涼しさうなり峰の松	各務支考
寝てるよが起きてるようが花の春	西吟
夏川を越すうれしさよ手に草履	谷口蕪村

などはこの種の名句である。

尙俳句が取材する自然美には

荒海や佐渡に横たふ天の川  
 猪も共に吹かるゝ野分かな  
 のやうな壯美

春風に尾をひろけたる孔雀かな  
 雉の尾のやさしうさはる董かな  
 のやうな優美

まかりいでたるはこの藪のがまにて候 一 茶  
 夕立や智慧様々のかぶりもの 二 由  
 のやうな滑稽な趣や

鶯や茶の木畑の朝月夜 内藤丈草  
 水底の岩におちつく木の葉かな 同 上  
 のやうな靜寂な趣など随分多様であるが、今は俳句特有のものを主としてあげたのである

四、象徴 俳句の技巧の一つには象徴がある。この象徴と云ふ語には次の諸意義がある。

一、美人を解語の花と云ひ、殺害の慘禍を「血で血を洗ふ」と云ふやうに譬喩法（暗喩法）の一步進んだ云ひ方。

俳句の描寫する自然美 三、悠々閑適 四、象徴



二、「我が日章旗は白い巾きんに赤い丸であつて、白は純潔を表し赤は赤心しやくしんを表してゐる」とやうに、無形むけいのものを有形けいけい有色の語によつて表はす云ひかた。よく「象徴きやくている」と云ふのがこれに當る。

三、第二の高度なもので特に氣分の表現に用ゐるもの（又之を高級象徴、氣分象徴など云ふ。メータリックの「青い鳥」その他の作品及び近代象徴派詩人の詩にこれが多い。）

俳句の方では人事を歌ふのによくこの法を用ひるが、それは右の三種の中第一義の象徴である。和歌では自然物を人格化して

吹く風をなきて怨みよ鶯は 我やは花に手だにふれたる

など云ふことが多いが、俳句ではその逆に人事を自然物化して一見純然たる咏物詩かと思はれるやうなのが多い。或は之を擬物法と謂つてもよいが、今日にあつては象徴と謂つた方が分りが早からう。その結果として自然物は人事によつて其意義に俳的區劃線を引かれ、人事その物はその表された自然物によりて此亦俳句の一棧敷を形づくられる。そこに醗酵する氛圍氣は一寸道行文の情景融合に似たものがある。

憂き事になれて雪間の嫁菜かな 田捨女

嫁ぐ時には佛壇の前で宣誓して、父母長上が、先方はこれ迄言ひかした通りの家族で斯様々々の家風だから、一旦嫁いだ以上、どこまでもすなほにおとなしく向ふの家に氣に入るやうにせよ」と言ひかされて來た花嫁が、嫁いで見れば聞きしにまさる邪慳の姑、依姑地の小姑、鬼千匹の諺通りの憂さつらさが日に幾度か襲つて來る。けれどもその嫁は飽くまで父母の戒めを堅く守つて、どんなことがあつても辛抱しようと決心してゐるから柳に風と圓滑に勤勉に善處する。その内だん／＼家風に馴れてへまな事も少くなる。小姑は他所へ縁づくし、姑はよる年波に氣が折れて果てはす

つかり向から妥協してかゝる

嫁已に姑となりて海内を平定し

との川柳の句までは進まずとも、此節では笑うて暮らす日勝になつた。それを句にするに

憂きことに堪へて嫁女は稍順境

としては露骨に過ぎて句にならぬ。そこでこれとそつくりの現象の自然界に求める。するとあの春先に可憐な芽を出す嫁菜がある。その名も嫁には秀句の縁がある。そもこの嫁菜たるやと考へて見る、秋の霜がれ、冬の風、二季の自然の壓迫は幾たびか彼の一本を脅かしたが、些やかな根は、けなけなにも、この頼りない運命を負擔してやがて一年は暮れて意地悪い大地の母は、我とだん／＼軟化しお負けに彼女の滋養分までも提供してくれ、野川の面は水ぬるみ、春光融々として祝福の光を投げると、まだ雪ながらこの半年苦面澁面の夜毎日毎を送つてゐた彼女も云ひしらぬ嬉しさが根の胸にこみあけて、つひホ／＼と優笑ゆうせうを洩らした……その途端バ／＼と若い新芽が出たその趣はかの花嫁の通つた生の轍と甚だ相似たもので、嫁と嫁菜、姑と大地、霜雪と小姑、とそれ／＼相對比する。ことが出来る。そこで

憂きことになれて雪間の嫁菜かな

と云ふ形をとつて、この想を表す。その結果として花嫁は嫁菜によつてしほらしみを増し、嫁菜は花嫁によつて可憐味を増す。

鶯や隣まで來ててまの入る

花さかぬ身は狂ひよき柳かな

萍や今日はこちらの岸に咲く

俳句の描寫する自然美 四、象徴



子や待たんあまり雲雀の高あがり  
こいゝと云へど螢が飛んで行く  
兩袖の雪拂へども

などこの種の名句が少くない。

五、餘情法 十七音の短詩形たる俳句は歩三兵で將基をさすやうに一語一句が數語數句に匹敵するだけの弾力性が無ければならぬ。一隅を擧ぐればあとの三隅は餘情に含まれてあるやうな表現法をとらねばならぬ。とりわけ自然美の複雑多趣の中から作句しようとするのは直徑幾億里の宇宙を僅か十七吋の紐で括らうとするやうなもので餘程技巧の精熟したものでなくては不可能だ。

これはく とばかり花の吉野山 安原 貞室

陽曆ならば四月の半ば、吉野は中の千本の花ざかりで、唯見る一帯の山溪、紅葩繚亂、薰霞靨豔、絹雪洞か絹蚊帳を通つて來たかのやうなやは風そよ風が花毎枝ごとにやさしく口づけをしてそよぐ趣、一眼見て「マア、これはく」とあいた口も塞がらぬ程の美しさで、到底拙い形容では形容しつくされないと云ふことによつて巧に形容された名句だ。「これはく」とばかり」は餘情法の上乗なるものだ。それをもう少し餘情をあらはにした

みよしのの芳野の山のさくらばな しばしものこそ云はれざりけり

と云ふ歌もあるが、これとて多少の餘韻、はあるが、もう詩ではない、散文に墮して居る。芭蕉の

見渡せば眺むれば見れば須磨の秋

松島やあい松島や松島や

の反復法も亦同種の技巧である。

鯛は花は見ぬ里もありけふの月 井原 西鶴

「鯛は海中の珍珠而かも濱遠き邊僻の里では戸每人毎口にする譯には行くまい。花は自然美の主物而かも花なき里では見愛でる譯には行かぬ。然るにけふの明月は花なき里も、鯛なき村も皓々一白の銀箭を惠んで萬人等しく見て娛しむ。月こそは唯一普遍美と謂ふべけれ」と此句の持つ餘情は略こんなものであらう。

花の雲鐘は上野か淺草か 芭蕉

大江戸八百八街は、今し春の最中、遊覽麗衣の子女や都人士は、上野に淺草に向島に、昨日は東今日は西と有頂天になつて遊ぶにあわたしい。旺盛たる春の雲は咲いた櫻に花曇りして、この歡樂の群を一つに罩める折柄ゴーンと鐘が鳴る。オヤ今鳴る鐘はどこか知ら、上野かそれとも淺草かと軽い衝動のそれも一瞬、あとはまたく大浮かれに舞へや歌へや瓢箪ばかりが浮物が

とのどめき、春興是れ日も足らぬ江戸ッ兒の快遊が一句の奥に魔鏡のやうに展開してゐる。

六、寫實 景物を有るがまゝに寫すと云ふことは餘情法とは正反對で、この種の表現は何も俳句に限つた譯ではないが、俳句の表現の主なる一技巧であることは争ふべからざる事實だ。俳句から出た俳文、寫生文、小品文、更に一轉化した漱石氏虚子氏等の小説が皆寫實味の勝つたものであるのも、その一證だ。が、俳句の寫實は他の文藝に比べると一層念入りを要する。十七音と云ふ音律の拘束はどうしても委曲を盡して細叙する譯には云かぬ。昔歐陽永叔は醉翁

俳句の描寫する自然美 五、餘情法 六、寫實



亭の記」を作るに、冒頭に意匠をこらして何の山かにの水と層々美辭を連ねて十數句、皆自己の意に滿たない、最後に「滁を環つて皆山なり」の一句を得て之を始めに措いたと云ふが、俳句の寫實はこの文話と同趣の省筆法を兼ねた寫實でなければならぬ。それには彼の寫眞師が、種板に映すまで幾たびかカメラの幕をためつすがめつ、してピントを合せて、「此なら」と云ふところで「ハイ只今——」と合圖してカチヤンとシヤターを押す、あゝした骨合ひが必要だ。寫す自然は何と極まつてもピントの合つてない處から寫しては句にならない。こゝと云ふ急所を押へた寫生でなくては面白くない。

今茲に「稻妻」を寫さうとするに、各自各自の體驗を異にしてゐる故もあらうが、又各自がポイントの捉へ處に拂つた苦心の上に個性を發揮したものと見られるのは左の諸例に徴して明らかだ。

- 稻妻と聞いてすがめる座頭哉 三 遊
- 稻妻に枝踏みかふる寢鳥哉 竹 友
- 稻妻に堅田泊りの宵の空 蕪 村
- 稻妻にこほるゝ音や竹の露 蕪 村
- 稻妻に覺らぬ人の尊さや 芭 蕉
- 稻妻に大佛拜む野中哉 荷 兮
- 稻妻に突きこかさるゝ女かな 麻 兄
- 稻妻に走りつきたる別れ哉 釣 雷
- 稻妻に一網打つや伊勢の海 蕪 村

- 稻妻にゆかしき唐の本草哉 淡 々
- 稻妻に青ううつるや淀の城 子 一
- 稻妻に面影見てや夜這星 片 徳
- 稻妻の隠れすますや年の底 宋 屋
- 稻妻の心拍子に違ひけり 鯨 重
- 稻妻のこもりて見ゆれ草の原 太 祇
- 稻妻の柴の庵や釣り上げむ 蟻 古
- 稻妻のなきと思へば雲間より 太 祇
- 稻妻のなき日は空のなつかしき 同 壽
- 稻妻の残る暑さを散しけり 可 壽
- 稻妻の山を出兼ねる夜明哉 嵐 青
- 稻妻は蚊屋を通すか通さぬか 和 流
- 稻妻や雨雲わかる闇の空 太 祇
- 稻妻や浮世をめぐる鈴鹿山 越 人
- 稻妻やうつかりひよんとした顔へ 一 茶
- 稻妻や海の表をひらめかす 芭 蕉
- 稻妻や顔の所か芒の穂 同

俳句の描寫する自然美 六、寫實



稻妻や昨日は東今日は西  
 稻妻や雲にへりとる海の上  
 稻妻や扱この橋の下遙か  
 稻妻や杉の立樹の五六本  
 稻妻や少し見えたる瀬田の橋  
 ○稻妻や誰が目から出て雲に入る  
 ○稻妻や誰動かしてかゝみやま  
 稻妻やどの傾城とかり枕  
 ○稻妻や野の人戻るうしろより  
 稻妻や船幽靈の呼ばふ聲  
 稻妻や山戀ふ猿の日のうつり  
 稻妻や山城の山河内の川  
 稻妻や闇の方行く五位の聲  
 ○稻妻や闇を引裂くまのあたり  
 稻妻や淀の興左右が水車  
 稻妻や弱りくくて雲の果  
 稻妻や割なき態のさし向ひ

其 宗 狐 嘯 琴 山 龍 去 五 太 毛 几 芭 旭 鬼 太 三  
 角 比 杓 山 臺 夕 眠 來 房 祇 佛 董 蕉 扇 貫 祇 力

稻妻を渦に巻きつゝ、鳴戸かな  
 ○稻妻を傘ではね行く夜道哉  
 稻妻を手に取る闇の紙燭哉  
 ○稻妻を折返したる暗さ哉  
 このうち附圖の句は電光の刹那の衝動をうまく捉へてゐる。今これ等以外何とかして電の刹那の一閃を寫さうとするには何と云ふが一番適確か

電や雨戸をしめて大竹割  
 とすれば雨戸を締めかける矢先にピカりと光る「ソラ鳴るぞ」とピシヤンとしめると電はその戸締りによつて線が中斷されると云ふ趣はあるが中斷されてもまだその餘影は、ちぎれた蜥蜴の兩方ともが蠢くやうにたゆたうてゐるかのやうな趣があつていけない。  
 ゴロくくくあつと云ふまに又びかり  
 としては雷鳴とその次の電光との間隔の切迫だけしか表れない。では  
 稻妻や自動車よりも汽車よりも  
 としてはどうか、何だか電いんげん車と云ふ乗り物のやうになる。  
 夕闇をまだ暗くするいなびかり  
 對照の効果は光つた後の暗闇にのみきいてゐて面白くない。  
 突と光り突と消えたるいなびかり



これでは妖怪變化かと思はれる。

稻妻や口をきく間も何もなし

これは單なる散文語で平語である。

どうもポイントがうまくつかまらない。それを越智越人は

稻妻や越人と二字書く間なき

とした。越人と二字自分の名を書く暇さへもない中にピカツと光つてスツと消えた」と云へばその寫し方が具體的であるだけに唯「はい」とか「刹那だ」とか云ふより、あり／＼と寫される。

更にこんどは春の宵の趣を寫さうとするには、どの點からするか、これも古人の句に色々あらうし、新たに作句するとしても着想は千種萬様であらうが、今は蕪村の一句と之に對する二三名家の評とを假りて少しく卑見を補つておく。

公達に狐化けたり宵の春

蕪村

正岡子規氏は曰はく「なまめいた春宵の按配を見せたもの。」

内藤鳴雪氏は曰はく「少し小説めくが、私は之も矢張女の許へ狐が公達に化けて通ふので、何かの拍子にそれが露れたやうな事と思ひます。」

野口米次郎氏はその著日本詩歌論(邦語譯四五頁)に之を英譯して

Prince young, gallant,

A Masqualading fox goes

This Spring eve.

と云ひ、之に鑑賞批評を加へて云ふ。

「諸君は何處かで、日本の戯畫を見たことがあるであらう。畫には春の宵の淡い新月の影を踏んで逍遙してゐる奇怪な若公達が、軽い筆で描かれて居る。若公達、それはお化けの狐だ。後へ一本落したのは脇刀かと思はれる。

と狐の尻尾が見えて居る。髪は二三本の麥稈でもつて古風に結ばれて居る。處は京都の洛外あたりか。日本四月頃の春の宵、濃艶で狭霧深い春の宵は、如何にも狐をも麗はしく心の平均を失はしむる誘惑を持つて居る。

自然や人生が時には現出する可麗な身振に對する詩人蕪村の愛は春の宵といふ如き題材(春の宵の靈は迫り來る詩の心だ)を扱ふ上に特に秀で、居る。」

狐が人を化かすと云ふことは恐らく日本靈異記頃からの傳説であらう。時には老爺に化けつゝ、揚屋の油揚を失敬したり、時には、旅人をあらぬ荆棘路に迷はせたり、又單なるトリックを使つて突然空中に千日前を見せたりする。が、春の宵には何に化けるが相應はしからう。同じ宵でも、冬の宵は悽愴、秋の宵は寂寥、夏の宵は清涼だが春の宵に至つては優艶の一語が最もふさはしからう。それは鬱陶爛漫として艶なる土佐繪か、もつとくだけた處で浮世繪の色調に近い。春雨がそほふつても艶なり、淡い灯影が村里にチラホラ浮いても艶なり、菜黃十里の畠に暮れ残つた夕陽の名残も艶なり、燈籠の上にヒラ／＼と風なきに散る櫻花も艶なら、朧ろに照らす春月を浴びて庭の一隅に白く浮き出す白梅も艶、この艶なる春の宵として狐の化けるにも一工夫なくてはかなはぬ處だ。一體人生を四季の推移に比照すると、冬の荒涼は七旬の老翁老嫗、秋の凋落は五六十の中老の男女、夏の青葉は三四五十の壯年期、春の駉蕩はと想ひ到ればどうしても青春の佳季にある青年子女を擧げねばならぬ。その青年の一階級に公達がある。之を青年紳士と謂つては大學を出て洋行歸りの新しい文化の高い教養を思はせるが、之を公達と云へば、繪に在る牛若のやうな上品な美しさを聯想す



る。狐は今それを選んだので實に時宜に適した化け方である。そして己に公達に化けた以上は、暫らく公達になり澄ましてそれにふさはしい言語舉止がなくてはならぬ。まさか老爺の油揚をとる譯にも行くまいし、旅人誘拐罪を犯したり千日前偽造を敢てしたりする譯にもゆくまい。聯想はいつか牛若對淨瑠璃姫を思はせ、敦盛對初菊を思はせ、安名對葛の葉、阿新丸の旅姿、秀次の小姓で美少年の不破伴作、などに馳せる。即ち春の宵はあの狡猾な狐をしてすら優艶な貴公子振を學ばしめる程ひどく優艶だとなる。

(「春の宵」と「宵の春」とは修辭的效果には相違もあらうが、この一篇の主旨にはさまで影響しない)

狐が陰險な動物として描かれたものには謠曲の殺生石や戯曲の玉藻の前があり、狐の敏捷なものとして乃至感謝的な獸としての描寫は、戯曲の千本櫻や菅屋道滿大内鑑などがある。が燕村のこの狐は大内鑑の葛の葉に成り變つて恩人安名の妻とかしづいて本物の葛の葉が無事に助かつて歸るまで夫を慰めたあの白狐に稍近い。

寫生の句はザラに在るが燕村の作は殊にすぐれてゐる。蓋し彼はその俳想を自身の畫材から得たものであらう右の狐の句の外で今一つ平明な寫生句をあけると

柳ちり清水涸れ石ところく

燕村

と云ふので、これ等は殆ど「有聲の畫」と云ふものゝ引合せにあつらへたやうな句である。其他燕村の句に

不二ひとつ埋み残して若葉かな

片町にさらさ染むるや春の風

大和路は宮も藁屋も燕かな

などがあり、

筏踏んで鮎桶洗ふ女かな	几	董
飯時の野鴨も戻る田植かな	月	溪
夕晴や切籠さけ行く京の町	闌	更
菜の花にのどけき大和河内かな	蓼	太
くしけづる人もありけり門すゝみ	白	雄
遠山に赤き宮あり冬木立	屠	龍
卯の花や神と乞食の中に咲く	一	茶

などもある。

七、理想の美 寫實はあるが儘の描寫であるが、さりとて、この世の森羅万象凡てが句化されるものではなく、俳人の俳眼でこれは佳いと思つた景致だけを句作されるのだから、寫實と云ふ語には己に一種の主觀的選擇性を含んでゐる。處がこの選擇性が更に一步を進めるとこんどは「理想の美」を描くことになる。作者が主觀で作りあげた望ましい景致である。無論その素材は嘗て一度は處を異にし、時を異にして客觀的に實在したものか、若くは實在し得る性質のものか何れかで、單言すれば、客觀的實在性のものばかりである。處が尙も一步を進めるとその實在性の有無を問はず作者の空想した純ロマンチックな叙景句を作ることもある。空想美とか想像美とか云つた風のものだが、今便宜上一括して之を理想の美としておく。(そしてこのことは構想、表現兩方面に關係をもつ) 余は始め「奥の細道」の中の會良の句

卯の花に兼房見ゆる白毛哉

俳句の描寫する自然美 七、理想の美



と云ふのを讀んで、どうも合點が行かなかつた。「卯の花の向ふに兼房と云ふ人が居るのが見えてゐて、その兼房は、もう白髮頭の老人だ」と文字通り解して見たが、それでは一向俳句の美がない。どうも解せぬなりでほつておいたものを後に國文學を専攻するやうになつてから、しらべて見ると、この句の前に「三代の榮耀は一睡の中にして云々」の有名な佳章があつて、「兼房と云ふのは藤原康衡の家臣で、和泉が城高館あたりの戦に、斑髪を亂して奮戦した。丁度齋藤實盛の最後とよく似た美談があつて今や奥州行脚の途次、軍の庭に来て見れば、かの兼房が奮闘したあたりに今は卯の花が白くさいてゐる。その卯の花を見ると昔兼房が白髮を亂した奮闘が思ひ出されると云つたものだ」とわかつた。兼房は嘗て實在した人物である。卯の花は現に垣根に咲いてゐる、この二つを選び抜いて結合するものは俳人會良である。けれども此等はまだ單に「詠史」とか「懷古」とか名づけても可い程度だ。處が蕪村の句に

易水に葱流るゝ寒さかな

と云ふのがある。易水は支那の川で、葱は支那でなくとも日本にもある。昔でなくても今でもある。併し句に表れた形では作者が現に易水に葱が流れてゐるのを見つめてゐるかのやうに現在法が用ひてある。けれども蕪村は一度も支那へ行つたことはないのだから、この句は嘘の句である。而かもその嘘は貰ふべき嘘である。

史記列傳荆軻の條を見るものは次の劇的な義俠談に興を覺えることであらう。

燕の太子丹は賢にして、仁、よく四方寄生の食客を愛しその數無慮三千人、何れも頭に金冠を被り足に珠履を穿いて款待の限りを受けてゐた。秦王政は、斯ては燕の後世恐るべきことにならうと危惧し事に托して、丹を招き、至れば則ち一室に幽閉して歸るを許さず、丹は懇願百方、とゞ隨行の食客中狗盜の術に長けたものによつて秦朝の寶庫中、囊に献上した寶物を盗ませて、之を王妃の要求通り再び獻納して歸るを許されたが國境函谷關で又々一故障が起きて、一夜があけ

ねば通さない」と關吏の頑張るところを、此も食客中鷄鳴の術に妙なるものが鷄の鳴きまねをうまくしたので關の鷄も之に相和して、いつもよりは早く時を告げたので、秦朝の追手の來ない中に、そこを通過して無事に歸國。サアそれから云ふもの、丹の憤慨やるかたなく、何とか之が報復の術もがなと思つてゐる矢先に、元の秦將攀於期なるもの、故ありて秦を亡命して、此程丹に身を寄せた。丹は數ある食客中、殊に荆軻の爲すあるに足るを見込んで、托するに此事を以てした。荆軻は快く之を承知した。男子一諾の重き、一命はこの時已に擲つ覺悟であつたのである。それを傳へ聞いた攀於期は荆軻に遇つて「太子の厚恩に酬るに好い機會ですから、どうか私の首をはねて下さい。そして、貴下はその首を持つて秦朝に行つて、陽に降順の意を示し、秦朝の爲めに私の首を斬つたと云つて之を進め隙をねらつて秦王政を一刀の下に刺殺す、これが今の場合上乘の策です」と謂つた。「でも貴下を手にかけると云ふことは、どうも」とためらつてゐると「咄まご／＼する場合にはありませぬぞ。それでは自分でこれかう」と鞘を拂つたかと思ふ間に自ら刎ねた。荆軻もこれに感激し、彼が命がけの好意を無にしてはならぬと云ふので、乃ち策を決し、伴つて降参する爲めに燕の領分中、一番肥沃の土地の督亢二州を捧げると云ふ名義の下に二州の地圖と件の首級とを携へ、副使と共に秦朝を指して出發した。燕の舉朝重だつた廷臣は皆之を見送つた。丹自身もその群に交つた。見送る人、見返る彼、何れも白衣白帽の姿で、凜乎たる壯烈鬼神をも哭かきしめむばかりの行列であつた。行き行いて易水の滯についた。こゝで別れようと云ふので、更に別離の宴が催された。荆軻は劍を抜き起つて一さしの舞をまふ。

風瀟々として兮 易水寒し

壯士一たび去つて兮復還らず

と一座之に相和した頃には、慷慨淋漓怒髮逆立して冠をも衝くかとはかり……其後荆軻が秦朝に行つての一舉一動は大膽と細心との驚くべき調和を以て巧く處したが、惜しむらくは副使小膽、事志と違つて竟に縛についたと云ふ。



唐詩選卷六の始めの方に

此地別<sub>ニ</sub>燕丹<sub>一</sub>

壯士髮衝<sub>レ</sub>冠

昔時人已歿

今日水猶寒

とあるのもその懐古である。易水に就いてはかうした悲壯な聯想がある。

次に葱はどうかと云ふに、馬琴が俳諧歳時記を註した或書には、

兼<sub>三</sub>冬物。葱、根ふか、一文字、(大和本草)大葱は、五月に實を植、八月九月、苗を分栽ゆ、冬春さかん

なり、肥地にふかくうゑて、漸々に培へば、白根長大云々故に根ふかと稱す、又曰、和名抄に、和名紀と云、

紀の一字を名くる故に、一名一文字と云。

などあつて季では十、十一、十二の各月通じて咏む、つまり冬の句に咏む物である。が、さうした古い約束を離れて吾々は今日葱に對して何を思ひ起すか、種は黒い粒々で、それを蒔く頃は春の暮れから初夏だから別に寒くはない筈だ。牛肉やかしわのすき焼の雑供にして一酌を汲みかはす肴にする時は唯うまいとか、暖いとか思ふだけだ。畠に立つて柔い青條を列べてゐるところは、唯色彩の美を思ふだけだ、白くほゞけて實がのつて葱坊主の出来る頃は、莖が竹のやうに堅からうと思ひ、一役果たした豫備將校を思ひ、隣の隱居の白髮頭を思ふだけだ。其香の一種特有な刺戟は人間の腋臭を思つて不快なだけだ。併しその中に一種の「寒さ」を含んではゐないか？ その食はれる時期が已に寒冷の三冬であること(尤も今日では培養法が進んで四季共に喰はれる)以外何か「寒さ」を思はせる屬性がありはしないかと云ふに、讀者の中には彼の冬の黄昏手を眞赤にして溝端に白根を洗つてゐる少女を思ひ浮べる人もあらう。自身自炊の牛鍋に馬穴の中でゴシヨノ、洗つて鬚を捲つたり枯葉をとつたりした時の寒さ冷たさを思ひ出す人もあらう。そこで、余

も亦少しく自己を語ることを許されたい。

余が大阪在任時代、一時物價騰貴と住宅難とで一般の月給階級人が困つたことがあつた。その頃余は阪神電鐵の沿線西宮町の郊外に某富豪の別荘を借りてそこから電車で南大阪まで日々通勤した。別荘を借りるとは名ばかりで實はその邸内の掃灑と花卉の保管とを一手に脊負つてその代りに無代で借宅するのだから體のよい別荘守といふ格でこれも窮餘の一策であつた。處が毎早朝その邸の裏門から西宮東口までは川沿の堤防傳ひでこの間がどれ程と記憶にはないが、時間には八分間で左側は些やかながら東川の水が冷たく流れてゐる、停留所間際の處に毎日青物市が立つ(後には公設市場も出來た)寒い木枯嵐を浴びながら急ぎ足で通ると東川の川上から葱の片がブカ／＼と流れて來る。青葉のところがさうもないが、白根が鮎の腹のやうに又は磨ぎすました白刃のやうにギラ／＼光つて流れてゐるところは、見るから凍えさうである。そこで余は「易水に葱流るゝ」と、アルミの辨當包みを直しながら心に呟く、葱から「寒い」と、云ふ感じを受取つた始めは正しくこの時であつた。

その後當弘前に來て以來、曆は已に三度改まつて、今や恰かも第三回の迎年で今日も某先輩の新年宴會に招かれた處である。弘前有數の肉屋兼料理店に「富田」と云ふのがある。毎日御用聞が來て、貧弱な余の家庭でも月々若干かの拂を餘儀なくされる。處がその富田の歳暮と云ふのが三回か三回とも葱なのである。北國特有でもなからうが、太く柔かく白根が三寸許もついでゐる上等の大葱だが、當地の十二月末から一二月へかけては寒さのきつい絶頂なので「ゑづこ」とか云ふ藪で編んだ籠のやうなものへ入れておく。入れておいてもバリ／＼に凍る。(こゝではさしみでも數の子でも大抵のものは凍る)それを一つ／＼上皮の汚いところを剝いで、剝くと云ふよりも削るやうにして鍋釜に入れる時の冷たさは亦格別である。その時余は復もや「易水に葱流るゝ」と心に呟く。葱は冬に配し水に配して最も寒さを感じ



る。早く芭蕉にも「葱白く洗ひ上げたる寒さ哉」といふのがある。(一本には「洗ひ立てたる」となつてゐる) 次に「寒さかな」の「寒さ」と云ふのは何か、無論温度の低下した趣であるが、氣候の寒さ以外「心の寒さ」即ち凛烈とか壯烈とか、悽愴とか愴涼とか悽慘とか云つた風の趣にも相當する詞である。市河實齋の東坡赤壁の圖と題する詩に、

孤舟月上水雲長 崖樹秋寒古戰場

一自風流屬坡老 功名不復畫周郎

とある「寒し」も秋だから寒いのだが今一つには古戰場だから寒いので、あとの寒さは周郎が苦肉の策を畫して黄蓋三萬の兵を以て曹操が八十萬の大軍に當り、よく之を卻走せしめたあの大戰の古を懐うての凜然たる心の寒さである。この寒さの一面には荆軻の故事によるこの種の寒さをも含んでゐる。

さかづきに銚子も添へず寒さ哉 也 有

身を捨て、小便に出る寒さ哉 玄 武

夜着一つ祈り出したる寒さ哉 芭 蕉

我が寝たを首上げて見る寒さ哉 來 山

井の水の暖になる寒さ哉 李 下

これ等は單なる寒さを表し

木佛の箔の剥けたる寒さ哉 白 鴉

詞さへなくて月見る寒さ哉 子 曳

皿を踏む鼠の音の寒さ哉 蕪 村

鷹匠は鼻のかまれぬ寒さ哉 二 由

次の間の灯で膳につく寒さ哉 一 茶

年嵩を羨まれたる寒さ哉 同 露

野の廣さ見えて月夜の寒さ哉 天 露

百姓の歟かたけ行く寒さ哉 二 由

道端に多賀の鳥居の寒さ哉 尙 白

これ等は全句若くはその一部分に後の意の心の寒さを含んでゐる句である。そこで蕪村の此句は、易水が持つ情趣の中から凜烈な寒さの一線をぬき、葱が持つ情趣から水に流れてゐる寒さと云ふ一線を抜き之を融合して 易水に葱流るゝ寒さかな

と云つたもので、此は蕪村の主觀裡で出來た俳句美の一境である。決して外部に實在するものではない。いつの世、いかなる場合が來ても、易水と葱と蕪村とが都合よくおち合ふ場合は盡未來際絶無と斷言しても誤はない。唯注意を要するは配合される餘情(若くは屬性)はその物の中心生命であらねばならぬ。若くは主内容を構成するものであらねばならぬ。尙今一つ許されるのは、その餘情自身としては微力だが之に好敵手を配すると、固有の顯勢力以外内在の潛勢力までも發揮して引き立つて來ると云ふ場合だけであらう。凜烈は易水の生命である。寒さは流れる葱の主屬性である。これがこの句の秀吟と謂はれる所以ではあるまいか。この見地からして



鴨川に菘流るゝ寒さかな  
易水に友禪洗ふ寒さかな

など謂つてはならないことは明瞭であらう。丁度俳句のこの種の技巧はその本源たる俳諧の「句の附」と云ふのに酷似してゐる。俳諧と自然美とは交渉がないではないが、一聯の百吟二百吟を多くの人々によつて創作すると云ふ點がどうかと思ふので今は論外におくが、この句の附は芭蕉が従來の「詞の附」の上に一進境を開いたもので、例へば

おかしらに菊貰はるゝ迷惑さ 娘を堅う人に逢はせぬ

に於て、上の句は、親方から「その方の宅にはよい菊があるさうだ一株譲つてくれぬか」と詞がかかる。主人が若し世に嬌びた才人ならば、得たりかしこしと大恐悦で我庭のよきが中のよきを見立て、恭しく捧げる處だが、此老爺元來頑固朴訥で、所望されると却て浮かぬ顔をして「エ、あた惜しい折角丹精して咲かせた菊だ、それ程欲しけりや、御自分でつくらつせい」なんか言ふ。その趣だ。

下の句は蝶よ花よと育てた家の秘藏娘の、年は二八か二九からぬと云ふ昨今、而かも美人の噂さへ高いので、心ある若人や媒酌が手をかへ品をかへして「一寸娘御を借用したい」とか「見合と云ふ譯でもないがマア、そのつもりでお嬢さんも連れまして……何ならあなたは後程でもよろしいから」など云つて連れ出さうとする。これも當世才子風の親なら先方がこれと見込のある向なら、如才なく粹をきかして二つ返事で委細承知と娘にも一帳羅の晴を着せて出させるのだが、この老爺は野暮で無粹で「今時そんなことを云うて何をすることか……え、困つたな、ではお前さんしつかりと頼みますぜ、娘は賣物で傷がついては困りますからなあ、六つになつても歸らぬやうだつたらわたしが出かけますぞ」と石橋を叩いて渡るやうな念を押す。

そこで上の句の頑固なそつけない餘情と下の句の野暮無粹の餘情と一味の相通があるのでこの種の附けたを「句の附」と云ふので「句」とは今云ふ餘韻とか餘情とかに相當する。それは丁度、易水の餘情と菘の餘情との契合と相似たものであると思ふ。

聲	嗶	れて	猿	の	齒	白	し	峰	の	月	
曲	水	に	病	後	の	僧	の	苦	吟	か	な
行	く	春	や	重	た	き	琵琶	の	抱	き	心
梨	の	花	月	に	書	讀	む	女	あ	り	
花	に	酔	う	て	か	へ	る	さ	に	く	し
月	見	せん	伏	見	の	城	の	す	て	ぐる	わ
山	寺	に	米	搗	く	音	の	月	夜	か	な
陸	奥	殿	の	涼	み	臺	なり	千	松	島	
夜	嵐	や	太	閤	様	の	櫻	狩			
南	宗	の	貧	し	き	寺	へ	冬	木	立	
月	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	
月	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	

など中には實景即吟もあるかも知れぬが、單にこれ等の句面だけを見ては、どうしても作者主觀の美はしい構想の表れだと思ふ。

八、「季」について 俳句には四季によつて咏み込む材が一定してゐてこの約束を無視しては句にならぬと云ふ。これ

俳句の描寫する自然美 七、理想の美 八、「季」について



も恐らくは世界に類のない規定だらうと思ふが、徳川時代の俳壇にあつては此にも重要な意味があつた。今日からみれば「月」は春の句にしようが、夏詠まがそれが詩美を發揮して居ればよいと思ふのだが、舊俳句では月は三秋を兼ねる景物として七、八、九の三月のことを詠ふときでなくては取容れてはならないことになつてゐる。これについて現時俳壇の耆宿内藤鳴雪氏は云ふ。

(俳句はいかに作りいかに味ふか一三一頁)

俳句を作る上に於て春夏秋冬の季の事物を入れるとが、最近に必要なであるとか、ないとか、いろ／＼に言はれてゐる。が、これは私に於いては必要であると主張したい。何故ならこの四季の事物は、人事にも天然にも亘つて、われ／＼の祖先以來常に接觸して來たものであつて、われ／＼がその事物に逢ふ時には、その周圍の事物までも連想が起つて來る。例へば萬歳と言へば、新年の目出たいあらゆる事物を連想し、魂祭りといへば、秋の冷たい空気を連想する。櫻や鶯と云へば、暖かな春の姿を、月とか、すゝきとかいへば秋の冷たい空気を連想する。斯く一をあけて他を連想するのは、人間の殆ど、先天的性情であるから、簡単な俳句のやうな詩形で以て、ある感想を詠はうとする時は、殊に連想を多く伴ふ事物をその句中に入れるならば、短い言葉ながらそれに數倍した表現を爲し得ると言ふ効果があるのである。斯く言葉の上のみから觀ても、季の事物を入れるといふ事は非常に經濟的な方法となつてゐる。加之簡単な詩形で或感想を詠ふ時には到底その全部を言ひ盡すことは出來ない。爲にそこに餘意餘情といふものを含ませる事が最も大切な事となる。そこで又この點から見ても、季の事物の入るといふことは極めて必要な事に違ひないのである。

私が季の事物を入れることは必要であるとする點は、要するに茲に在るので、同時に又それ以上に出ないのである。即ち季の事物を入れることは、取りも直さず俳句を作る上の方便に過ぎないので、季の事物から、俳句のそれが成立つと思つてはいけない。俳句は季の有無に拘らず、自己が感想の上に成立つのである。従つて季の事物は必ず入れなければならぬと斷言することは出來ない。入れた方が俳句を作る上に於いて非常に勝手がよい。即ち美的感想を詠ふ上に極めて都合がよいと言ふ事だ。乃で近來季の事物を入れないものが随分と現れて居るが、それで以て俳句の本領たる、美的感想を満足に詠ふことが出来るならば、私はそれに就いて何等批難の言を挿む者ではない。けれども前にも言つたやうに季の事物が、われ／＼の祖先以來長い親しみある連想を持つてゐるものである以上、それを捨て、しまふといふ事は私には餘りに思ひ切り過ぎた事のやうに思はれる。少くとも私はそれを何時迄も利用してうまく作句したい。そして諸君もさうされんことを願ふのである。

氏の所論は要するに「季は國民的趣味の遺傳性とも謂ふべきもので、吾人が觀念聯想の中樞であるからなるべく採用せよ」と云ふに歸する。新俳句の俳人には季を用ひない向もあり新傾向句の俳人ではてんで季などは考へないと云つた風で、「季」は段々廢り氣味があるが、氏の意見は今日と雖も先づ穩健な方であらう。

が唯一つ自分が思ふことは、自然の風物と云ふものは昔も今も略變りはないが、その中の人工栽培に屬する草卉のやうなものには時世によつてちがひが出來て來よう。又人事の年中行事も、それが毎年きまつて行はれるから行事なのだ。が此とて風俗の推移に連れて變つて來よう。すれば俳句の季なるものも萬古不易の金科玉條とすることは不可能で、季の改正は今あけた側から手をつけられねばならぬ。已にその手入が出來た季ならば今日と雖も俳人は絶対に嚴守すべきで、それが面倒だと云ふならそれは作句に必要な教養を無視する妄言ではあるまいか。試みに歳時記舉ぐる所のい之部の始めを見ると

俳句の描寫する自然美 八「季」について



い之部

正月

院拜禮 (元日)

嚴島祭 (下の亥)

居籠 (九日西宮の宵蛭子)

寝積、寝擧 (「寝ね臥す」と云ふを美的にした語)

葦索 (荊楚歳時記に朔日葦鷄を戸上に帖し、葦索を其上に懸け符を旁に挿めば百鬼之を畏る云々)

芋頭 (いもがしら)

磯菜摘

凝かへる

飯蛸 (兼三春者)

紙鳶 (同上)

二月

虎杖

糸櫻

銀杏花

三月

石山祭 (月三日)

一乗寺祭 (月五日)

石清水臨時祭 (月中の午)

稻荷の御出 (ウマノと御出、うかくと御還と俗諺するやうに二の午に出て二の卯に御かへりになる京の稻荷祭)

池上千部 (廿九日より廿八日迄武州千束郷池上村長榮山本門寺の日蓮の祭り)

伊勢櫻 (遅咲の緋櫻)

家櫻 (花はよも毛蟲にならじ家櫻 嵐雪)

犬櫻 (凡て似て非なるものに犬を冠する如くこれも櫻に似て見どころのない小白花)

一歳桃 (種を植ゑてその歳花の咲く桃)

などある。然るに今年元日東京朝日が配附した「朝日カレンダー」の一月を見ると

行事

一日 四方拜、参賀、恵方詣

二日 初荷、書始、其他の始業式

三日 元始祭、三弘法詣

四日 政治祭、山開、諸官衙御用始

五日 新年宴會、初水天宮詣

俳句の描寫する自然美 八、「季」について



氣節

小寒 六日 (前四時五四分)

土用十七日 (後一時三七分)

大寒 廿日 (後二〇時二二分)

日出日入

日 出 (六時五一分)

日 入 (四時三三分)

晝 間 (九時四八分)

夜 間 (一四時一二分)

月 相

滿 月 十 日

新 月 二十四日

滿干潮

滿 潮 (前一〇時一六分)  
(後九時三七分)

干 潮 (前三時五六分)  
(後四時三一分)

主要出來事

一日 旅順開城(明治三八)

三日 伏見鳥羽の戦(明治元)

五日 楠木正行四條畷に戦死

とあり、積善館の當用日記一九二五年版の一月には

一月〔大〕 初空月、むつき、孟春

氣節

小 寒 六 日

土 用 十七日

大 寒 二十日

八せん 廿八日

初日 若水 門松 蓬萊 雜煮 屠蘇 七種粥 烏追 寒念佛 齒朶 讓葉 萬歳 獅子舞

○賀状交換

○親戚知友の訪問 賀客の應接

○避寒旅行 温泉巡り 恵方詣 七福神詣で 等又家庭内に面白く遊ぶもよし

○諸種の寒稽古 寒詣で 寒見舞

○火早き時なれば火の元第一

○感冒レウマチスの豫防大切

俳句の描寫する自然美 八「季」について



行事

時好

花卉 寒梅 福壽草 水仙 寒牡丹 寒菊 南天 萬年青 銀柑子 沈丁花 らうばい シネンシス

園藝 梅接ぐによし 薔薇 牡丹等の根接 桑、茶 果樹類の施肥促生 豌豆、苜蓿甘口大根を温床に蒔く、

蓮、葱、京菜、菠薐草等の採收 麥踏を行ふ

遊樂 歌留多會 双六 追羽子 謡曲 茶湯 歌 發句の會 芝居 雪見 狩獵 惠方詣 七福神詣 避寒

温泉行 スキー

食品 鯛 伊勢蝦 鱒 寒鮒 寒鯉 鱒 鮎 牡蠣 白魚 数の子 雁 鴨 鱈菜 芹 小松菜 橙 蜜柑

りんご 若布 海苔 鮭 寒すゝめ

税期

田租第一期分 (四分の一)

宅地租第二期分 (二分の一)

所得税第三種第三期分

北海道地租

營業税は課税標準を屈出可し

とある。これ等を參酌すれば遙かに現代に適切な歳事記が出来よう。(否已にこの種の試みもされてゐる筈である)

ともかくも人事の方面はさておき、我等が古き神代の昔から専有する山川自然の美を季節分けて俳材の中に取り容れることは、俳句創作の心持から見ても寧ろ自然であつて一部の批難者が「俳句が俳諧から獨立し俳諧が連歌から、連歌が和歌から分派したその起源にはいつも繁鎖な桎梏に對する自由解放の旨意が含まつてゐるのに、今俳句が季と云ふ拘束を固執することは當初の趣意に矛盾する」と云ふのは、時勢に伴ふ改訂を施さない以前のまゝの歳時記を固執するものには當らうが、新時代にふさはしい新歳時記に對しては當らないと思ふ。けれども又一面から見れば今日でも月並の宗匠には相も變らず舊歳時記を楯に彼此云ふ人々が多いだらうから批難者の言も理由が無いではない。蓋しこの種の人々は云はゞ趣味の押賣り者であり聯想の強要者だからである。

歌枕(文學的名所)

歌枕の語義は「歌をよむ歌草の多い土地だ」とも「歌を咏むものが枕言(常套語)に云ふ土地だ」とも「歌まうけ」の約で「歌をよむ爲めの土地」の意だとも色々に謂ふ。語義の穿鑿はとにかく、「歌によくよまれる名所」と見て大差はなからう。

大鏡や古事談を見ると、一條の御代大納言藤原行成と中将實方との歌論議が載せてあつて、始めに實方が自咏の

櫻狩雨はふりきぬ同じくは 濡るとも花のかげに宿らむ

と云ふのを示した。無論得意のつもりであつた處が行成が批評して「幾ら風流でも雨に濡れてまで花影に宿らうと云ふのは狂氣の沙汰だ」とけなした。短氣な實方むつとして、矢庭に行成の冠をとつて地上に投げすてた。行成は聲色自若として、居合はす童に命じてその冠を拾はせ徐にもとの通りに被つた。それを物蔭から帝がみそなはして、實方をお咎



めになり「歌枕みてまゐれ」と陸奥へつかはされた云々とある。(又後には實方が歌枕を見てまはつたと云ふ傳説もある)これ等は歌枕と云ふ語の用例として比較的早い方であらう。が、事實上歌枕とも謂ふべきものは早く萬葉集頃からあつた。即ち山城のかせ山、こばたの山、いはたの小野、みかの原、宇治くいの宮、大和のかぐ山、いこま山、こせやま、みわの山、あすかの里、河内のくさかえ、くさかの山、たごこえの道、攝津のありま山、るな山、なには瀉、みぬめの浦等は之を歌枕と謂つてもよさうだ。

次いで伊勢物語に「むかし男」の東下りがある。「むかし男」とは業平のことで、この業平の東下りについては、その動機に對して色々の揣摩臆測もあらうが、事實東遊の経歴地から見れば、先づは歌枕の遊歴で三河の八橋や、駿河の宇都の山や富士山や、隅田川の都鳥などが囑目の主内容をなしてゐる。

清女の枕草子中「物は」附題目の土地に關係あるものも亦一種歌枕的の記録である。

山は三笠山、このくれ山、わすれずの山……

峰は、ゆづるはの峰、あみだの峰、いやたかの峰

原は、たかはら、みかの原、あしたの原……

淵はかしこ淵……ないりその淵……あをいろの淵……

海は、水うみ、よさのうみ、かはくちの海、いせの海

わたりは、しかすがの渡、みづはしの渡

などがそれだ。が、併し「歌枕」を公然標榜した書は澄月法師の作と云ふ「歌枕名寄」が始めてであらう。處がこの澄月の傳記がはつきりしないので諸説區々になつてゐる。

余は今之を我國文學が自然美と密接な交渉を以てゐる一例として觀ようと云ふので、その點から謂ふなら歌枕の細かな論議は無用の穿鑿に失する。寧ろ「歌枕」と云ふ語の意味を擴張して「國文學に由縁のある名所舊蹟」と様にとりた

い。山紫水明國とも謂ふべき我邦は隨所隨遊歌枕に好適の地ばかりであるが、中にも國文學にもてはやす土地は

一、古歌古句その他古文學に作られた土地

二、名士によつて紹介せられた土地

三、實際景致のすぐれた土地

四、名稱の雅致ある土地

五、歴史上の舊蹟によつて名高い土地

の數種であらう。

世の中は何かつねなる飛鳥川 昨日の淵ぞ今日は瀬になる

とある。飛鳥川はこの一首のみではなく、早く柿本人麿の明日香皇女を哭する

明日川しがらみかけてせかませば 流るゝ水ものどにかあらし

など云ふのがあるが古今集のこの一首によつて浮世の常なきためしに言ひ慣はして幾たびか取材された、處が飛鳥川の實物はそれ程特殊の景致はもつてゐない。

千鳥なく佐保の川瀬のさゞれなみ 止むときもなくわれこほらくは (萬葉)

と云はれた佐保川は千鳥の名所であり源の佐保山は紅葉も名高い。(今は螢が有名だと云ふ)



むさし野はけふはなやきそ若草の つまもこもれりわれもこもれり (伊勢物語)

から武藏野も有名になつたが、實際は單に三笠山の西麓と云ふだけであの附近にはもつと景色のよい處もある。

秋風の吹上<sup>い</sup>にたてるしら菊は 花かあらぬか波のよするか 菅 公

とある吹上の濱は菊以外、月に千鳥に白雪に景物の豊かな南浦だがいよく歌枕の地歩を占むるに至つたのは此頃からであらう。

時しあれば櫻とぞ思ふ春風の 吹上の濱に立てる白浪 家 隆

白妙の光ぞきよき吹上の 濱の眞砂の秋の夜の月 雅 有

など云ふのもある。

國語で「ふるさと」と云ふのは

一、うまれ故郷

二、なじみある土地

三、年ふる里、史實のあつた郷

の三義があつて、今日の通義は第一義だが、紀貫之の「人はいさ心も知らず」の歌は第二義である。處が第三義のふるさとの用例として平安遷都以後の寧樂や、その附近、若くは寧良奠都以後に於ける吉野山(又は吉野の里)についての作歌されたものはザラに多い。

吉野は大和國吉野郡に在つて應神天皇の外宮處を定めさせられた頃から名高くなつたと云ふ。

天武天皇嘗てこの地に行幸あらせられて、胡床に御して琴を弾ぜさせられると、天女が舞ひ下つて飄搖たる演舞に御

感興一入にわたらせられた。(その舞が後世五節舞の起源になつてゐる)

王朝時代以後には吉野を詠じた歌は数多いが「ふるさと」と呼んだものには

みよしのの山の秋風さよふけて ふるさと寒く衣うつなり 參議雅經

と云ふのがある。百人一首の英譯者ウリアム、ポーター氏は之を左の如くに譯したのは「ふるさと」と云ふ國語の情味が不明な爲めに態と避けたもの歟。

Around Mount Miyoshino's crest

The autumn winds blow drear;

The villagers are beating cloath,

Their merry dn I hear,

This night so cold and clear.

みよしの、山の白雪つもろらし ふるさとさむくなりまさるなり

は前のよりは時代は古く坂上是則の詠である。是則は大和にも縁故があり殊に吉野山については「あさほらけ有明の月と見るまで」の秀詠もある人だ。

よしの山花のふるさとあたたえて むなしき枝に春風ぞ吹く

は新古今集攝政太政大臣の詠である。吉野は「ふるさと」としての所詠がもとで、後には名物の櫻と相俟つて我國有數の文學地となつた。自然美に情愴する西行が、どうしてこの地を見のがさう。

よしの山こそぞの葉のみちかへて まだ見ぬかたの花をながめん

歌枕 (文學的名所)



と云つてとう／＼三年間を奥の院（苔清水）に居座つた。事實西行の行脚中一頭氣に入つた境地と謂つてもよからう。南北朝の頃には所謂歌書よりも軍書に悲しい戦禍の府ともなつたが、それでも李花集や新葉集に盛られた観花賞月の佳什は多くこの山の風物である。戦國六十餘州を平定した豊太閤がこの山への豪遊一日の快は殊に吾人をして好配合との感を抱かしめる。この時も細川幽齋などが御供で盛に詠歌した。近世文學者でこゝに杖を曳くものは幾らあるかわからない。中にも

もろこしの人に見せばやみよしのの よしのの山のやまざくら花 賀茂眞淵

花よりあくるみよしのの 山のあけほの見わたせば

もろこし人もこま人も やまとごころになりぬべし 頼山陽

古陵松柏吠天鷗 山寺尋春春寂寥

眉雪老僧時輟筆 落花深處説南朝 藤井竹外

などは最よく人口に膾炙してゐる。

名士の紹介

耶馬溪は頼山陽によつて名高く月ヶ瀬の梅は拙堂の遊記で有名にされた。古來名士會遊の地遂に詠唱歌唄の材となること東西比々皆然りと謂つてよからう。

山吹の名所に井出の玉河と云ふのがある。これは山城國綴喜郡玉水驛の傍から木津川に落ち合ふ些やかな流れ——流れと云つても天上川で平素は殆ど水はなく河床は地盤よりは一尺も高いので一名を水無川と云ふのだが、こゝが有名になつたのは、蛙のせいもあらうし棟棠のせいもあらうが、何よりも有力な導火は寧樂朝の權臣橋諸兄が別莊をつくつた

り寺を建てたりして手入をしたことであつた。棟棠なども諸兄が命じて移植させたものが多かつたと云ふ。鴨長明の無名抄に

井手の山吹並 かはづ

或人語りていはく。事の縁ありて井手といふ所にまかりて、一宿つかまつりたる事侍りき。所の有様、井手の流れたる體、心もおよび侍らず。かの井手の大臣の跡なれば、ことわりなれど、河に立並びたる石なども、十餘丁ばかり、さのみやは遠くたておきけん。石毎にたゞなほざりの如くは見えす。……………

井手の山吹とて名に流れたるをいと見え侍らぬは、いづくにあるぞと尋ね侍りしかば、さる事侍りかの井手の大臣の堂は、一年焼け侍りにき。その花の輪はこがはけの大きさにて、幾重ともなく重りしなん侍りし。それをさやうに申しおきて侍るにや。又かの井手河の汀につきて、ひまもなく侍りしかば、花の盛には、黄金の堤などをつき渡したらんやうにて他所にはすぐれてなん侍りし。云々

因に六玉河は何れも歌枕になつてゐるそれは左の六ヶ處である。  
一、井出の玉河（こゝのもの） 棟棠、蛙、（新古今 俊成）

駒とめて猶水かはむ山吹の 花の露をふ井出の玉河  
二、野路の玉川（近江栗太郡老上村） 萩 （千 載）

あすも來む野露の玉川萩こえて 色なる波に月宿りける  
三、搦衣の玉川（攝津三島郡三ヶ牧村） 砦 （千載 俊頼）

名士の紹介



四、高野の玉川（紀伊高野山）水

忘れてもくみやしつらむ旅人の 高野の奥の玉川のみづ （風 雅）

五、調布の玉川（武蔵）晒し

調布の晒す垣根の朝露に 貫きとめぬ玉川の里 （定 家？）

六、野田の玉川（陸前宮城郡）

夕ざれば汐風こして陸奥の 野田の玉川千鳥なくなり （新古今 能因）

實際の名勝地 三景、八景、四十八瀧と云ふやうな目で全國到る處にある我邦の名勝地は、今枚舉の煩に堪へない。余は今机上に國際寫眞畫報を擴げる。昨十三年七月十日發行「山水百景」と云ふのがあるのを繰る。輯められた百景には、十和田、妙義、犬吠崎、梅ヶ濱（日向）、保津河、青島（宮崎）、錦浦（熱海）等天下の絶勝ばかりである。あし（脚）もなければあし（錢）もない。この一帖を繕いて折々想像的旅行をする。此等のなかには近頃有名になつた土地もあるが大抵歌の一首や俳句の一句位咏まれてない處はない位である。

その一好例としてこゝに富士山を探る。この山の噴火したのは事實いつ頃か知らぬが紀には孝靈即位四年とある。一夜の中に富士山が盛上つて反對に近江の方には琵琶湖が凹んだとも謂はれる。伊勢物語には  
時しらぬ山はふじの嶺いつとてか かのこまだらに雪のふるびん  
とある。都良香が富士山賦には煙の噴き出てることがつくられてある。處がこれとあまり隔てのない古今集の序（延喜五年）には「今は富士の山も煙たゝすなり長柄の橋もつくるなりときく人は云々」とあつて息火山になつたらしい。

國文學では早く萬葉の山部赤人の長歌並に反歌によつて有名になつた。

天地の別れし時ゆ 神さびて高くなふとき するがなるふじのたかねを 天の原ふりさけ見れば わたる日のかけもかくろひ 照る月の光も見えず しくももいゆきはかり 時じくぞ雪はふりける かたりつぎい ひつぎゆかむ ふじのたかねは

反 歌

田子の浦ゆ打いでてみればましろにぞ ふじの高嶺に雪はふりける

これは富士の嶺の崇高美を平明に瀟洒に云つてのけたやうな趣があるが、なほこの峰の莊嚴雄大な趣を形容したものとしては同じ集の「なまよみのかひの國云々」の長歌である。

富士見西行と題目までつけられた西行がこの山に見いつての咏は寧ろ主觀詩になつて

風になびく富士の煙の空に消えて ゆくへも知らぬ我思かな  
降つて近世元祿以後の秀咏では下河邊長流の

富士の嶺にのほりて見れば天地は まだいくほどもわかれざりけり  
を始め

富士の嶺のふもとをいでてゆく雲は 足柄山の嶺にかゝれり 賀茂真淵

足柄の神のみ坂を越えてしも なほ富士の嶺は雲井なりけり 橘 千蔭

心あてに見し白雲は麓にて 思はぬ空にはるゝ富士の嶺 村田春海

富士の嶺を木の間くゝにかへり見て 松の蔭ふむ浮島が原 香川景樹

實際の名勝地



千度見て千度めづらし雲風に 姿定めぬ富士の柴山

千種有功

などがある。而かも是等は衆歌中眞に錦心繡腸とも謂ふべき秀歌でこれ以外富士の歌と云ふものは何百首否何千首あるかわからない。和歌以外俳句にも漢詩にも川柳狂歌にも富士を採つて歌つたものは此亦數知れぬ程ある。韻文以外散文で富士山を見るの記は群書類從中紀行の部だけにでも數種ある位である。若し國文學のあらゆる種類と日本畫のあらゆる畫幅とを集めて富士文藝なるものを展觀しようと云ふのだつたらその有名なものだけでも恐らくは一棟二棟の建物をふさいで餘りあるであらう。事實富士山は周圍山々を統配して我邦としては稀な神祕崇高の美を呈してゐると謂つてよろしからう。

名稱の美によつて有名なもの

音にきく久米の皿山さら／＼に おのが名たてゝふるあられかな

まがねふくきびの中山おびにせる 細谷川の音のさやけさ

古の野中の清水ぬるけれど もとの心を知る人ぞくむ

など云ふ「久米の皿山」は美作國久米郡佐良山村大字皿村にあつて高さ二十尺許の渺たる小丘で上に一寸とした池（月見の池）があるだけだ。その附近に和歌神社（柿本人麿）が建つたのはすつと後のことだ。つまり「さらやま」と云ふ四開口音の名稱が音調がよくて「さら／＼に」の序詞に都合がよい所から歌枕になつたものと思はれる。古今集に美作や久米のさら山さら／＼に 我名は立てじ萬代までもとあり。同じ頃の伊勢の咏に

美作や久米の皿山さら／＼に むかし／＼の戀しきやなぞ

とあり、承久の亂の時後鳥羽院は前掲の一首を咏まれ（これは隱岐遷幸の御途すがらのこと）、元弘の役の後醍醐天皇の御製には

きゝおきし久米の皿山越えゆかむ 道とはかねて思ひやせしとある。

細谷川は備中吉備郡眞金村大字宮内の中山（吉備津彦命の社のある）の麓の溪流で、昔は少しは美しかつたらうが、それとて大したものではあるまい。今日ではほんの些やかな溪流で全く「細谷川」の名の通り細い谷川で而も水は涸れ勝だと云ふが、六音の優美な名稱で之に一音のてにはをつけたら二の句、四の句五の句何處へでも歌語として使はれるので催馬樂に前述のやうに歌つてある外に

動きなき君が御代かな眞金ふく 吉備の中山常磐かきはに 善滋爲政

まがねふく吉備の中山うちとけて 細谷川に岩そゝぐなり 後鳥羽院

など歌はれてゐる。

「野中の清水」に至つてはその所在すらも確かでない。増鏡や播磨名所圖繪では播磨國印南郡に在るとあり、舊説には大和の布留に清水の湧き出る處があつてその水が冷たくて甘冽であつたそれを云ふともある。これも歌語に向く七音の名稱である。

史上の舊蹟 須磨、鈴鹿、逢阪、安宅、不破、清見、勿來、白河のやうに昔關所のあとによく文學の材に採られる

名稱の美によつて有名なもの 史上の舊蹟